

ニ相成候間

鳳臺院様にも御安心被遊候様奉存候左候へハ助右衛門江戸廻り先ッ不用之様ニも有之候得とも若狹守殿いまた發足無之候ハ、海路々上京も可然とへ發足後ニ相成候而も鐵炮洲白金濱町在邸之老若男女及荷物運漕等も有之事ニ付御國許ニ而奉命之通一刻も罷越澤村脩藏列咄合都合能取計候様申聞昨日此元差立候事ニ御座候扱又夷船借受被差下候方ニ相成候得之佐賀關に着岸之筈ニ候間於同所必驚愕不致様兼而及達被置候様存候以上

二月十三日

三宅 藤 右 衛 門  
溝 口 孤 雲

御 家 老 殿  
御 中 老 殿

向々助右衛門儀兵庫迄ハ墨之飛脚船へ乗組罷越候處土州之吉井玄蕃と申者致相船同人儀出京之上之此度天草島ニ而行違及混雜候次第茂 朝廷に持出候筈と申聞候由ニ而右混雜之次第助右衛門に委敷相尋何様其儘ニ而之難相成申談差寄於大政官土州後藤象次郎へ孤雲縣合全林之國論ハク様々々ニ付其邊之儀追々窺之書付も差出候程之事ニ而全出先之間違ニ相違ハ無之候間奏 聞之場ニも相成候ハ、相合吳候様及頼談候處同人見込ニ而之御國議之次第追々御書付ニ而致承知全出先之間違ニ可有之委曲能了解いたし候事ニ御座候以上

二月十三日在京我藩老臣等德川慶喜の依頼せる征東軍中止の件に就きて朝廷に訴願するは却て德川家の爲め不利なるへしと議決す

〔一新録自筆狀〕

別紙ヲ以申達候兼坂態四郎一昨夜着關東より稜々持越候内三道下向之勅使暫御扣ニ相成候様朝廷より御沙汰之儀致盡力候様との一條ハ大政官に御持出ニ茂可相成哉之處慶喜公御恭順之次第大久保逸翁様御口上ニ而ハムとへ減國ニ相成

候而も割腹被仰付候とも朝廷之御處置次第御心得被成候と被仰聞候得共確證迎ハ無之近畿關西ニ采地有之候面々聊無懸念致歸邑候様且幕本已下長髪鳴物停止之ニケ條御恭順之稜目とも可申中々右様之譯ニ而被行候勢ニ無之殊ニ此節者眞之御謝罪有之其議被立下候而茂江戸城迄ハ屹度官軍押詰之模様ニ付持出候而茂無用ニ屬候而已ふも却而御恭順厚薄之論ニわたり御爲ニ相成申聞敷と咄合候事ニ御座候尤越前には御直書出候由其外藝州藤堂土州立花茂此方同様ニ付右藩々之模様次第者取扱茂可有之哉先ッ右之趣申達候已上

二月十三日

三宅 藤 右 衛 門  
溝 口 孤 雲

御 家 老 宛  
御 中 老 宛

二月十三日東海道先鋒紀州藩兵京都を出發す

〔一新録自筆狀〕

〔二月十三日附溝口孤雲三宅藤右衛門より郡夷則宛書翰の一節〕  
今度東海道先鋒之藩々御人數長州之十日薩州八十一日此方様之昨十二日進發相濟紀州之今日之御様子ニ御座候

〔一新録探索報告〕

東海道出兵

- 一大隊司令壹人
- 一中隊司令貳人
- 一小隊司令貳人

- 一士官拾八人
- 一銃隊百六拾人
- 一目附壹人

明治元年



一下役五人  
一斥候貳人  
一醫師貳人  
一小荷駄方六人

一作事方八人  
一陪卒貳拾人  
一夫方之者百八拾人  
以上四百拾人

紀州

二月十四日東奧征討物將參謀及び屬員姓名を示達せらる

〔一新録自筆狀、王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

慶應四ノ二月十四日大政官代ニ而非藏人を以御渡

御親征大惣督 有 柄川 帥 宮  
同 參謀 正 親 町 中 將(公)  
西 四 辻 大 夫(公)  
林 西 郷 吉 之 助  
錦旗奉行 穂 波 三 位 郎  
河 鯖 大 夫  
同 持手 平岡 掃部 權 助  
上田 右 兵衛 大 尉  
河野 宮 内 大 録  
山中 右 近 番 長

山本 左 近 府 生  
橋本 左 近 番 長  
三澤 右 近 番 長  
橋本 伊 勢 介  
富島 在 近 將 曹  
座田 民 部 少 録  
廣瀬 左 兵衛 權 大 尉  
岩垣 大 舍 人 大 屬

改爲

東海道先鋒兼鎮撫使總督

橋本 少 將(實)

同 副 柳 原 侍 從(前)  
同 參謀 木 梨 精 一 郎  
改爲 海 江 田 武 次

同 副 四 條 大 夫(平藤)  
同 參謀 小 林 柔 吉

改爲

東山道先鋒兼鎮撫使總督

岩 倉 大 夫(具定)  
同 副 岩 倉 八 千 丸(具經)  
同 參謀 乾 退 助  
字 田 栗 園

同 副 奧村 鎮撫使  
同 參謀 澤 三 位(具盛)  
醒 醐 少 將(順忠)  
黑 田 了 介  
品 川 彌 二 郎  
聖 護 院 宮  
庭 田 大 納 言(重胤)  
中 山 前 中 將(愛忠)

改爲

北陸道先鋒兼鎮撫使總督

高 倉 三 位(氷祐)

右之通被 仰下候事

增 田 左 馬 進

二月十四日日本藩津田山三郎北陸道先鋒參謀を命せらる  
〔京都並江戸返達御用狀扣〕

津 田 山 三 郎

北陸道先鋒參謀被 仰出候事

二月十四日

明治元年



二月十四日大坂裁判所總督醍醐忠順等大坂西本願寺に於て各國公使と會同し交易通商の盟約を定め且つ近日上京謁見を賜ふべき旨を告ぐ

〔一新録探索報告〕

二月十四日於西本願寺各國公使に東久世様並宇和島侯御應接  
東久世様方

一王政御一新ニ付定約之通彌懇心を御結との事

但京都に被召登 主上御逢被遊候筈

一徳川慶喜御征伐付罪狀書を以各國ミニストルに爲承知御見せニ相成候との事

伊大里 索漏生 佛蘭西 和蘭陀 英吉利 亞米利加 (以下略ス)

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

(慶應四年戊辰二月官版發行太政官日誌第一によりて訂正す)

二月廿六日太政官代に御呼出御渡之御書付

二月十四日午ノ半刻ヨリ申ノ刻マテニ大坂西本願寺ニ於テ醍醐大納言殿東久世前少將殿宇和島少將殿各國公使ト應接ノ始末左ノ如シ

但外國事務掛及ヒ諸藩家老列席

一東久世殿發話我日本政體 王政復古 帝自ラ政權ヲ握シ外國ノ交際モ一切 朝廷ニテ吏請裁判可致旨意ハ過日兵庫ニ於テ布告セシ如ク相違アルコトナシ此節外國事務局ヲ建立シ交易通商一切ノ諸事件悉ク外國事務官ノ裁決ニアルヲ以テ今日改メテ朝廷守護ノ列藩ト共ニ各國公使ニ會同シ此盟約ヲ定ム自後普ク日本人民ト外國人民トノ交際厚ク誠實ヲ證

シ互ニ疑惑ナキヲ以テ主意トナサン故ニ大小ノ事件外國ニ關係スルノ務ハ外國事務局ノ專任ナルヲ以テ我等ニ就テ帝ニ建言スルヲ要セヨ

各國公使曰先般兵庫ニテ布告アリシ其證明白ニシテ今日改メテ列藩會議 帝普ク政令ヲ下シ兩國人民ノ爲メ廣ク信睦ヲ求メ互ニ誠實ヲ旨トナスハ我各國ニ於テモ兼々渴望セシ處ニシテ感悅之至ニ堪ス自今 朝廷 帝ヲ以テ日本ノ主府ト仰キ萬事其政令ヲ奉セントス

一亦曰此度萬國ト我カ 帝ト條約ヲ改メシ上ハ各國公使エ 帝自ラ對面シ盟約ヲ立ン故ニ不日上京アルヘキ旨各國公使エ可申入 帝ノ命ヲ奉シ候

公使曰恐入候談合ノ上明後日否可申上

一亦曰當今戰爭ノ後ハ京攝及ヒ諸所ニ鎮撫ノ師ヲ出シ過半其政令行レハ既ニ各國ノ諸侯ヲシテ徳川慶喜征討ノ師京ヲ發セシ上ハ不日ニ其成功アルヘキハ勿論ナリ自ラ横濱箱館外國人在住ノ場所ハ朝廷ノ官吏ヨリ人民安堵ノ令ヲ下スヘシ則慶喜ヲ征討スル事實明白ノ罪狀書面ヲ布告スヘキナリ

公使曰慶喜ヲ討伐ノ師既ニ京師ヲ發セシ上ハ關東ノ形勢安心ナリカタシ若早ク 帝ニ拜謁スル能ハスハ速ニ浪華ヲ去リ横濱ニ在ル人民ノ爲メニ彼地ヲ鎮靜センコトヲ欲ス

一亦曰明日中ニハ上京ノ日限申來ルヘク夫マデ滯坂其上進退セラルヘシ

公使曰帝ニ謁スル期限ノ日數ヲ確定シ以テ此事ヲ約セン

一亦曰今日必相分ルヘシト雖彌確定スルハ明十五日ト定ムヘシ

然ラハ明後十六日十字ノ朝米國公使館ニ於テ再會シ各般ノ諸事件ヲ約定セン  
右之通ニテ相濟申ノ刻各國公使退出セリ



〔京都並江戸返達御用狀扣〕

〔二月十八日付在京村上彈助列より來狀一節〕

一木村得太郎兵庫表より一昨十五日歸京ニ相成申候最前下坂被仰付候節者定而佛人より徳川氏和議爲媒約致入港たる儀  
ト三條様御始御考察ニ候處一切左様之儀者渠より申出茂無之大坂西本願寺ニ而各國ミニストルへ外國總督之字和鳥侯  
を初薩藩徴士小松帶刀岩下左次右衛門應接之節木村を初大藩之重役も列席ニ而一人々々之名前を及披露今度王政復古  
改而和親御結之儀御布告ニ相成且又徳川氏罪狀稜々有之候付此節御征伐被仰出候段も御布告ニ相成近々朝廷に被召候  
儀茂御布告各太慶いたし候模様之由其外何そ相替候儀茂無之由木村より承申候

二月十四日在京本藩吏員は五畿内及び各道舊幕府代官支配地取締を各藩に命せられたる由を藩政府へ報告す

〔一新録皇令、王政復古帳〕

辰二月十四日京發 同廿四日夜着

舊代官支配地之分新ニ諸藩に取締被仰付記

諸侯是迄徳川氏ノ預之々所ハ御取揚ケ無之由

〔右ハ表紙也、一新録皇令に據る、以下の文は王政復古帳を木とす〕

一丹波國元代官宮崎達太郎支配地當分取締被仰付候

福知山

朽木近江守

一但馬國元代官宮崎達太郎支配地并生野銀山等當分取締被仰付候

仙石讚岐守

北陸道

一越前國元代官龍見内膳支配地當分取締被仰付候

越前少將

五畿

一山城

〔柳〕永井日向守御請

一大和

〔植〕田村攝津守御請

一河内

〔北〕高木相模守御請

一和泉

〔岡〕邊部筑波守御請

一攝津

〔改櫻井〕松平長門守御請

是迄徳川氏領地年貢錢穀等并高附帳其外賊徒隨從之旗下所領等有之向之悉取調早々可差出事  
右五畿内十藩早々順達止より可返上之事  
右之通九日申渡

山陽道

一王政御一新付而即今之處山陽道

取締被仰付候間兩藩申合諸藩 備前

之事實探索之上巨細可致言上御 藝州

沙汰候事

但諸國中是迄天領と稱居候徳川采地其他賊徒之所領等別而入念取締可仕右者従前苛政ニ苦ミ居候哉之趣

明治元年

相聞患難疾病相救之道茂立兼候付先無告之貧民天災ニ罹リ困難之者にハ夫々御取糺之上御救助も可有之候間右之旨申諭億兆人民王化ニ服候様精々盡力可仕御汰沙候事

一代官支配地所石數人數帳地圖面等携早々上京可致若代官立去り候地所之最。之國主當分御預可申尤石高地

圖面等早々可差出候事

一同文

〔因〕津和野州

一四國同文

〔土〕宇和島州

東海道

伊勢國元官代岩田鐵三 勢州龜山

郎多羅尾主稅支配地今 石川宗十郎御請

般御領と相成候間取締 同 蕨野

被仰付候 土方翠千代同

東山道

近江國元代官石原清一 江州水口

郎多羅尾主稅支配所今 加藤能登守御請

般已下右同斷 同 西大路



市橋 下總 守同	備中國元代官櫻井久之	備中新見
同 大森	助鍋田三郎右衛門支配地右同斷	關 伊勢 守
最上 駿河 守同	同 淺尾	同 同 同
山陰道	備後國元代官鍋田三郎	備後福山
丹波國元代官小堀數馬	右衛門支配地右同斷	阿部 主計 頭
小堀右膳支配地今般	南海道	讚岐國元代官櫻井久之
右同斷	同 笹山	讚州丸龜
青山 左京大夫	同 笹山	京 極 佐渡 守
石見國元代官鍋田三郎	長州	伊豫國元代官支配地右同斷
右衛門元支配地今般下	毛利 大膳 太夫	加藤 遠江 守
已下右同斷	山陽道	東山道
播磨國元代官齋藤六藏	播州龍野	美濃國元代官岩田銀三
橫田新之丞支配地今般	脇坂 淡路 守	郎支配地右同斷
已下右同斷	同 赤穂	同 郡山
美作國元代官櫻井久之	森 美作 守	同 郡山
助横田新之丞支配地今般	美作勝山	同 郡山
已下右同斷	三浦 備後 守	同 郡山
西海道	筑前國元代官窪田治部右衛門支配地右同斷	筑前秋月
筑前國元代官窪田治部右衛門支配地右同斷	黑田 甲斐 守	

豐後國元郡代窪田治部	豐後國	肥後國元郡代窪田治部	細川 越中 守
右衛門支配地右同斷	中川 修理 大夫	右衛門支配地右同斷	日向國元郡代窪田治部
	同 森	日向國元郡代窪田治部	薩摩 少將
	久留島 伊豫 守	右衛門支配地右同斷	東山道
	肥前平戸	飛騨國元代官新見内膳	越前大野
	松浦 肥前 守	支配地右同斷	土井 能登 守
	同 島原		
	深溝 主殿 頭		

二月十四日在京本藩老臣は徳川慶喜謝罪書勝安房建白書等に關する内國事務局内議の趣を報し且つ英式砲術家平元良藏聘用並に貢士選定等の事を藩政府に照會す

〔一新録白筆狀、王政復古帳〕

別紙を以申達候慶喜公御謝罪等之儀付而別紙兩通今日於大政官内ニ越邸より孤雲に見せニ相成候ニ付則寫<sup>人落カマ、</sup>御披見申候然慮別書ニ差進候勝房州書付ハ何方ノ歟大政官へも差出ニ相成魯西亞此慮ニ乘し不易計策も有之候ハ、今日之變動ニ可致百倍殊ニ前文之通御謝罪ニも相成候事ニ付東征ハ被差止 皇國御維持被爲在度と内國事務局にて之申談候得共いまた持出之時ニハ至ざる様子ニ御座候乍去御心組も可相成哉と先入御耳置申候<sup>(勝房州書付とあるは正月十八日)</sup>一江戸麻布居住平元良藏と申所浪人英式之砲術江戸一番功熟ニ付御雇入ニ相成度由先日池部啓太より内意有之候へ共未々確く評議ニも及不申内兼坂熊四郎<sup>若殿様達</sup>御内聽候處爪打込ニ置候様 御沙汰被爲在候由右之方今之時躰西洋流御倡兵制迄も御改革可被爲在 思召ニ付御雇入ニ相成候ハ、逸後御爲ニ相成可申然ニ御國へ御呼下ニ相成一統



之氣受等何程ニ可之有可哉御見込之趣早々被仰越候様存候

一貢士三人之内一人ハ爰許詰込之内カ可被仰付哉と別格ニ申達候通ニ而段々及吟味候へ共寸斗可然人物も相詰居不申候  
付三人共於御國許御撰被差登候様有之度候

右之通追懸爲可得御意如斯御座候以上

二月十四日

三宅 藤右衛門  
溝口 孤雲

御家 老殿  
御中 老殿

慶喜相續以來乍不及勤王之道心を盡し罷在候得共非才薄徳事々不行届加之近日之事端奉驚 宸襟候次第ニ立致り深奉  
恐入候付謹懼罷在伏而奉仰 朝裁候此段御 奏聞被成下候様奉頓候以上

二月

慶喜

副啓今般頭撫使御東下之由相聞自然關内江戸市中迄茂御越ニ相成候様ニ而は兼々鎮靜方ハ厚ク申付置候得共人心動搖  
過激之輩如何様之儀可相生哉茂難計深ク謹懼罷在候旨意を失候様成行候而之深奉恐悚候間可相成候之右鎮撫使御東下  
等之儀無之様御含之程御頼申候以上

二月

慶喜

大藏 大輔殿

(王政復古帳に右慶喜の書の前書に「二月十四日大政官ニ而春嶽公ハ孤雲に御渡之由にて秋吉又助持參相達」とあり)

二月十五日外國公使に參朝を命せらる、旨布告せらる

〔一新録自筆狀、王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

先般外國御交際之儀 留慮之旨被 仰出候ニ付而者萬國普通之次第を以各國公使等御取扱被爲在候然ル處此度御親征  
被 仰出不日 御出衆被爲遊候ニ付而者御餘日も無之御事ニ付各國公使急ニ參 朝被 仰付候ニ付此段可相建被  
仰出候事

〔一新録探索報告〕

一昨十五日惣出仕被 仰出參内右之候處追々外國人 朝廷ニ被爲召候御書附拜見被 仰付由全頃日薩長藝士肥後五藩よ  
り右參 朝可被 仰付と御建白有之候故ニ此仕合ニ相成候半と奉存候

二月十五日右柄川大總督宮征東の爲め京都を發せらる

〔一新録探索報告〕

一大惣督有柄川宮様始正親町三條殿其外様東海道御一手ニ而昨十五日御出陣ニ相成申候就而之廿日頃名古屋表御着然上  
ニ而之夫々御軍配可被相立候間大底來月中旬頃御入府ニも可相成候と奉存候

〔全書〕

先陣惣督 右柄川帥宮

附屬 筑前

軍事惣督 正親町三條殿

錦旗守衛 津和野

交 野殿

錦旗守護 河 鯖殿

右之通當月十五日御出陣御内勢に千餘之軍勢尤五百人  
餘筑前カ出馬ト相見申候

穂 波殿

〔防長回天史第六編上〕



官軍東征(抄略)

二月十五日天皇有栖川熾仁親王ニ錦旗節刀ヲ授ケ即日副督正親町中將參謀西四辻大夫西郷吉之助林玖十郎ヲ隨ヘ京師ヲ發シ陸路進軍筑前兵津和 三月五日駿府ニ至リ駐營ス

二月十五日九州鎮撫總督澤宣嘉長崎に至り初めて西役所に入る

〔鶴崎長崎返達御用狀扣〕

二月十五日宮村庄之丞より同十七日着

九州鎮撫總督澤前主水正様長崎鎮臺として昨日當港御着岸被爲在今朝五半時過御供揃ニ而大波戸より御揚陸御行列御警衛等之儀は昨日申達置候通ニ而諏訪社御參拜御相濟九時西役所に被爲入候間會議所出席之各藩御出迎として罷出申候畢而於西役所御拜謁申上候處御意之趣ニは先般以來當港鎮撫之儀ニ付而は皇國之御爲是迄各藩申談盡力大義ニ被思召候段御意有之明日よりは各藩一統會議所出席ニおよび不申御用向之節々御呼出有之且萬司見込之趣有之候ハ、可申出旨被仰付候御意之趣は澤村尉左衛門安井左平次も同様ニ有之候

〔中略〕  
一御總督様御供之名前別紙之通ニ候間則相達申候此外長藩井上聞多と申者奉 朝命惣督附屬之參謀ニ而別途被差添下向有之候(下略)  
一此方様御人數之儀は今日爲御警衛大波戸に出張相固無異儀御用相勤申候(下略)  
一長崎鎮撫大村丹後守様にも御總督御同船ニ而一同今日御揚陸ニ相成申候  
右之件々片道早打飛脚を以申達候間御模様至急ニ被仰越候様有御座度存候以上

家司  
米川 信濃  
用人

兵隊長  
若林 和泉  
近藤 右京

高瀬 美濃  
目付 石坂 重  
近習 黒川 國衛  
小山田 貞之進  
布施 銀平  
高橋 虎太郎  
高橋 民之助  
馬廻 佐々木 三郎兵衛  
伊藤 禮吉  
高田 兵衛  
永屋 民部  
毛利 京三郎  
松島 主税  
藤村 精一

右之通御座候以上

笹井 兎三郎  
玉川 柳之助  
西川 鐵馬  
山谷 四郎  
外ニ 六人  
小荷駄方 名前未不分  
下田 佐太郎  
比崎 雅樂  
手付 山田 半次郎  
長州 下部三人  
參謀 井上 聞多  
家來四人

〔嘉永年間以降記録〕



從崎陽加屋榮太列林藤次に差送候書狀之内抜書

一當時長崎に御越ニ相成居候澤主水正清原宣嘉と云之癸亥八月長州に脱走後但馬潜行候へとも失計不得止伊豫小松一柳少一藩中潜匿翌甲子七月十九日以前ニ之再び長州に歸着戊辰正月廿三日歸朝廿六日参内而外國事務惣督九州鎮撫惣督大村侯長崎警衛奉勅浪華より肥前軍艦同船兵庫一泊佛夷に應接湊川楠公之御慕ニ参拜一首之詠歌  
涙さへおきとめかねつ湊川いままなかれをくむとおもへハ

一長州藩志道聞多井上願ニよつて瀨西参謀 勅許

一二月十四日澤宣嘉朝臣着崎同十五日上陸諏訪社参詣警衛大村侯を初其外出崎之諸藩上隨從夫より西役所着

雜掌 米川信濃田名角 用人近藤右京以前姉小路内元 高瀬美濃田名平 伊東禮吉 佐々木三郎兵衛 布施銀平 高橋

民之助 下田佐七郎 高橋虎太郎 以上皆秋田藩上舊冬江戸藩邸ニ而出頭を斬盡ニ而脱走

右之外久留米眞木直人和泉弟 佐田素一郎此兩人ハ久留米脱走也

一當主水正官種ニも見習ニ御同道御下向也

二月十五日舊幕臣中條金之助等東叡山覺王院に對し恭順謝罪せる慶喜を寛典に處せらるへく輪王寺宮より朝廷に執奏あらむことを歎訴す

〔一新録探索報告〕

戊辰四月廿三日藩歩御小姓持參

奏歎願口上書

碩徳欣恭之至徳川家臣中條景昭以下同志之者一同御執當覺王院座下獅子下ニ奉懇訴候當正月三日於伏見表干戈ヲ動ス儀ニ付蒙 勅勘徳川家御征伐被 仰出近日海軍路より 天旗御進發相成候旨奉拜承候尙其後 御親征被爲在候 御沙汰之趣奉伺候徳川家蒙 天譴候方恐多も兵馬之際ニ 玉體ヲ奉勞候御事ニ至リ殊更大罪不堪恐懼之至ニ候固方於徳川

家 王室ヲ尊崇 宸襟ヲ奉安度思召ニ御座候處諸事行届キ不申終ニ今日ニ至候段深奉恐入候儀ニ而申上様も無之仕合ニ御座候右等之次第ニ而徳川家臣子之上ニハ須臾も猶豫難仕候間謹而 王室に奉拜謝度心情ニ御座候へ共九重深遠攀昇之路空敷草叢鳴咽涕泣罷在候處御征伐之 宸勅嚴急不日ニ 天兵雷下相成候趣密ニ相伺徳川家臣子之者共一刻も不安儀ニ御座候今般徳川家ニおゐて恭順罪ヲ御當山ニ奉待候事ニ候へハ何卒御山内之御方々様格別之御信愛ヲ以當御山内 御門主様大慈大悲之御心ヲ被爲發連ニ御上洛御征伐御猶豫相成候様 王室に御歎願被遊被成下度不堪懇願候萬一王師御下向ニ相成候ハ、諸國人民塗炭之苦を不免 上様に自然可至哉 王室御仁徳之政ニ被爲障候様切ニ過慮仕候將亦内憂差起候方詰リ夷狄無懼之貪心ヲ開キ後來 皇國之金匱缺候様ニも至候職是又大ニ憂慮之至ニ奉存候何卒景昭等通々之心情御憐察被成下 御門主様御上洛徳川家寛大之御處置相成 皇國一和之上奉安 宸襟隨而御國內之業生永ク皇恩ニ優浴し海外百蠻 皇威ニ畏服仕候様奉伏願候景昭等懇願之始末被爲没分御聞上相成候ハ、難有仕合不堪供其之恩奉存候涕泣血謹而奉歎願懇訴候景昭等百拜頓首

二月十五日

中條金之助  
松岡萬  
大學地喜衛門  
關口長輔

外同生之者百有餘人百拜謹言

〔關口隆吉(長輔)著  
默齋隨筆〕

内府公の上野御謹慎と云ふ事行はれてより、其趣意柄は普く觸れ達せられ、上下一同に其御趣旨を奉じ、御誠意の貫徹すべき様にとの寛望を懐かざるはなかりき。然るに、陸軍に従事する諸役々に於ては尤も此事を悦ばず、依然戰

明治元年

一四七



關の説を主張する歩兵、撤兵、奥詰銃隊を始として、頭役たるものは、日々集會評議を凝らしたり。是より自然旗下の人々黨派を分ち、主戦論者は終に脱走と云ふ事に歸し、又恭順論者は皆謹愼して、朝廷寛大の御處分あらんことを希ひ、百万周旋したりける。是より先き田安家に於ては、輪王寺宮に詣り、嘆願の事御周旋ありたき由を願ひ奉りしかども、宮には御聞届なしとの趣を傳承したりければ、其事の實否を質さんとて中條金之助と共に大久保一翁の家に至りける。大久保曰く、世間の申す如く、全く宮には御聞届なきことは誠に不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止の事なり。余輩曰く、宮には皇族の御身柄にも被爲在ば、只一應二應の願にては未だ其禮を盡したりと謂ふ可からず。予輩、明日より祇候して猶ほ嘆願し奉るべし。一片の精神必此事を成就す可し。一翁大に喜ばれ、兎に角に、諸君の御心配こそ願はしけれと申たりき。其翌日、中條金之助、山岡鐵太郎、松岡萬、相原安次郎を伴ひ、上野の寺方に由緒ある小島銀之丞といふ者を案内として、先づ覺成院に至り住僧に面會して宮に嘆願仕度との一事を申出たり。(中略)余輩も覺成院の僧心淨房と共に、覺王院に至り手代りと稱する僧某に面會するを得たり。余輩は當宮の御動座ありて、京都に啓せられ、内府公謹愼恭順の誠意を上奏させられて、寛典の御處置あらせられ度きよし、執當職の取扱ひを請ふ趣意を述べたり。僧某之を執當職に取次ぎたれども、執當職は何分宮様へ上申し難しと報じたりき。余輩の曰く、最早止むを得ざる儀なれば是より直々宮の御玄關に參上して、嘆願し奉るべし。若し又、御聞届なきに於ては、爲すべき様なれば、猶死を以て何處までも請願するより外なし。斃而已むとは今日の決心なりと。其場を立ち去らんとせし際、奥の方より一人麻上下を着せし侍のもの出で來り、内玄關より外面に出でんとせしが、又後に立戻り、余輩に對ひ、貴殿等は何れの方なるや、又何事にて當院に參られたるやと問ひしゆゑ、余輩は當宮に嘆願の筋ありて參院したるなりと申述べたり。彼の侍は、余輩の決心辭色に顯はるゝを見て、暫く待ち給へかして、再び奥の方に入りたり。暫くありて復出で來り、貴殿等請願の件覺王院執當に申し陳べ置きたれば、必ず願意貫徹すべければ、決して短慮の事ある間敷様にと忠告したり。余輩其厚意を謝し、姓名を問へば、自分は細川越中守使者志方何之助(阿馬)とぞ答へける。また暫くして

寺僧來り、御申出の趣は、執當に於て心配致すべきに付き、書面を以て御申立然るべしといふ。余は直ちに草稿を起し、山岡之を淨書して寺僧を以て執當に差出したり。

寡君の天譴を蒙りしは彼此辨疎候は、却て不堪<sub>ニ</sub>恐縮<sub>一</sub>候へ共、去年政權を奉還仕、平生尊王の志厚く、毫も朝廷に對し奉り、恭順を闕き候事の舉動ある間敷宮に御座候。然るに三卿の列より、直ちに宗家を相續致し候より、威信未<sub>ニ</sub>相立<sub>一</sub>右故自然一般駕御の方、不行届の事多く候へば、今般上京云々の事に付、會桑を始め、旗下血氣輕躁の徒、妄りに多人數を引卒、途に上り候より、不<sub>レ</sub>圖も、伏見、山崎の大變を生ずるに至り、朝廷に對し、深く恐入る次第にて、今更可<sub>ニ</sub>申上<sub>一</sub>様無<sub>レ</sub>之、會桑は、即時歸國謹愼申付け、旗下の上、重立候者はそれ<sub>レ</sub>處分可<sub>レ</sub>致は勿論、自身赤心を表するが爲め、當山大慈院は祖先墳墓の別當たるを以て、入院謹愼罷在候儀にて、平生尊王の志に矛盾候儀は、家臣共の所爲よりとは申ながら、畢竟自身駕御の道を失ひ候儀、深く慚愧罷在候段は、此頃、一同へ示し候趣意書にて、明白に御座候。臣等一同恐懼の至りに堪へず、京都之御評議は、如何有<sub>レ</sub>之候哉、奉<sub>レ</sub>窺様も無之候へ共、私かに思考仕候に、近日錦旗東に靡き、幕軍に向ふ可き哉、臣等一同、日夜痛心罷在候。抑も當山之儀は、徳川創立の靈場、諸房の交義も薄からず、殊に宮様之御由緒も一通りならざる御儀、且つ亦御法體之御身柄にも、被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>在候間、佛菩薩、大慈大悲之御心を以て、關東征討を停られ、萬民干戈之災を被らず、徳川家宗社血食の恩典を蒙り候様、厚き御配慮の程、偏に奉<sub>レ</sub>懇願<sub>一</sub>候。是れ臣等一同の素願に御座候。御聞届被<sub>レ</sub>下、御上京之事に相成り候は、獨り臣等の幸のみならず、一切衆生の不幸、不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之と奉<sub>レ</sub>存候。此段宣敷御上進被<sub>レ</sub>成度不堪<sub>ニ</sub>悃願<sub>一</sub>之至<sub>ニ</sub>云々

寺僧は、この請願を携へ、奥の方に入り、や、暫くして出て來り、御申立の趣き、直に執奏可<sub>レ</sub>致。去ながら、宮の御身分なれば、唯旗下數名よりの御願丈にては、御動座、御六ヶ敷につき、田安殿を初めとして、御連枝、御譜代大名より、更らに御願出相成候様、周旋致す可しと、執當職より御内話に及ぶなりと申述べたり。余輩は委細承知致し



候。尙此後とも、宜敷御取持ち可被下といひ、寺僧に別れ、(中略)大久保一翁に復命し、田安初め宮様に願書を差出されんことを申したり。其翌日に至れば、諸大名に、此旨を通告したれば、其又翌日には、追々諸大名よりの願書陸續と宮に出て、遂に御上京相成事に決し、内々仰せあり、来る廿日を以て御發駕あるべきにつき、精銳隊中より、兩人供奉致すへしとの命令なれば、川井政太郎外一人を隨從せしめたり。頓て廿日の日となり、朝の四つ時頃に至り宮様は、上野御出發あり、榊原式部大輔等御輿を護衛し奉れり(中條等が願書は一新録探案報告と黙齋隨筆と全然一致せ察せらるゝを以て此に並べて掲げたり)

二月十五日土州藩兵隊泉州堺に於て上陸せし佛國人を擊攘す。

〔一新録自筆狀〕

追啓申達候一昨々十五日佛蘭西人少ハ上官之者ニ茂可有之兵庫方泉州界に遊山旁罷越彼是測量杯いゝし居候を土州臺場之内に追懸天保山迄之間ニ而致炮發三人即死三人行末不相分何を海没ニ而もいたしたる哉六人手負候由依之神戸兵庫あたりは上陸致居候外國人ハ中ニ不及容堂侯病氣ニ付而療治ニ罷出居候夷人迄茂悉船ニ呼取 朝廷之御政事ニ相成候上之何事茂是迄ハ雲泥可致相違相樂居候處豈料や在職も相成居候土州侯之家臣さへ右之通ニ候得者其餘之藩々猶更ニ被考實ニ禽獸ニ均敷國俗に憤り一昨十六日朝五ツ時迄下手人出し不申候ハ、何レ茂本國に罷歸國王ニ可申達ニ申出候得とも素々右期限迄時明候様も無之同日夕刻ニいたり英蘭之外之各國之大艦都而致出港候段注進有之候山誠ニ笑止千萬追々軍艦にて茂差向談判之時ニ相成候ハ、其應接六ヶ敷ト三職業方御懸念之趣孤雲得太郎太政官ニ而承り罷歸申候右之書付等も無之ばつといたし候事柄ニ候得とも此節御直書被下置候御趣意猶更乾し致貫徹不申候而之難相成旁爲御合入御耳置申候以上

二月十八日(廿六日夜 龍木齋)

三宅 藤 右 衛 門  
溝 口 孤 雲

御 家 老 宛  
御 中 老 宛

尙々界ニ而佛之マタロス共傍若を働候付夫を憤り少々及暴發候との趣ニも致承知何を事實ニ候哉及御確報ニ候譯ニ之無之候間左様御聞置可被下候以上

〔全書〕

戊辰二月

土人佛夷殺害之末探案書何某謂取ト申儀ハ書面ニ不相分

泉州堺當時土州侯之御請持ニ而御固御人數も相詰候由之處去ル十五日佛人大坂邊方上陸拾壹人堺に罷越此内貳人土官之由酒店へ立寄酒を給申候末及亂妨候共又土州人に途中ニ而無禮いたし候とも兩説有之委敷相分兼候山右之通ニ付土州が鐵炮ニ而打候處四人即死七人之行衛相知不申候段佛本船へ十六日ニ相聞候由ニ而直ニ吟味ニ佛人同所に參候得共七人共ニ相見不申候様土州が生捕置爲申との疑有之十七日迄ニ不殘返不申候ハ、土州に軍艦を差向及亂妨候段外國懸之内ニ訴出候由ニ而御吟味ニ相成候處右七人之打殺候而川ニ沈置候間悉死體を引揚相渡候由佛人之見物位之事ニ而參り炮器類所持いたし不申候故手向候者無之其末贈金之談判有之候得とも聞入不申候是迄追々贈金受取候事等説得茂有之候處以前之儀之被殺候相手不相分故不得止贈金受取候得共此節之様ニ相手顯然相知居候上之決而聞入不申由ニ付出張之土州重役兩人切腹其上に被殺候十一人之家内に育料とか申唱ニ而拾五万トル御遺之上大坂ニ而之土州御留守居佛艦に參り眞平とふ相斷左候而佛船土州に參り候上土州侯御留守居同様之御斷ニ而相濟候由ニ御座候事 右國友式右衛門方承申候事

〔谷干城遺稿泉州堺事件〕

明治元年



明治元年泉州堺警衛の 朝命を奉し出張致し居りたる處二月十五日佛國人妄りに大坂より紀州路に通行すとの報に接し六番隊長箕浦猪之吉八番隊長西村左平次各一小隊を率ひ出張軍監杉紀平太、小監察生駒靜次と共に大和橋に至りしに果て佛人通行に出逢ひ軍監小監察より通辯人に對し其通行の理由及び政府に於て内地旅行を許諾せしや否やを詰問するも應答甚だ曖昧なれば堺路に通行を許さず之を浪華路の如く追ひ返せり而て兩隊は皆歸陣して休憩せし處夕七ツ時頃堺の市民周章來り報す只今佛人突然上陸し市中に横行亂暴せり直に救助あらん事を請ふと隊長箕浦、西村は直に隊卒を率ひ現場に出張せし處人家に押入社寺に亂入し傲慢無禮至らざるなきを以て隊卒を指揮して其亂暴を制止すと雖も通辯一人も伴はざるを以て言語通するに由なく不得已捕縛せんと決せし折しも軍監より制止の下知あれば如何ともする不能尙兎や角く尋問中佛人は隙を窺ひ逃走す而して一人の佛人我軍旗を奪ひ逃走す諸隊之を追ふ佛人等已に小船に乗り陸を離れんとす而して小船にある水兵は我隊に向て短銃を放發す於是乎最早是迄なり神州の耻辱なり本藩の耻辱なり撃つ可しとの一令に彼の小船を目標けて一齊に放撃せり彼れ彈丸に中り海中に陥るもの數名あり遂に小船は辛くも本船の如く逃去せり兩隊は引て歸營せり已にして 朝命あり本隊は大坂に引揚ぐべしと直に兵を纏め長堀の邸に歸り命を待つ

二月十六日字漏生人上京につき南禪寺を其宿所に當て同寺内に宿營せる諸藩に其警衛方を命せしむ

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

二月十八日村上松本より二月廿六日

朝廷御軍令之書付寫一通字漏生人南禪寺旅宿ニ付而同寺に御書付寫一通手ニ入候付差進申候以上

二月十八日朝廷御軍令之書付は二）（月十八日の條に掲ぐ）

安田 孫 右 衛 門 殿  
河 口 權 兵 衛 殿

南 禪 寺

字漏生人計り上京之管故本坊計ニ而寺内末寺等明候ニ及間敷末寺ニ宿陣致居候諸藩之直ニ字漏生人宿院警衛被仰付候事

今度外國人上京御用懸

後藤象次郎

大久保一藏

木戸準一郎

廣澤兵助

中根雪江

右之面々は可承合事

南 禪 寺

今度外國人上京參 内被免候ニ付字漏生人滞留所に被仰付候尙委細之儀者外國懸に可承合事

但明十七日書時迄ニ明渡し候様可仕候事

二月十六日日本藩世子護久書を在藩老臣等に與へ巖に松平慶永外四名連署建言せし趣旨に基き藩内一般に誤謬なからしむへしとの意を諭示す

〔一新録自筆狀、若殿様左京亮様御帶坂中日記、王政復古帳〕

若殿様御直書意

一筆中候開國領國之兩儀ハ癸丑以來神州感亂之濫賜ニ候處其後逐年萬國之形勢相分今日ニ至り候而者連茂攘夷領國を以御國體可相立様無之其儀者 朝廷に茂疾夕御開通有之候御様子ニ候得とも更ニ斷然タル御處置茂被爲出來兼候内今般天下之大政一に歸し更始一新之御時節と相成候ニ付而者愈以一刀兩斷萬世不拔之大典御確定無之候而者如何成行候茂難量依之向後者渠か參 朝を茂被命億兆之人民をして方向する處を知しめ給度旨越前土州薩州藝州及我等連名ニ而

明治元年

一五三



致建言候處御採用ニ相成右之趣昨十五日一統に御布告被爲在候然上ハ夷人共往々諸藩に茂罷越可申左様之節ニ至り邊土固陋之習俗ニ而萬一不都合之事とも差起候而者追々覆轍も有之況建言之於我等猶更難相濟候條御國家之御爲筋ハ申ニ不及字内之大勢を茂致勘辨候而屹度心得違無之様末々迄も精々可被示候不盡

二月十六日

護

久

御家老中  
御中老中

尙々建言之寫ハ孤雲藤右衛門より差遣可申候右書狀之趣意ハ尊慮奉伺思召不被爲在候ハ、一統に布告有之度候以上

〔一新録自筆狀〕

慶應四戊辰二月十八日京發急脚同廿六夜霜

外國御交際ニ付御建白之事

別紙を以申達候即今於 朝廷之一刻茂 皇威を萬國ニ被輝候御國體相立候様との御趣意ニ而何事茂非常之御處置被爲在就而之何方之差入茂去冬迄とハ雲泥之相遠ニ相成既ニ夷人參 朝等之儀別番御建白之御書附を以去ル七日大政官ニ而越前侯より 若殿様に御相談有之候付被遊 御同心御連名御加入之處御採用有之右御建白之通御決定之旨同十五日諸藩へ御布告ニ相成申候此上之何地夷人共罷越候とも異儀難相成然ルニ御國之習俗ニ而萬一不都合之事も有之候而之必至度不被遊 御立行ニ深被爲在 御配慮其趣御同席中ニ御直書被下置猶櫻田惣四郎に茂委細被 仰合候御様子ニ付可然様御取計候様存候尤 若殿様に之右御直書寫を以御家中に 御示之思召ニ奉窺候以上

二月十七日

三宅 藤右衛門  
溝口 孤雲

帶刀 將監 美濃 殿宛  
表則 男吏 金左衛門

二月十六日日本藩京都留守居は行幸の際町筋警衛に關する諸藩動向の情況を探りて奉行の間に答

〔王政日新録〕(熊本縣)

御奉行の付紙

御中越之通(行幸之節々東院參町辻御) 致承知御本文御警衛之儀御物頭并組足輕迄ニ而宣候哉脇々様御見合も可有之事ニ付右人數且動向之儀等委細御申越候様存候已上

二月十四日

以來 行幸之節々東院參町辻御警衛ニ付動向等問合之儀委細被仰越候趣致承知既ニ去ル三日 行幸之節長州様越州様御見合せ問合せ候處一辻に十分十人銃隊十人都合二十人計宛御差出ニ相成たる由右十分之向ハ手鑓或ハ小銃拵銘々得物々々を携候由將又動向之儀之是迄見合せも無之事ニ付亂妨且狼藉等之者有之候ハ、御警衛之面々見込を以取押エ手ニ餘り候ハ、打捨可申覺悟ニ而相勤候段右兩藩上より相話候由ニ付此段相達申候尤右之通ニ之候得共此方様御警衛之面々ハ其場之模様ニ應し所分之筋茂可有之と存候以上

二月十六日

御留守居中

御奉行衆中  
尙々御警衛之儀 出御 還幸とも同様ニ相勤候由御座候以上

二月十六日天草島警衛の爲め出張したる我藩物頭等は島民に對し鎮靜安堵すへき旨を誦告す

明治元年



〔一新録自筆狀〕

戊辰二月十六日天草出張之御物頭々島民に相觸候書付也  
肥後國之内天草郡之儀當時主宰無之折柄ニ付尙更守衛之人數差出置鎮靜方可致指揮哉之趣 朝廷に奉伺候處當分是迄之通可相心得旨太政官代より御差圖ニ相成候條左様相心得郡中末々ニ至迄致安堵候様申諭陣中之諸用向無差支様彌以夫々致手當置可申候事

二月

肥後

當郡

御警衛所

遠見番 山方役 大庄屋

町役人 庄屋 年寄 中

二月十六日我藩東海道先鋒隊總帥清水數馬兵を率ゐて名古屋に至る

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

二月十六日我が隊名古屋へ着

二月十七日太政官三職は外國交際に關し聖旨の所在を叙述し上下大に活眼を開き弊習を脱して國家に貢獻すへきの意を訓示す

〔太政官日誌第一、王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

外國御應接之儀は上代 崇神仲哀御兩朝之頃より年を追而盛に成來り遠邇之各國歸化貢獻有之其後唐國とは常ニ使節

相往來或ハ居留し其交際も亦自ら親數候此時ニ當リ船艦之利未ダ開けず故三韓四近と唐國而已西洋各國之事は暫差置印度地方尙明確ならず候然るニ近代ニ至り而は萬民所知之如く船艦之利航海之術其妙を窮め萬里之波濤比隣之如く相往來し一時幕府之失措トハ乍中皇國之政府ニ於て誓約有之候事ハ時之得失ニ因テ其條目は可被改候得共其大體ニ至候而は妄に不可動事萬國普通之公法ニして今更於 朝廷是を變革せられ候時は却而信義を海外各國に失ハせられ實以不容易大事ニ付不被爲得止於幕府相定置候條約を以御和親御取結ニ相成候既ニ先般御布令被爲在候上は皇國固有之御國體と萬國之公法とを御斟酌御採用ニ相成候は是亦不被爲得止御事ニ候仍而越前宰相以下建白之旨趣ニ基き廣く百官諸藩之公議ニ依り古今之得失と萬國交際之宜を折衷せられ今般外國公使入京 參朝被 仰付候元來膺懸之舉ハ萬古不朽之公道ニして縱令和親を講するとも其曲直ニ依而各國不得止之師相起り候其例し不少付而は攻守之覺悟勿論之事に候得共和親之事ハ於先朝既に開港被差許候に付皇國と各國との和親爰に相始り居候處其節は幕府に御委任之儀ニ付諸事交際之儀於幕府取扱來り候然る處此度王政一新萬機從 朝廷被 仰出候ニ付而は各國交際之儀直ニ於 朝廷御取扱ニ可相成は元より之御事ニ候今や御初政之御時總而之事件は全く總裁始當職之責ニ有之候何分某等不肖之身を以て大任を負荷し非常多難之時に逢候上は深く恐懼思慮を加へ天下之公論を以て及 奏聞今般之事件御決定被爲在候且國內未タ定らず海外萬國交際之大事有之候得は普天率濱協心戮力共ニ王事ニ勤勞し萬國交際を始萬機悉く既往將來を不論無忌憚詳論極諫有之度只急務とする處は時勢ニ應し活眼を開き從前之弊習を脱し 聖德を萬國に光耀し天下を富岳之安に置き 列聖在天之神靈を可奉慰上下學而此御趣意を可奉謹承候事

二月十七日

太政官代三職

〔一新録自筆狀〕

〔溝口三宅より在藩國老へ報告校書一節〕

二月十七日

明治元年



(前略)

一外國御交際付而三職衆より御書付御渡

二月十七日外國人上京につき我藩に佛蘭西人宿泊所の警衛を命せらる

〔王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

二月十七日太政官代より御呼出御渡之御書付寫

肥

後

今度外國人上京參 内被 仰付候ニ付妙法院門跡佛蘭西人宿所ニ相成候間滯京中共藩人數差出し宿院警衛致し候様被  
仰付候尙委細之儀は外國掛に可承合事

但外國人滯京五六日之事

二月十七日日本藩京都留守居は天草島警備に關し他藩と應接錯誤を生したるを以て朝裁の猶豫を  
上請す

〔京都並江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

徳川慶喜元所領之内肥後國天草郡には細川越中守より兼而少々之人數差出置候處上方變動之様子相聞徳川家役人共茂  
立去萬一浮浪體之もの狼藉茂難量と薩州土州大村より茂長崎有合之人數不取敢致出張候由就而は共ニ力を合御料地嚴  
重ニ可致警衛筋ニ御座候處出先之者より右藩々には不都合之及懸合候處より逐ニ長崎會議所に持出不一方致混雜候段遊  
學諸生之内同所より蒸氣飛脚船に乗組此節致上京候者粗申出候右者不容易行遠ニ而國許より長崎天草兩所に追々役人  
等致往復候様子ニ付如何様と懸懸合筋落着之上は委敷可申越候得共從是茂一人早打ニ而差立急時之儀申遣候遠境相隔  
候得は少は及延引可申若哉其内朝裁之御時ニ茂相運候ハ、乍恐暫之内御猶豫被仰付被下候様奉願候此段御内意申上置

候以上

細川越中守内

青地 源右衛門

二月十七日

(在京村上彈助列より來狀の一節)

一於天神薩州土州警衛之向に山田己右衛門我察之及應對候一條者定而御承知と存候其余庄村助右衛門頃日早打ニ長崎よ  
英之便船ニ而此許着申出候趣茂有之且又一件ニ付而竹添進一郎茂御國より早打ニ而被差立候得共海上惡候敷未到着  
不致候乍末右一件之議者土州杯別而憤朝廷に持出居候様子ニ付寤御國之報告者無之候得共此方様より茂御書付居  
候方可然と昨日被差出候青地名元之御届書寫一通爲御心得差進申候以上

二月十八日

二月十七日舊幕士勝安房更に越前藩に託して建白書を呈し其主徳川慶喜の爲めに冤を訴ふ

〔海舟日誌〕

十七日

越前家臣を以て京師參與へ上言す

〔海舟日誌、一新録探索報告〕

臣愚

微志を雖欲達于政機朝臣卑身有罪之小臣ふるを恐れて不能仰天日空敷黙止して臣節ニ死するハ其分ふり雖然有罪無罪  
を不論爲邦家卑言を盡すものハ皇國之一民今日在るを以て之故ふり伏而惟 皇國外國之通交開けてより尊王斥夷開鎖  
異同之説興る同屬憤争是か爲に死する者連年比々として不絶これ其政機の可轉もの不轉徒ニ鎖國一邦ニ可成之舊則を

明治元年

一五九



守て不移の故職或ハ其政機の移る處遅々して化育の速ニ成らざる之故職下言中ニ塞塞して不通之故職其憤争之跡を考  
れハ頗過激ニ失すと雖其情を察する時之共ニ 皇國を愁一念深キニ發せり爲是死するもの其深怨の歸する處亦何人ニ  
在る哉今日ニ至てハ我徳川氏罪を得 天朝臣衆數千其冤罪を愁訴せんと欲して其志不達既ニ同胞相喰んとして臣愚輩  
其忠諫盡力す可處其機を失す既ニ數年前ニあり今日悔悟涕血すとも不及不能今我主獨其誤を悔て仰天裁ものハ臣子之  
分是を慚愧斷腸モと雖能ざる所終ニ激怒して同胞憤争之基固く垂御道ホク爲是百萬之生靈其災害を不運之勢あり關内  
如斯ふるを聞て上國是を笑ふものハ戰略ニ妙ふりといふとも王者之政生靈を愛護するの道ニあらそ舊歲毛利家二國ニ  
發して弱轉して強と成る關東今日之弱ハ豈後日之強者ニ轉るをおもはらん哉且同胞相喰しむ憤死之怨亦何人ニ歸  
する哉況哉譜代之主を捨て官軍ニ加らしむる者は君臣父子相喰之道ニして羸弱之者一時猛勢ニ恐るゝ所ニ出づる職  
天朝之尊嚴を恐れて如斯成る職知るゝからそと雖内心危懼邦内人心離散之基と成るへき必せり小臣が輩哀訴せんとす  
る者數百人然れ共黨を結び強訴するハ我主之意旨ニ反す故ニ小臣代て其微志を愁訴を只興敗と戦争を恐るゝニあらず  
一片之誠心爲 皇國ニ開き難きの口を開き明白ニ其情實を訴ふ希くハ高明至正之双眼を以て了察高議を仰くゝあるの  
み恐惶々々誠恐謹言  
二月十五日

勝 安 房

二月十七日筑前藩世子黒田慶賢着京す  
〔京都並江戸返達御用狀扣〕

一黒田美濃守様方

……然之此度依 召下野守様去ル十日御國許御發足被成昨十七日御着京被成候此段各様迄拙者共方爲御知申述候様  
被仰付如斯御座候

二月十八日

二月十八日九州鎮撫使長崎着任の初に當り九州諸藩に對し其當世に處する藩論を一定して具陳  
すへき旨を達す

〔一新録皇令〕

辰二月十八日長崎御留守居宮村方之來翰 裁判所方御國論一定之處改  
而御承知被成度との一件

今十八日御裁判所方御呼出有之候處私不快ニ罷在爲名代安井左平次罷出候處御國論一定之處改而御承知被成度儀ニ付  
別紙御口達之趣則相達申候右者御取調へ之上御書取ヲ以早々被差越候様有御座度此段以早打相達申候以上

二月十八日

宮 村 庄 之 吸

御 奉 行 衆 中

尙々西役所之儀以來御裁判所と相唱可申旨達有之候間此段も相達申候以上

口達

此度爲九州鎮撫使下向候付九州諸藩國論一定之處爲心得改而致承知度候付早々國許に懸合以書取可差出候

二月十八日

尙又隣國舊幕領是迄何某支配ニ由し候哉又者預り地等有之候ハ、可申出候事

二月十八日在京本藩吏員は親征につき軍令陸軍諸法度等發布せられたる旨を藩政府に報告す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

（二月十八日村上松本より二月廿六日番）

朝廷御軍令之書付寫一通字漏生人南禪寺旅宿ニ付而同寺に御書付寫一通手ニ入候付差進申候以上 （南禪寺への御書付寫  
は既に二月十六日の  
條に掲載  
したり）

明治元年



二月十八日

安田 孫右衛門殿

河口 權兵衛殿

今度聖斷を以御親征被仰出候付而之偏ニ蒼生之塗炭ニ陥り候を被歎思召候鴻大之聖慮を奉戴し連ニ皇國平治奉安宸襟候様御軍列ニ被召加候大小諸藩大ニ軍備ヲ嚴ニし同心戮力盡忠誠可遂成功候事

一海陸軍とも進退駈引之儀其手々々之總督ニ委任被仰付候條其旨可相心得事

一私論を以公事を誤り各藩區々ニ不相成様探ク心を可用事

一別紙陸軍諸法度條々堅可相守事

右之條々於相背可被處御軍法者也

年號

陸軍諸法度條々

一長官々々之差圖ニ隨ひ諸事嚴斷ニ覺悟あるる事

一勝ニ驕慢し一敗ニ挫折すへからざる事

一進戰之節ハ惣勢を二ニ分ち其一を先鋒とし其一を中軍とし交番ニして可相動事

但路之遠近地之廣狹ニより二驛或者三驛ニ分配止宿之儀茂可有之事

一行軍者六里内外を以定期トする事

但敵境より先之必ス申ノ社より内着陣勿論之事

一惣勢之内交番として身方地方にて八十分之一敵境より先之五分之一之人數を以斥候差出巡邏不怠可相働事

一各藩より一兩人宛總督陣營へ可相詰事

一歸順之者ハ先ツ先手ニ相加へ置實行相顯候上寛容之御處分可有之事

一宿陣之不自由宿驛人馬之漆等無餘儀次第令勘辨聊權威ケ間敷振舞無之様可相心得事

一於軍上下貴賤寢食勞逸可同事

一浮説流言等惣而軍勢之氣鋒ニ相拘り候事堅不可唱味方又之敵之情實被差置事件聞及候節ハ早速中軍に可申出事

一猥ニ神社佛閣を毀チ民家ヲ放火し家財ヲ掠等亂妨狼籍之勿論押買等堅制禁之事

一喧嘩口論又之陣場之争ひ等堅致間敷様可相心得事

一外國人ニ行違亂妨無禮難捨置節ハ召捕へ置中軍ニ申出候ハ、曲直其國之公使に相糺至當之御處置可有之候付猥ニ放炮

斬殺等堅制禁之事

但外國人之居住所に猥ニ不可立入事

一銃炮彈藥並金穀等分取之品々ハ中軍に可申出候事

右之條々堅可相守者也

年號

二月十八日北陸道征討參謀津田山三郎京都を發し征途に上る

〔自筆狀並稜書〕

(溝口三宅より在藩國老へ報告稜書の一節)

同十七日

一津田山三郎儀北陸道參謀被仰付明日進發

〔江戸京都來狀扣〕

明治元年



津田山三郎

右者御征東ニ付北陸道之參謀被 仰付今日爰許被差立候段届有之候  
二月十八日

二月十八日阿州藩主蜂須賀茂詔上京す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

一 蜂須賀淡路守様衆方以奉札、淡路守儀阿波守存生中願置候通家督被無相違下置旨正月十七日於御假建久我中納言様を以被仰付候段爲御知之來紙一通

一 右御同方様方、然之淡路守乍喪中當月(月)十四日國許乘船同十八日被致着京候段爲御知之奉札一通

〔王政復古帳〕

右者昨年 召之廉並御家督御願旁ニ而御上京ニ相成候間此段御達仕候以上

蜂須賀淡路守様

二月廿日

青地源右衛門

溝口孤雲殿  
三宅藤右衛門殿

二月十九日親征につき街道筋宿驛に於て印鑑を携帯し往來すへき旨を達せらる

〔王政復古帳〕

慶應四年二月十九日大政官代軍防事務局方御呼出ニ付池邊棕右衛門罷出候處非藏人を以御渡ニ相成候御書付寫  
今般御親征御用ニ付宿驛人馬等莫大之費用ニも可有之終ニ者萬民之難澁ニ立至リ可申哉ニ付出張之面々末々迄篤度相

辨聊不作法之所業有之間敷段ハ勿論之事ニ候就而ハ向後爲取締左之通印鑑ヲ以令通路候様被仰付候ニ付此段相達候事

印鑑	何州	何條	何某
		上下	何人

辰何月何日何々發足何々迄往來又ハ片道

又ハ兵隊ナラハ

辰何月何日同斷

何州 銃隊以上何人  
夫方之者何人

以上何人

軍防局章

大總督府章

諸道總督章

右之通京都ヨリ發途之面々者來廿五日ヨリ出先キ諸道ヨリハ來月朔日ヨリ印鑑以往來被仰付候付街道筋取締藩々承  
糺之節者所持之印鑑改相請候様可相心得事  
但御用相濟候節者最寄之局に印鑑可致返上事

二月

軍防局

二月十九日松平慶永は徳川慶喜が謝罪謹慎の實効を表したるにより征東軍を收めて公平の處置

明治元年

一六五



あらむことを建言す

〔尊攘録諸家建白並御届書等〕

戊辰二月十九日  
大藏大輔建白

臣慶永謹而奉言上候今般慶喜伏罪之上東叡山に閑居謹慎罷在會桑始夫々所置申付奉仰 勅裁候謝罪者既今朝慶永參  
内中山前大納言に奉達仕候事ニ御座候聊於慶喜者謹慎之實効ヲ著然イタシ此上者於 朝廷連ニ征東之進軍被爲止  
行幸茂被爲止候得者以天下公議慶喜に之御所置并會桑始に可被仰付典刑相當不可動之 朝裁早々被爲在度奉存候慶喜  
伏罪夫々所置候ニ茂矢張 御進軍 行幸等依然御施行被爲在候而者天下之心必生疑懼於 朝廷國々疲弊ヲ極メ士民  
怨嗟之聲滿行路遂ニ者乍恐奉怨 朝廷候形勢ニ立至可申者必然ト奉存候慶喜伏罪謹慎無之候得者天下極困弊候共決而  
聊朝廷之御無理共不奉存各藩進軍實ニ干城勤王之誠亦可顯候利害ヲ以言上仕候得者慶喜家來過激之者萬一忿怒ニ堪兼  
候處方幾千人一心ニ相成前日カハ必死之兵ト相成可申去 官軍ニ而者諸藩入交リ兵隊ニ而百人百心千人千心之氣況  
此者共慶喜伏罪謹慎承知仕候得者猶以銳氣滅却可仕勝敗之上ニ至候而茂乍恐如何可有之哉ト奉存候 王師實ニ萬一勝  
利ナキ時者天下者は限リト奉憂候何分早々被爲止御進軍公平之御所置奉願候且又今般外國御交際之上ニ就而も今度之  
御所置萬一公法被爲誤候而者實ニ御大事ト奉存候兼而奉申上候通外國に當今條理分明公法を以所分仕候伏罪謹慎之上  
ニ茂猶 御征東ト申承外國人如何論シ可申哉彼茂今度之御所置ヲ以今後之御政道可推知奉存候臣慶永徳川支族之身ヲ  
難を當職之任ヲ以奉言上候萬一矢張御進軍 行幸之御一舉等被爲在候義ニ候得者乍恐天下人心之向背ニ關係シ今後之  
御大政先見仕候得者可相分候右故公平至當之御所置ニ出候得者 皇徳天下ニ輝キ 朝威卒濱ニ光被シ億萬之生靈不啻  
免塗炭諸侯ニも亦感戴 聖恩治安再大平之天日ヲ觀可申ト奉謹畏候外國人茂 皇政御一新之公法ヲ以被爲戴候義候者  
海外之賞譽茂勿論ト奉存候臣慶永忘首犯誓借越干冒尊嚴以身奉言上候臣當死罪謹待斧鉞萬一御採用被成下候得者天下

幸甚之至奉存候臣慶永誠恐誠惶頓首々々再拜謹上

二月十九日

右大洲藩より借寫ス

四月十三日

臣 慶

永

吉 須

田 藤

二月廿日本藩世子護久親征の爲め大坂行幸の供奉を命せらる

〔王政復古帳〕

慶應四ノ二月廿日 御所御假建を御呼出シ付志垣傳内罷出候處非藏人松室信濃を以御渡ニ相成候御書附寫三通（の内

一通、他二通は次の條に掲ぐ）

爲御親征大坂 行幸供奉後陣被 仰下候事

但日時並御道筋等追而可申入候

行幸奉行

俊

政（防城殿也）

二月二十日  
細川 侍 從殿

二月廿日大坂行在所を本願寺に指定せらる

〔王政復古帳〕

（慶應四ノ二月廿日御所御假建にて非藏人松室信濃より志垣傳内に御渡の書附の内）

一行在所可爲本願寺掛所之事

明治元年



但内侍所者新ニ取立之事  
一太政官代東本願寺掛所之輩

二月廿日大坂行幸供奉各藩の兵士及び吏員の數を規定せらる

〔王政復古帳〕

〔慶應四年二月廿日御所御假建にて非藏人松室信濃より志垣傳内に御渡の書附の内〕

- 一 中藩以上
- 一 銃隊五百人ヨリ三百人迄諸役付準之
- 一 近習拾人ヨリ手廻十五人迄之間
- 一 小藩
- 一 銃隊百五十人ヨリ五十人迄諸役付準之

- 一 近習六人ヨリ手廻十人迄之間
- 一 銃隊之外用捨之事
- 一 右之通被 仰出候條宜可被相心得候事
- 一 但來ル廿二日中人數附可被差出候事

二月廿日天下臣民親征の旨趣を奉戴し深く謹戒して過誤に陥らざるやうとの旨を諭達せらる

〔王政復古帳〕

御所御假建方御呼出ニ付志垣傳内罷出候處非藏人松室信濃を以別紙御書付御渡拜見之上返上いたし候様との事ニ付則寫一通且薩藩に御渡ニ相成候由之御書付寫共御達仕候以上

二月廿日

溝口 孤雲殿

林 新九郎  
池邊 棕右衛門  
青地 源右衛門

三宅 藤右衛門殿

寫 從僕法台之儀石承知之  
事候間一々不揚盛目候

今度御親征之義之先達被 仰出候通萬民塗炭之苦ヲ被爲救度以 徹斷御決定有之候上 王政復古之爲最第一之間萬端慈憐之 御趣意貫徹候者而之忽悖人望自ラ兵威緩急ニ茂至候間不法亂行ハ勿論聊之雖爲失錯堅被立法令候右等之御趣意屬ト相辨至小僕迄厚被加教諭心得違無之様肝要候實ニ今度之儀重大之事ニ候間公武之差別之更無之候得共殊更王公以下諸司家僕共嚴重謹慎無之候之而ハ不相成候自然違背之輩於有之之制令可被御沙汰旨ニ候此段爲御心得申入置候事

薩藩に御渡ニ相成候御書付之由

於 御假建志垣傳内借受寫來候

- 一 御衣袴狩衣直垂水干可被任御所意之事
- 一 侍以下衣袴非常之心得ニ而可被任有合之事
- 一 荷物以下萬事質素輕辨第一之事
- 一 御道中並御滞陣中食事主從並自小堀手輕之辨當可廻之事
- 一 別紙御定人數之外隨從爲列外共堅無用之事
- 一 夜具並衣服類惣道中無入用品之前日前々日之内角倉へ御差出有之候ハ、夫々運送先々ニ可達候事
- 一 御滞陣中晝通ハ勿論何品ニ而も寄方之急辨候様致置候間其心得ニ而供奉之節ハ成丈輕辨ヲ被相守候様且又京都方急達之向も同様候間何不限角倉ニ差出候様可被申附置候事
- 一 御一泊有之候事故夜具等用意も有度儀ニ候得共何分紛雜睡眠之譯合ニハ至かたく候間其心得ニ而用意可有事
- 一 但老弊之向之別格候間御一泊所に前日可被廻置候是トテモ尤輕辨ヲ第一候事



二月廿日本藩世子護久議定職刑法事務局輔を命せらる

〔京都並江戸返達御用状扣〕

（二月晦日有吉青地井上村上松本より三月十三日瀝の内）  
一若殿様御用之儀被爲在候間去廿日午刻太政官代に被遊御出候様尤御狩衣麻御上下之内御着用可被遊旨前夜御達ニ付廿日四半時之御供揃ニ而御慰斗目御半上下被爲召被遊御出候處議定職刑法事務局補被仰出候旨被仰渡恐悦奉存候右御書付寫差上申候

細川右京大夫

議定職刑法事務局輔被 仰出候事

慶應四辰年二月

總裁御朱印

二月廿日本藩溝口孤雲木村得太郎參與職刑法事務局判事を命せらる

〔自筆状並稜書〕

（溝口三宅より在藩國老へ報告稜書一節）

二月廿日

一孤雲得太郎（中略）徵士參與職刑法事務局判事御印紙頂戴

〔一新録皇令〕

溝口孤雲

徵士參與職刑法事務局判事被仰付候事

慶應四辰年二月

總裁御印

木村得太郎

徵士參與職刑法事務局判事被仰付候事

慶應四辰年二月

總裁御印

二月廿日外國との通商につき洋銀一枚を以て我金三分に當て融通すへき旨を諭達せらる

〔王政復古帳〕

慶應四ノ二月廿日大政官代へ内國掛より御呼出非藏人松尾上野を以御渡之御書付寫  
今度御一新之折柄外國之御交際も追々被爲在候儀ニ付而者指向爲融通洋銀一枚ニ付金三分之當りを以無差支交遣ひ可致旨被仰出候間銘々無疑念通用可致候

二月

二月廿一日車駕親征の後寺町門の警衛を嚴にすへき旨我藩に令達せらる

〔王政復古帳〕

慶應四ノ二月廿一日辨事御役所が太政官代に御呼出ニ付林新九郎罷出候處非藏人松尾但馬を以御渡ニ相成候御書付寫  
二通（一通は次條雖久  
從兵先發の件也）

細川右京大夫

今般御親征 行幸被爲遊候就而者御留守中京都御警衛向別而肝要之事ニ付其藩之儀兼而寺町御門御警衛被 仰付置候

明治元年

一七一



就而者御留守中別而無意様守衛可致 御沙汰之事

二月

二月廿一日我藩世子護久の從兵を分ち親征行幸に先たちて下坂せしめ彼地を警衛せしむへしとの命あり

〔王政復古帳〕

（二月廿一日太政官代にて林新九郎へ御書付寫の一通）

細川 右京大夫

今般御親征 行幸供奉被 仰付候就而之召連候兵隊之内百人許殘置其餘先供トシテ御出聲兩三日前大阪表に差下置嚴重可致守衛 御沙汰之事

二月

二月廿一日朝廷先に佛國人に對し暴行を加へし土佐藩士を刑罰に處せらるゝに當り我藩に警護方を命せらる

〔一新錄皇令〕

細川 右京大夫 家來に

（辰二月）

此度土佐少將家來佛人ニ對し及暴行候者共泉州堺表妙國寺ニおゐて明後廿三日刑罰可處旨朝命ヲ以被仰出候條警衛向共藩に被仰付候條刑罰等之儀者刑法懸り木村得太郎に引合不洩様差配可被致候 但刑罰人數之儀ハ土佐重役に引合之上可相受取候

辰二月

二月廿一日長岡護美召命を奉して熊本を發し上京の途に就く

〔自筆狀并稜書〕

（京都より二月廿五日田上鐵之允早打ニ而神立候節むきだしニ而田上は引渡されたる稜書一節）

二月廿一日

一去ル九日御國立飛脚着ニ番手御人數ハ引返 良之助様廿一日御發艦（小島より蒸氣船にて）之段申來

二月廿一日我藩末家細川利永江戸城に出頭す之を利永最後の登城とす

〔密書輯録、自著子爵細川利永履歷大略〕

一同年二月廿一日迄登城三四度アリ祖先以來萬治二年八月十三日ニ初リ本年本月本日幕府出仕ノ終ナリ

但公役ハ二月廿四日ニ終ル

二月廿一日紀州藩主徳川茂承召に依りて上京す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

紀伊 中納言 様

右者當春依召二月廿一日御上京ニ相成候段御留守居方之來紙一通

二月廿二日讃州高松藩主高松頼聰等に入京を免されたる旨達せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

二月廿三日太政官代に御留守居御呼出御渡之御書付寫

明治元年



入京被 免於旅宿御被 仰付候

高 松 頼 聰

入京被 免候

本 庄 彈 正 忠

右爲心得相違候事

二月廿二日

本 庄 彈 正 忠 様

右之通御上京ニ相成候段二月廿三日御留守居方之來紙登通

二月廿二日日本藩世子護久大坂行幸供奉の際引率すへき人員を定め之を朝廷に具申す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

爲御親征大阪 行幸供奉後陣被 仰付候付左之通人數召連申候

銃隊 五百人

諸役付 五拾人

近習 拾人

手廻 拾五人

右之通御座候尤御建之通百人計殘置其餘之爲先供前以大阪表に差下置可申候以上

二月二十二日

細 川 右 京 大 夫

二月廿二日長岡護美上京の途次長崎に於て見聞せし時體の要領及び自己の意見を藩政府に通報

〔一新録自筆狀〕

一輪申入候然者熊府發程後天氣茂宜敷其夕出帆昨夜半過當港ニ碇泊今朝來細雨陰々夕刻より晴ニ相成申候間今夜發汽  
 仕候筈ニ御座候今日處々打廻り軍艦等ニも乗組大愉快ニ御座候しかし益外表之盛ニ相成申候間一日も 皇國奮興彼を  
 制する之勢ニ相成申度渴仰之事ニ御座候夕刻八ッ比より九州總撫官ニ罷出拜謁仕候初而御面會申候處如舊識萬事御懇  
 談御座候相應之御人物と相考申候畢竟是迄追々之御艱辛御藥と相考申候六六洲を併吞する之御論ナト有之候間小生よ  
 り者只々 先帝以來攘夷之御一念を以て彼か侮りヲ不受様條理規則を被建徳川氏は迄交誼不正之弊風海内海外御一新  
 之義比萬般條理ニ基キ一步ツ、手前丈夫ニ誠意を以而申上候事ニ御座候誠ニ御國之御依頼之旨ニ而京地ニ罷上候上  
 之三條公初氣力ニ被過候向も夫々條理ニ一定之外無他其段茂吳々宜しくとの御沙汰ニ而御座候然處港内初大村薩土邊  
 よりも少々つゝ意味違も有之歟ニ御座候薩之洞水事松形助左衛門ニ面會内情委細相分り申候長土之彦齋列ニ而大キニ  
 相分り申候間向又崎村常雄川上彦齋兩人馬關より上陸山口に差越探索等爲仕候筈ニ御座候將又澤様御頼ニ付土藩佐々  
 木三四郎薩藩堀直次郎馬關より同船仕り直ニ攝海に參り申候事ハ小生よりも御開ケニ而小生主  
 ニ成り攘夷之基本を論し御抑揚位之事ニ御座候是ニ而京都之御論透察仕候誠ニ上都合ニ話し合出來申候間萬事庄之尤  
 より申上候様申付置申候久留米藩眞木直人始末世話仕り候此人之到而溫和年四十計ニ御座候和泉弟ナレド誠ニ大温順  
 ニ御座候此論も澤様御同様ニ御座候一事相考候ハ今日英船一ツ入港兵庫新聞ニ佛人十一人安治川ニ而土州より殺し候  
 末土人四十人上り生捕り軍艦ニ連越候よしづれ土之激輩と相考申候佐々木ハ到而溫和高名之人物之よし馬關ニ而面  
 會仕候ハ、亦時情茂分り可申佐賀關より可申上候何も庄之尤より一筆申入候迄ニ御座候愉快之あまり醉氣茂有之亂毫  
 海濱右之次第ハ 雲上ニ茂被 仰上候様存申候委細之佐賀關より可申入候澤様ハ御國ニも御越名所を茂御覽之よし尤  
 爰許鎮定次第之よしニ御座候早々不具



二月廿二日

良之助

御家老中様

二月廿二日本藩番頭下津縫殿が引率せる隊士漸次桑名より歸京す

〔白筆狀並稜書〕

（京都より二月廿五日田上鐵之允早打ニ而被差立候節むきだしニ而田上は引渡されたる稜書一節）

二月廿二日

一桑名に被差出置候御人數一昨日より今日迄追々歸着

〔林新九郎日録〕

（二月廿二日の條）

下津一組大津を歸邸

〔北岡文庫輯録〕

（警衛出兵人數從元治元年二月 坂本彦衛調の内）

同月（三）

一桑名に進軍ノ番頭已下人數於名護屋清水數馬一手ト引代廿日以来追々ニ歸京

二月廿二日本藩江戸留守居澤村脩藏徳川慶喜の謝罪書を携へて京都の本藩邸に至る

〔白筆狀並稜書〕

（京都より二月廿五日田上鐵之允早打ニ而差立候節むきだしニ而田上は引渡されたる稜書一節）

二月廿二日

一澤村脩藏去ル十七日江戸立今晝時分着慶喜公御謝罪付而御直書持參

但志方司馬助去ル九日關東着慶喜公拜謁ニ而委細京地之事情申上候處上野大慈寺御立退御愼之由且上野宮様御上京御説之筈

二月廿二日加賀藩主前田慶寧着京す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一加賀様より

、、然之中納言儀當月十四日金澤發途今日被致京着候右爲御知 其御許様 右京大夫様に被申述度各様迄宜得御意旨被申附如斯御座候

二月廿二日

二月廿二日外國事務掛副總督東久世通禧佛國公使に土州人を處刑すへき旨を通報す

〔一新録自筆狀〕

辰二月土州人夷人ヲ殺害いたし候節被仰向之趣

我二月十五日

西曆三月八日堺表ニ於て貴國軍艦ヨリ士官并水夫十七人沿海淺深測量之爲於堺表上陸致シ候を發砲ニ及候段實暴激之所業ニ立至り是迄皇帝政府外外國ニ對シ信義ヲ盡され候交際之主意ニも相違キ別而慚悔之至ニ候依之一同會議之上萬國之公法ニ依り今後遺念無之様篤々皇帝政府に言上致シ約定之日限ヲ誤らす別紙土佐兵隊暴行ニ及候人數指揮官貳人兵卒二十五人不殘來ル二月廿三日我日本之刑法ニ基キ於堺表刑罰ニ可處候就而ハ貴國ハ勿論各國之檢使立會之上處置可致候



但シ殺害ニ逢ヒシ士官井水夫之家族扶助金として拾五万「ドルラ」佛國政府に土佐國が差出候儀ハ堺表之處置落着之上其期限ヲ相定メ可申事土佐侯兼而皇帝政府が上京致候様申達置候ニ付不日着坂之上速ニ「ウエヌス」船中ニ來訪相成可申候右ニ付土佐海邊に貴船相廻され候ニ不及事

外國惣裁親王山階宮ハ堺表落着之上土佐人暴行之挨拶且ハ皇帝政府が今後益外國交際是も信義ヲ被盡兩國人民之爲實意相顯申度應接之爲來訪可相成事

土佐人兵器ヲ帶ヒ開港内ヲ徘徊差止メ置候事

右之通ニ候間無疑念篤ヒ了解せられん事ヲ希ム謹言

二月廿二日

伊達 伊豫 守  
東久世 前少將

佛國公使閣下

二月廿三日三職、八局、徵士、貢士の制及び官職名簿を發布せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣、太政官日誌第二〕

(官版太政官日誌第二によりて訂正す)

二月廿三日太政官代に御呼出御渡之御書付

寫

總裁	有栖川 帥宮	同	正親町三條前大納言
副總裁	三條大納言	顧問	當分外國事務掛兼 小松 帶刀
同	岩倉右兵衛督	同	後藤象二郎
輔弼	中山中納言	同	木戸準一郎

辨事 參與

東園中將 坊城侍從

同	松尾 但馬
同	松尾 伯耆
同	十時 攝津
同	神山 左衛門
同	毛受 鹿之助
同	田中國之助
同	生形 三郎
同	松室 甲斐
史官	同

掛リ 筆生

立花 宮内
北大路 外記
峰大藏 丞
岡本市之進
岡本 彈正
人見 正親
中川 中務
渡邊 大監

官掌

小西 式部
入谷 駿河守
山田 右衛門
淺井 右近
生駒 右京
伊地知 右膳
森主 計
中川 大炊
進藤 右近番長

時掛リ

○神祇事務

督 (神本) 議定

督 (左の一行太ニナシ) 有栖川中務卿宮

白川 三位











監察彈糾捕亡斷獄諸刑律ノ事ヲ督ス

制度事務局

官職制度名分儀制選叙考課諸規則ノ事ヲ督ス

徴士貢士

徴士無定員

諸藩士及都鄙有才ノ者公議ニ執リ拔擢セラルル則徴士

ト命ス參與職各局ノ判事ニ任ス又其一官ヲ命シテ參

與職ニ任セサル者アリ在職四年ニシテ退ク廣ク賢才

二月廿三日古金銀貨通用停止の令を解かる

〔王政復古帳〕

慶應四ノ二月廿三日太政官が御呼出し付池邊松右衛門罷出候處金穀懸木村東市正を以御渡ニ相成候御書付寫一通

寫

古金銀是迄通用令停止候處御一新之御場合未御手茂不被爲届進而者被仰出方茂可有之候得とも當分地下相場を以無差支可致通用候尤御新政之折柄萬一心得違いたし窃ニ積置候もの等於有之者嚴重之御沙汰可有之候此旨末々迄不洩様可申觸者也

二月

二月廿三日總督府は靜寛院宮使者京都より歸東につき途中支障なきやう取計ふへき旨を各藩隊長に令達す

ニ讓ルヲ要トス若其人當器尙退クヘカラサル者ハ又四年ヲ延テ八年トス衆議ニ執ルヘシ

貢士大藩四十萬石以上三員中藩十萬石以上三十九萬

石ニ至ル二員小藩一萬石以上九萬石ニ至ル一員

諸藩士其主ノ撰ニ任セ下ノ議事所ヘ差出ス者ヲ貢士

トス則議事官タリ輿論公議ヲ執ルヲ旨トス貢士定員

アツテ年限ナシ其主ノ進退スル處ニ任ス又其人才能

ニ因テ徴士ニ選舉スヘシ

〔一新録自筆狀〕

〔辰二月廿八日淺井新九郎殿府より仕出之書狀に卷込〕

廻達

靜寛院宮様御使於藤殿隨從男女合百五十七人今般京都表御用相濟歸國候間道中無滯可取計之旨總督府御沙汰候條此段相達候事

總督府

參謀

二月廿三日

木 梨 精 一 郎  
海 江 田 武 次

肥 後 藩 備前藩 尾張藩 紀伊藩

佐土原藩 大村藩 長門藩 薩摩藩

各指揮官中

二月廿三日總督府は輪王寺宮江戸を發し上京せらるとの儀につき道中取締方を各藩隊長に令達す

〔一新録自筆狀〕

〔辰二月廿八日淺井新九郎殿府より仕出之書狀に卷込〕

廻達

輪王寺宮様近日關東御發途御上京之由就而者別紙人數爲警衛隨從有之趣候右通行之節ハ一應差止可被申候乍併御上京之趣意御辨解ニ相成是非通行御頼被成候節ハ別紙警衛之兵隊ハ悉差返し 宮御一方平常之御供廻ニ而御通行可有之候



様懸合可被及段 總督府御沙汰候條各々其心得可有之候事

總督府  
參謀

二月廿三日

木梨精一郎  
海江田武次

右同宛(前揚靜寛院宮使者  
云々の書に同じ)

別紙

内藤紀伊守 水野出羽守 松平右衛門尉 本多能登守  
井伊右京亮 秋元但馬守 松平中務太輔 久世讃岐守  
間部下總守 黒田筑後守 大岡主膳正 増山對馬守  
板倉攝津守  
右警衛人數

二月廿三日我藩澤村脩藏が江戸より携來たりし徳川慶喜の謝罪書を朝廷に進達す

慶應三年十月ヨリ明治元年閏四月迄  
〔自筆狀并稜書〕

(京都より二月廿五日田上鐵之元早打ニ而被差立候節むきだしニ而田上に引渡されたる稜書一筋)

二月廿三日

一慶喜公御直書封之儘 朝廷に御差上

二月廿三日日本藩上田休兵衛長崎より佐賀長崎の状況及び軍制取調に關する意見を藩政府に通報す

〔一新録自筆狀〕

戊辰二月廿三日上田休兵衛崎陽より報告

又曰墨汁塗抹仕候得共何分淨書之暇無御座可然御聞置可被成下候

拜呈仕候太守様益御機嫌能遊御座恐悦次ニ各様御安康御奉務奉恭賀候前書申上候後廿日朝飯後佐賀發起本庄と申處より乗船仕候處逆風巨濤不得止洋中より乗戻竹尾高橋と申處より同夜半登陸其儘陸行廿一日暮過當所へ着仕候

一佐賀老侯よりハ御答書無之趣前度申上置候處夫ニ而ハ餘り失敬ニ被思召草々之御報書迄被進候間可然申上候様との事ニ御座候御答書之儀故私儀直ニ持歸可申答之處兼而申上置候通崎陽へ御用ニ而早打ニ罷通居候譯ニ御座候得之其儀茂成兼輕賤之者ニ爲持差返候筋ニ者無御座候間不得止崎陽に持越彼地より可然者差立差上可申此段相含吳候様御使秀鳥源吾へ以下欠懸

一肥前守井ニ而御米船々頭共慘刻之冤苦を受候一條ニ付而者彼地に被差越候勘局園田井野口才なとより申出之趣ニ而ハ佐賀役方之もの重疊不都合之應接振ニ而全情實無隱儀ニ御座候得とも畢竟非を遂候存念ニ相違無之尤御乗船サへ受取候得之宜敷との御差圖有之居候由ニ者御座候得共今度之不法御隣藩等之響其敷諸方切齒之模様ニ御座候間御間柄之事故別し而懇々情を述如何様卒取捌不申而者却而御爲合ニ相成中間敷委細見込之筋申含引取申候尙又於當地幸ひ吉田鳩懇意之御留守居申候由ニ付熱談致させ試候答御座候

一良之助様御機嫌能昨曉御入港佛墨英之軍艦へ被爲入私茂被召連候折節別ニ英之軍艦一艘入港通報之趣ニハ於左海佛人暗殺ニ逢申候由刺客者土州と申事ニ御座候佛之船將英船に參何敷懇々談話仕候得とも佛語之由ニ而通辯之者も其要領を得不申追而委敷儀者相分可申候

一崎村川上長州に罷越夫より因備へ出京地に參候様被仰付候處兩人より御國議之書付持越申度との儀頻ニ申出候得とも



私存念之筋御座候而其儀之拒絶懇々諭解尙奉伺候處書付ハ御渡無之方可然との思召ニ御座候故夜前ハ爲安心崎村迄御前に被召私一同委細申合候而夫々相濟申候

一良之助様昨日之前條軍艦御覽より直様御屋敷ニ而御置澤惣督に御出御會面畢而出島大浦等之夷館御立寄直ニ御乗船ニ相成申候惣督よりも段々御倚頼京地へ之御傳言なと被是御懇篤之事ニ而右之たる由夜前於御船奉伺候私儀之盡後之御供ニ之參不申候故委敷儀之承知不仕候

一前條御着港之混雜ニ而いまた當地之形情爲承籍不申今少いたし候ハ、色々録上之筋も可有御座候

一前件左海之儀暗殺ニ之無之全據夷家之激發之由佛之ミニストル左海に向ひ遊歩歸路ハ舟行之筈ニ而其舟を左海に廻し候筈之處半途ニ而土州人より差押へ候末終ニ土より發炮ニおよび佛之上官一人掉夫十二人と賊彈丸之下ニ命を墜し申候由委細之儀ハ宮村より相達可申と奉存候

一御軍制之儀此節於京地若殿様思召之筋被爲在隊を十三ニ分御繰出しニ相成申候由若々天下兵馬之權ハ 朝廷ニ有之と申譯ニ而海陸軍局邊より天下之兵製造建之模様ニも御座候ハ、私儀折角取調候とも總而無用ニ屬し可申京地之御模様詳悉承知仕度良之助様ニ申上候處尤之儀ニ付御着京早々御評議之上庫港之夷船ニ便船誰を一人當港に可被差下夫迄之廣ク外夷ト應接いたし候様被仰付候

一澤惣督御着之上警衛向之儀之改而大村侯へ被命候付諸藩之人數引揚候而も支中間敷模様幸ひ之折柄故宮村より惣督に相伺御物頭組共近々爰許引拂せ可申申談候是も委敷儀ハ宮村より可申上候  
右之外細事之録上ニ堪不申尙後便と如此御座候以上

二月廿三日

御 奉 行 申 様

上 田 休 兵 衛

二月廿三日泉州堺に於て佛國人に對し暴行せし土州人處刑せらる

〔自筆狀并稜書〕

（三月朔日京發誦口米田三宅より通報稜書一節）

二月廿八日

○此稜明細ニ認直稜ニ控アリ

一土州人暴發付而二十名去ル廿三日於泉州堺妙國寺割腹被 仰付十一人相濟候處ニ而夷人より助命申出候付残り九人見合

○手前相致之處ニ控置候管

一土州人於泉州界佛蘭西人に暴發いたし候もの共割腹之事

此儀根元佛人上陸重疊不都合を働候處より土人憤ニ堪兼及暴發候との唱ニ而割腹之一條刑部局之律ニ懸候事ニ茂無之然ニ立會計刑局ニ被仰付候ハ不安意と木村得太郎も不安意致下坂候處彼より不都合之事者聊も無之此節 朝廷之御條約相濟夷人共皆々致安心彼所ニ三人此所ニ五人或ハ酒を呑或ハ菓物を求おもひく相樂居候を土州臺場之者共我受場ニ入込候儀不埒と申趣ニ而無ニ無三ニ炮撃いたし十一人死亡五人手紙を負候由依之佛人擧而憤激何様日本ハ義理も條理も不辨禽獸國とも可申此儘差置候而ハ本國へ對候而も難相濟最早戰爭と決心いたし候由ニ而外國事務總督東久世字和島公方より御談判御申入ニ相成候得共對面さへ相斷候程之事ニ候處アトミラール登人見込致相違若哉初發是より不埒を働候も難量左候ハ、被殺候上ニ斷を申入候筋ニ茂成行可申何様得斗吟味も不致重キ條約を破候而者公法之所不免此義論相立候處より惣督方御談判之段ニ相成夫より百方御斷且下手人位之處ニ而被及御懇談候得共積り號令人發炮人不殘首を刎御謝罪之稜日相立候ハ、承引可致と申場合ニ相成其儀土州に被及御達候處於彼方ハ空堂公不一方御憤り大政御一新之折柄我より 朝廷之御手障を引起候而者屹ト難相濟臺場詰之者共不殘誅戮を加候様御沙汰も有之候趣ニ而人數を減候事茂何も成不申現實號令發炮いたし候もの二十九人御書出ニ相成あまり多人數ニ候得共無致方不殘割腹之







様御預之六人昨日尙御屋敷に連越ニ相成未タ其儘被爾候 天朝之御差圖次第土州に御引渡ニ相成儀ト奉存候尤切腹之  
際ニ至り引取候人躰ハ藝州御預ニ而昨日職舌をクイ切て相果候由  
右慶應四辰年二月之頃之由誰人之來狀ふるや又いつ方仕出候紙面ニ候哉未詳定し京坂兩地之内仕出候儀ト相見  
候事

前録土州人切腹之面々辭世詩歌

除却洋氣答國恩 決然豈可省人言 唯令大義傳千載 一死元來不足論

かせに散る露となる身ハいとねと心にかゝる國の行すへ

皇國の爲メ我身捨てゝこそまゐる程の道ひらきす

我をまた神の御國の種ふをハふれいとまきよきけふのおもひ出

皇國の御爲とふして身命其すつるいまはの心涼しさ

かけまくも君の御爲と一とすじと思ひ迷マぬ敷鳥のみち

塵泥のよしかゝるとも武士の底のこゝろハくむ人そ没む

箕浦 猪之吉 源元章 行年二十五歳

西村 左平治 源氏同 行年二十四歳

池上 彌三吉 藤原光則 行年三十八歳

大石 甚吉 藤原良信 行年三十五歳

杉本 廣五郎 源義長 行年三十四歳

勝賀 瀬三六 平朝退 行年三十八歳

山本 鉄助 源利雄 行年二十八歳

森本 茂吉 藤原重正 行年三十九歳

北代 堅助 源正勝 行年三十六歳

稲田 貫承 藤原慎成 行年二十八歳

柳瀬 常七 藤原義好 行年二十四歳

〔谷千城遺稿泉州堺事件〕

(抄略)

或は衆に唱て曰く諸君死は一なりと雖も割腹なるや斬首なるや未だ決せず是れ我等一個の名譽に關するもの而已なら  
す實に祖先の名譽に關す且つ我等皆命を奉じて當地を守護し夷人國家の多事に乘じ狼りに上陸亂暴し以て管内を騷擾  
す是隊長の砲撃を命ぜし所以なり而て我輩の令に違ひ直に事に従ひしも是皆國家に職分を盡すのみ豈斬首の刑を受け  
祖先を汚すの理あらんや衆皆曰く然りと遂に重役に面會を乞ひ其意を述ふ言々皆理あり小南徐に十六名を慰諭し且つ  
曰く今般の事に付き兩君公にも非常の御心配あり太守様には御不例にも不拘御登坂の上佛船に乗込にて御挨拶あり君  
辱しめらるれば臣死すとは臣下たるもの、義務なれば足下等此意を領し御墨付を拜聽せよと讀上たる文に曰く  
此度堺表の事件は即今各國交際御一新被爲在候折柄に付公法を以て御處置被仰付今日堺表に於て切腹被仰付候旨御  
沙汰有之候孰も 皇國の御爲と存込難有御請可仕候以上

但し歷々御役人且つ各國検査も罷越候上は 皇國の士氣各國へ相顯候様覺悟可有候以上



二月廿三日

此の御書付を一讀するや今迄悲憤猛虎の怒れるが如き剛氣勇壯の士も疑團忽ち氷釋し一聲に相和して曰く我等上裁を受くるは外夷の爲ならず 皇國の爲ならば又何をか辭せんや死刑にあらずして割腹なるをやと喜ひ勇みて霖雨の忽ち晴て爽然たる蒼穹を仰ぐが如し元此十六名の者共は身分賤き足輕にして平生國內に於ては苗字を名乗るを許されず又下駄を穿ち絹布を服するを得ざるも今回特別の詮議を以て爾後上分の格式に被仰付下駄絹布をも許されたり  
廿三日に至れば藝藩熊本藩各二百人を引卒し駕籠二十挺を用意して長堀の邸にぞ來りける(中略)一同駕籠に打乗りて割腹場と定められたる泉州堺の妙國寺へぞ赴きの淺野細川より一個の駕籠に凡そ六人の兵を以て護衛せしが兩藩士皆其罪なくして死に就くを嘆惜し萬事可憐に取扱ひしと云已に堺妙國寺に達すれば淺野細川兩藩士の二十士を引て寺内上壇の間に着座せしむ(中略)斯くて一同は容儀嚴然今や遲しと割腹の場に入るを待ち居たり時に細川藩士は土藩二十士か死を見る歸するが如きを感じ諸士に云て曰く諸君か死に臨み從容たるは實に武夫の龜龜なれば後日歸郷の土産と致し度何成りとも一筆書きて給り度しと請ひければ皆思ひ／＼に心の儘を書きにける此の時隊長箕浦猪之吉は左の詩を賦す

除却洋氣答國恩 決然豈可省人言 唯令大義傳千載 一死元來不足論

細川藩士之を聞て皆唯に其勇氣而已ならず其才學に愕きたりとそ暫くありて酒肴膳部出て應あり孰も今日限りの事なれば皆快く飲食せり(中略)

斯くて場所も已に整頓せりと報すれば一同出場の支度に及びし處今迄晴たる一天忽ち黑雲點々として雨を推き來り沛然として盆を覆すが如く咫尺をも辨し難くなりければ場内の混雜言はん方なく朝九ツ時より始むるの筈なりしも雨の爲に延引して夕七ツ時にそ及びける此時有司來り六番隊長箕浦猪之吉源元章と呼ばれは箕浦聲に應じて身を起し何もさらはと一聲を發し直に割腹の場に入る妙國寺割腹の場には山科宮殿下を始め東久世少將宇和島少將以下及薩長藝州

肥後並に土藩の警衛士檢視の官吏等順次に列を正して居並び佛蘭西ミニストルを始め其外二十名計小銃を携へて臨檢し皆椅子に着たり箕浦元章は泰然として壇上に端座し先つ我檢視の諸官に敬禮し眼光鋭く遙に佛人を睥睨し一聲高く呼て曰く噉ッ佛奴可惡予か割腹を視よと徐に短刀を抜き腹十文字に掻き切り臟腑を握み出し佛人に投げ付けんとなす介錯人馬淵桃太郎進て元章の首を撃つ過て上部に中り深く入らず再撃つ首領未だ落ちず此の時元章大聲を發しマゲシナメと呼ぶ聲遠近に聞ゆ馬淵漸く三回にして首を落すを得たり元章剛膽不敵の舉動衆皆舌を捲て驚嘆す佛人悚然として面色を失し正視するを得不得と云ふ次に八番隊長西村左平次壇に上る諸官に禮し劍を抜き左腹より右方に引廻すに刀淺し再び突き込み引て半に至る介錯小坂乾秋水一撃首前に飛へり于時箕浦は廿五歳西村は廿四歳なり六番隊長小頭池上彌三吉次で壇に上り腹を撫し眞一字に掻き切れば介錯人北川禮平一刀に首を落す八番小隊長頭大石甚吉從容として席に着き諸官に禮し佛人を睨み腹十文字に掻き切り靜に短刀を座右に置き遙に佛人を睨み兩腕を張りて介錯人頼むと呼ぶ落合源六聲に應じて一刀を下す淺くして切れす再び斬る亦切れす再三再四するも首尙は落ちず七太刀目にして漸く落つ此の間大石は少しも動かす毅然として平常の如く有司皆色を失し佛人愈々恐怖し殆ど人色なし續て杉本廣五郎、勝賀瀬三六、山本哲助、森本茂吉、北代健助、稻田貫之助、柳瀬常七等十士順次に皆勇敷自及し橋詰愛平場に上りし時は日已に西山に没し寺内正に點燈す橋詰は從容として衣を披き正に刀を下たさんとするに際し佛人恐怖倍々甚し卒然二十餘名一同椅子を離れ手を振り袂舌云々して直に逃げ去りたれば有司は走り來りて橋詰の死を止めんとす橋詰背せず懸論數次にして漸く元の詰處に立歸る殘る九人は橋詰の死せずして復席せしを怪み詰責して初て其の實を得たれば有司に迫り其の不當を責め死を速にして先者に從はんと云ふ有司懇諭して曰く佛人此の場を去る必ず仔細あらん今や主たる佛人此席に列せされは死する何の益あらん能く其の事由を質し然る後從容死に就くも遅からすと切に之を止む皆心ならずも木の席に復り休息せり稍ありて有司來り謂て曰く過刻橋詰氏割腹の際に臨み佛人逃げ去りたれば吾々



十人直に該船に立越談判に及ぶ處彼等貴藩士が國の爲め命を捨つること土芥の如きを感じ且つ其自ら屠腹するの剛勇に恐れ何卒 天朝に歎願し残る九士を助命あらん事を乞ふと願ひ出てたり本夜は既に深更に及へり早朝宇和島少將 朝廷へ申出ある筈にて我等も隨行し十分詮議致すべし萬一にも九士の身に異變ありては不相濟に付只穩便に 朝廷の御沙汰を待たれよと懇諭して立歸れり九士は同處に休息し 朝命如何を待つ

二月廿四日我藩及び藝州藩は昨日堺にて暫く死を宥恕せられたる土州人を大坂へ護送し遂に土州藩へ引渡すへしとの命令を受く

〔一新録皇令〕

細川中將 留守 居に  
安藝少將 留守 居に

昨日堺表ニ而死刑ニ可被處土州藩十九人暫死刑御見合ニ相成可申儀 朝廷に相伺越置候ニ付御沙汰有之候迄之中右人數土州に引渡彼方ニ而預り警固致し候様土州重役に申渡候間可引渡候事

東久世前少將 宇和島少將

二月廿四日

〔谷干城遺稿泉州堺事件〕

翌廿四日 朝命ありて大坂表に退くべしとの御沙汰あり先是橋詰は已に割腹の場に入り秋水一閃の下に先殉諸士に従ふの處意外にも死を止められたれば意色鬱々たりしか今此の御沙汰を聞や忽ち喪心して舌噛み切り墨丸を絞め一聲叫

て仆れければ一同愕然相介けて漸く本氣に復したり是先輩已に死せしに夷人の爲めに救命せられしを遺憾に思詰め遂に此に至れりと云已にして九士は皆駕籠にて再び大阪に還る續て橋詰愛平、岡崎榮兵衛、川谷銀太郎の三人は藝州藩へ武内民五郎、横田辰五郎、土居八之助、垣之内徳太郎、金田時治、武田彌三郎の六名は肥後藩へ御預と成り云々  
二月廿四日我藩使者津野田儀右衛門筑前藩に至り日田天草兩地警備の件を謀る筑前藩は目下日田並に加布里等守衛の任に當れるを以て天草へは戍兵を派遣し難き旨を以て之を謝す

〔黒田候隣國使者往來書類一斑高原〕

明治元年二月

細川越中守様御使者被差越昨二十四日博多着森與平宅止宿役筋出會之儀申入候段手筋申出之

御使者 津野田儀右衛門 上下三人

右御口上之趣ハ京坂之勢勢ニよつて日田御郡代窪田治部右衛門殿同所立退ニ相成候ニ付日田並ニ天草之處ハ 皇國之御爲此方様肥後様佐賀様久留米様柳川様より相應御人數被差越置度旨申來候得共此方様へハ邊日田並加布里へ御人數御指越相成候ニ付天草之處ハ向寄之御方々ニ而御守衛相成度旨御答被仰進候ニ付別段御答書等ハ無之候事  
二月廿四日越前藩より徳川慶喜の謝罪書を朝廷に進達したるに對し征東物督府へ歎訴すへき旨を命せらる

〔自筆狀并稜書〕

慶應三年十月ヨリ明治元年閏四月迄  
〔京都より二月廿五日田上鐵之允早打ニ而被差立候節むきだしニ而田上に引渡されたる稜書一簡〕  
同廿四日

明治元年



一慶喜公御歎訴且 勅答被爲在候段越邸より至密相聞

二月廿五日 朝飯後

追懸稜書(節略)

一關東より越邸を以御歎訴有之候處右之筋違ニ付大惣督之方ニ被申出候ハ、思召之筋も可被爲在ト 勅答有之候由候  
此儀越邸より至密承今度澤村脩藏持參御直書も本文御歎訴同様之譯と相見候尾土藝にも御直書出候由候

二月廿五日親征發軔期日を更に坊城俊政より通達せらる

〔王政復古帳〕

一御親征 行幸當月下旬被 仰出候處來月五日之旨更被 仰出候事

一丑半刻無遅々參集之事

二月廿五日

細川 右 京 大夫 殿

俊

政

二月廿五日英國人上京につき我藩及び尾藩に其警衛を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(二月晦日有吉井上青地村上松本公三月十三日酒の内)

一去廿五日太政官代より御留守居御呼出ニ而今度英吉利人上京智恩院滯留所相成候付同所警衛並途中警衛共被仰付候段  
之御書付一通辨事局より被成御渡候右寫差上申候

肥

後

近日英吉人上京智恩院滯留所相成候付同所警衛並途中警衛共被 仰付候尾州に茂同様被 仰付候間可被申談候事

二月

〔王政復古帳〕

(二月廿五日青地海右衛門より溝口孤雲三宅藤右衛門宛書留の向々書)

最前佛人警衛之儀御達ニ相成居候處(二月十七日) 尙又別紙之通被 仰付候付而者二重ニ相成候哉之境御用懸後藤象次郎  
に問合候處右佛良西人此節之上京延引ニ付以前之御達之御取消之由尤警衛且賄方都而之儀茂此方様尾州様に御引受被  
仰付爲其明晝後懸り假宿寺智恩院に致出張候間諸事御申談有之候様との返答仕候以上

二月廿五日土州藩人を該藩に警護せしむとの議を變し前令を取消し我藩及び藝州藩にて警護す  
へく命せらる

〔一新録皇令〕

細川中將

留守 居に

安藝少將

留守 居に

土州藩士九人死刑御見合ニ相成候儀 朝廷相伺御沙汰有之候迄ハ右人數土州に引渡候様申達置候處御吟味合有之先御  
沙汰有之候迄ハ兩藩ニ而大坂表に引取警固可致事

二月廿五日

東 久 世 前 少 將  
伊 達 伊 豫 守

二月廿五日日本藩世子護久舊幕元日田郡代窪田治部右衛門逃走して我藩内に來り其踪跡を失した

明治元年

一九九



るを以て捜索を遂げ發見せは指揮を仰くへき旨を上申す

〔王政復古帳〕

徳川慶喜家來元西國郡代窪田治部右衛門儀先般變動之即下日田表立退先觸を以領内に入込候付菊池と申處ニ而役人より差拒候處引返其後何方に罷越候哉行衛相分不申候然處同人儀者根元越中守家來體衛師範之家筋より養子ニ相越候ものニ而國中方々に實家之門人有之若哉夫等之手蔓を以潜伏罷在も難量候付精々及吟味尋出候ハ、早速其段相達御差圖を受候覺悟御座候事

二月廿五日

若殿様右之書付被遊御持參太政府館に御差出ニ相成候事

二月廿五日我藩政府は長崎に於て九州鎮撫使より諮問せられたる國論一定及び舊幕領預り地等の件につき長崎留守居宮村庄之丞に命して答申せしむ

〔一新録皇令〕

去ル十八日御裁判所より御呼出ニ付安井左平次罷出候處御國論一定之處改而被成御承知度由ニ而御口達之趣別紙一通被差越御申越候通致承知則口上振書取並伺書寫共貳通差遣候間夫々可有御差出被申候以上

二月廿五日

宮 村 庄 之 丞 殿

御 奉 行 中

口上振

猶々西役所之儀以來御裁判所と相唱可申旨達有之候段且筑前並大村御類役より廻狀之寫貳通共受取申候以上

去ル十八日御書一相成候御口達書之趣早速國許に申越候處別紙書取之通申來候間伺書寫料添差出申候

書取

今般御下向ニ付國論之趣等改而被成御承知度段奉得其意候——從來尊王之國議確定仕居候議者申上候迄も無御座朝政御一新之折柄公共之筋ヲ以而爲皇國一際盡力之覺悟ニ罷在中候

一西國元郡代窪田治部右衛門支配地之内肥後國內ニ有之分并豊後國中直入大分連見國東四郡村々領地等之ヶ所々々於京地取締筋相伺候處別紙寫之通り御差圖ニ相成居申候  
右之通御座候以上

二月

宮 村 庄 之 丞

二月廿六日佛英蘭三國公使上京すへきを以て士民に違犯なきやう取締を嚴にすへき旨を各藩に令達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(二月晦日有吉并上野地村上松本と三月十三日霜の内)

一去廿六日 若殿様御用被爲在候間例刻被遊御出候様太政官代より御達ニ付廿六日四半時之御供揃ニ而太政官に被遊御出候處英蘭公使上京ニ付而之御書付一通被成御渡候右寫差上申候

先達而布令ニ相成候各國之内佛英蘭公使來廿七日大阪表發途水陸通行同夜伏見表止宿廿八日上京被仰付候右ニ付而之兼而御沙汰之通凡而萬國公法ヲ以御交際被遊候儀ニ付一同心得違無之様於藩々茂嚴重取締可致被 仰出候事

但途中往來之節萬一被ヨリ不法之所業有之候者一己相對之義者不致諸藩警衛之輩に屹度尋問可致候左候者夫々所置恥辱ニ不相成様御公裁可被爲在候最此方之輩ニ於而者申迄無之候得共今度御交際之初且内地多難之折柄ニ付始終之儀能々相心得卒爾之振舞無之様可致事

二月



二月廿六日英人上京につき更に阿州藩に警衛を命せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

（二月晦日有吉并上青地利上松本と三月十三日霜の内）

一今度英吉利人上京ニ付宿院并途中警衛儀此方様尾州様御同様左之御方様にも二月廿六日被蒙仰三藩御相受ニ被仰付候

右之通二月廿八日御留守居方之來紙一通

阿州様（蜂須賀  
淡路守）

二月廿六日佛國公使の上京一日延期につき更に取締の件を令達せらる

〔京都并江戸返達御用状扣、王政復古帳〕

二月廿六日太政官代方御渡之御書付寫

佛國公使之儀之來ル二十八日大坂表發途伏見止宿廿九日入京被 仰付候ニ付取締之儀別紙同様可相心得 御沙汰之事

二月

二月廿六日我藩の佛人警衛を免し薩藩をして之に代らしめらる

〔京都并江戸返達御用状扣、王政復古帳〕

二月廿六日太政官代方御渡之御書付寫

肥後

兼而佛蘭西人警衛被 仰付置候處今度御都合ニ寄薩州に被仰付候間爲心得申達候事

二月

（二月十七日我藩に佛國人上京宿所警衛を命せられたるに猶又廿五日に至り英國人の警衛を命せられたるを以て青地

源右衛門は二重の命令如何と御用懸後藤象次郎に尋問せし所彼れ佛國人は上京延期につき前の御達は御取消の由と答へたるが果して此の令達出でたるなり）

二月廿六日諸侯參朝の節の服裝につき示達せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

二月廿六日太政官代より御渡之御書付寫

諸侯列之輩自今立烏帽子裏付袴衣裳指貫虎皮等被差免候間勝手ニ可着用候事

二月

二月廿六日奥羽鎮撫使を改め九條道孝を總督とし澤爲量を副總督とし醍醐忠順大山格之助世良修藏等を參謀とし薩州長州筑前仙臺四藩の兵に其の護衛を命せらる

〔防長回天史 第六編上〕

奥羽鎮撫使ト仙臺藩

二月二十六日ニ至リ之ヲ改メ九條公道ヲ總督澤三位ヲ副總督トシ醍醐少將ヲ上參謀トシ尋テ薩藩大山格之助長藩世良修藏ヲ以テ黑田品川ニ代ヘ下參謀トシ 大山ハ二月三十日世良ハ三月朔 長薩及ヒ筑前仙臺ノ兵ニ護衛ヲ命ス

二月廿七日親征行幸の次序及び叡旨奉體に關し更に布達せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

二月廿七日太政官代に御留守居御呼出御渡之御書付寫

御親征之儀先達而當月下旬被 仰出候處御延引更來月五日被爲遊 御出輩戰地 御巡覽大阪に 行幸西本願寺一應

行在ニ相成海軍 御點檢之上 命ヲ四方ニ降下セラレ連ニ追討之功ヲ被爲 聞食萬民塗炭之苦ヲ御救濟之 叡慮ニ被



爲在候條一同厚奉體受邦内一致之業カヲ以鞅掌イタシ可奉安 宸襟候末々ニ至リ候而モ御仁恤之御趣意ヲ奉戴シ聊心得違無之様 御沙汰候事

二月

但行在中東本願寺掛所太政官代ニ被用候事

二月廿七日大坂行幸に關して人心動搖せざるやう諭達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

二月廿七日太政官代に御留守居御呼出御渡之御書付寫

今度 御親征 行幸被 仰出候ニ付而者種々浮説等申唱人心疑惑及動搖候趣如何之事ニ候固ヨリ關東平定之上者還幸被爲 在候儀ニ付心得違無之様安堵生業ヲ相勵可申事

二月

二月廿七日大坂行幸につき來三月四日各局官吏大坂へ出向すへき旨の令達あり

〔王政復古帳〕

二月廿七日太政官代より孤雲持歸ル也

供奉之外三月四日各局下坂被仰付候事

但一局壹兩人計宛居殘難差延御用向等取扱同七日日下坂被仰付尤御用手殘右之局者格別

同六日夕景二條城引拂右之通被仰出候也

二月廿七日

辨 事 局

二月廿七日外國使臣上京參内につき其の警衛心得書を關係各藩に通達せらる

〔王政復古帳〕

二月廿七日大政官ヲ御呼出ニ付志垣傳内に御渡之書付二通

別紙之通候間早々順達夫々に可被觸示候也

二月廿七日

猶以差急候間迅速順達可行之候事

辨 事 所

細川越中守殿	藤堂和泉守殿	稻葉美濃守殿	鍋島肥前守殿	松平出村守殿	松平下總守殿	留守居中
--------	--------	--------	--------	--------	--------	------

今般英佛蘭公使上京參内被仰付候左之通御取窮相成候間警衛取締等被仰付候藩々奉得其意可相勉候

一 滯在中洛中外隨意徘徊被差許候事

一 茶店酒樓に私ニ差越候儀被差留候事

一 夜分外出被差留候事

一 官方に行合候節之路傍に爲相控可申堂上或者諸侯に行合候節者双方道之半を譲り可爲致通行候事

明治元年



但宮様方に公使行合候節ハ御供頭に相通し通行可有之公使より相當之禮式可有之候間御會釋可有之候事  
一諸商ひ物買求且小屋物等見物ハたし候儀被差許候事  
右爲心得相違候事

二月廿七日

二月廿七日我藩英國人上京につき警衛を命せられたるを以て物頭堀内彈右衛門外數人に令して  
警固の任に當らしむ

〔王政復古帳〕

英吉利人上京智恩院滞留相成候付同所警衛并途中警衛共此方様に被爲蒙仰候依之其方儀足輕五十人引卒右警衛引除相  
勤候様被仰付候條可被得其意候以上

二月廿七日

奉行所

堀内 彈右衛門 殿

堀田 少右衛門 殿

關 角之進 殿

猶々尾州河州茂同様被仰付候由ニ付無伏臆申談都合能相勤候様且又井上儀左衛門吉津敬三郎佐野萬次郎儀御物頭副  
士よて本文警衛引除被仰付旨及違候條左様可被相心得候以上

其方組

次郎弟

吉津 敬三郎

權之助弟

佐野 萬次郎

右者英吉利人上京智恩院滞留所ニ相成候付同所警衛并途中警衛共此方様に被爲蒙仰候付英人滯京中御物頭副士よて右  
警衛引除被仰付候條此段可被違候以上

二月廿七日

奉行所

下 津 縫 殿 殿

猶々勤方之儀者堀内彈右衛門吉田少右衛門關角之進に承合候様との儀も可被違候以上

英吉利人上京智恩院滞留所ニ相成候付同所警衛并途中警衛共此方様に被爲蒙仰候付其方組井上儀左衛門御物頭副士被  
仰付英人滯京中右警衛引除被仰付候條此段可被違候以上

二月廿七日

奉行所

下 津 縫 殿 殿

、依之青地源右衛門儀右御用相勤候様被仰付候條此段可被違候以上

二月廿七日

奉行所

御 小 姓 頭 衆 中

、依之後藤彈助儀右同斷

同日

奉行所

御 留 守 居 衆 中

覺 御奉行に

秋吉又助

明治元年

二〇七



古 閑 富 次

右者——依之右警衛相勤候様被仰付候條此段可被達候以上

同日

覺 御奉行に

古 庄 養 拙

右者——依之右御用相勤候様被仰付候條此段可被達候以上

同日

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人數從元治元年 至明治元年二月 坂本彦衛調の内〕

同月廿八日

一英人上京智音院滞留し付同所及途中警衛命セラレ物頭三人副士三人足輕五十人外ニ留守居以下役々出張

二月廿七日我藩先鋒隊進んで駿府に至る

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

二月廿七日駿府藩

〔一新録自筆狀〕

辰二月廿八日淺井新九郎駿府より仕出之書狀寫

從駿府寸翰拜啓仕候御平安略此許清水方一手尾州押出後無別條當驛昨廿七日八半時到着次私儀無異條相勤依舊仕候ニ付乍憚御休慮被成下候様奉希候然者尾州表より得貴意置候通兩督府一日後ニ而押出ニ相成今日當表に着ニ相成候此節

道中茂一日強雨有之其外者春美晴ニ而且驛々休泊共粗御承知之通從 御所被 仰出通御賄所謂單食壹漿して 王師を 迎之姿ニ而案外結構恐入候次第ニ御座候勿論繼人夫とも無賃錢ニ而御出方茂減申候尾州表より御許に差廻候御國人夫 殘者都而御人數連人ニいたし惣員百十一人山鹿屋夫貳百六人丈クニ而輻重運茂出來仕候ニし數十里運仕候得之痛足 病人等有之少々宛増方いたし候位ニ而大分人夫も減少御出方愈以減申候右之通ニ付此許詮議致シ數十里陳行仕候へ者 疲勞之餘金錢遣も多貯金乏敷相成候哉ニ相聞候ニ付當驛ニ而御物頭以上金三兩十席以上同貳兩貳步諸役人段以上貳兩 足輕壹兩貳步陪臣壹兩無御心附渡取計申候右之通取計候而も於御許御相談仕候積よりも減少仕候位ニ而只今分ニ運 候へ者先見込通ニ參候様相考申候取關東形勢澤村言上之趣茂於途中逐一承知仕候其後追々と小大名旗下在所持之而々 街道通行ニ相成日々夥敷行逢申候江戸之様子言語道斷之次第ニ御座候慶喜公上野退隱後旗下役人等之分公私金錢を持 田舎に引入候様子市中茂同様都下古昔武藏野之様ニ相成大名小路人切一人茂無之寂寞たる様子ニ相聞へ申候輪王寺宮 様爲御登京御先觸參候由ニ付別紙之通兩督府より廻達ニ相成守衛之人數も有之隣長之人數當表一昨日押出候而仰山之 御守衛人數者押留御用ニ而宮様御登京ニ有之候へハ平常之御守衛迄ニ而通行ニ相成候様との趣ニ御座候處宮藤澤之驛 に御滞留之由相聞隣長之人數茂由井浦原邊ニ滞留候由ニ御座候今日迄者兩督府着迄ニ而何之御沙汰茂無之大督府着之 上御軍議有之筈ニ承り此許五六日ハ滞陳と相考申候餘ハ別ニ得貴意可申候勿々以上〔文中督府より廻達之別紙とあるは本 月廿三日の條に掲げたるものなり〕

二月廿八日

淺 井 新 九 郎

京都詰

御奉行 中様

二月廿八日天皇諸侯を便殿に召し同心協力以て國事に奮勵せむことを親諭し給ふ

〔太政官日誌第四、王政日新録熊本縣 慶應所藏〕



皇帝陛下親シク列侯ヲ玉座近ク被爲召詔曰  
朕夙ニ 天位ヲ紹キ今日天下一新之運ニ膺リ文武一途 公議ヲ親裁ス國威之立不立蒼生之安不安ハ 朕カ天職ヲ盡不  
盡ニ有レハ日夜不安寢食甚心志ヲ勞ス 朕不肖ト雖モ 列聖之餘業 先帝之遺志ヲ繼述シ内ハ列藩萬姓ヲ撫安シ外ハ  
國威ヲ海外ニ耀サン事ヲ欲ス然ルニ徳川慶喜不軌ヲ謀リ天下解體遂及騒擾萬民塗炭ニ陥ラントス故 朕不得已斷然親  
征之議ヲ決セリ且己ニ布告セシ通リ外國交際モ有之上ハ將來之處置尤重大ニ付天下之爲ニ於テハ萬里之波濤ヲ凌キ身  
ヲ以艱苦ニ當リ國威ヲ海外ニ振張シ 祖宗先帝之靈ニ對ント欲ス汝列藩 朕カ不逮ヲ佐ケ同心協力各其分ヲ盡シ國家  
ノ爲ニ努力セヨ

〔自筆狀并稜書〕  
慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄

〔三月朔日澗口米田三宅より通告稜書一節〕

二月廿九日

一官家武家共昨日參 内之面々於 玉簾前御酒頂戴若殿様曉八ツ時分御歸邸惣御人數六十幾方之由

二月廿八日佛國公使入京につき我藩外五藩に騎馬警衛を命せらる  
〔京都并江戸返達御用狀扣〕

以廻狀致啓達上候然者今日太政官代より御呼出ニ付罷  
出申候處別紙兩通御渡御座候間刻付を以御順達いふし  
候此段得御意申候以上

御次第不同

二月廿八日申ノ下刻

淺野安藝守留守居  
三宅 万 大夫

山内 土 佐 守 様  
細川 越 中 守 様  
島津 修理 大夫 様  
前田 加 賀 守 様

黒田 美 濃 守 様

御留守居中様

一同 五騎 薩州

一同 五騎 加州

右一通 猶以早急御順達留より御返戻可被成候事

一同 五騎 筑前

右一通 別紙早々廻覽可被致事

右明廿九日佛國公使入京ニ付騎馬警衛被 仰付候條明  
曉天伏見迄出張右藩々申談混雜無之様警衛可致候事

二月

二月

一騎兵三騎

（王政復古帳に、右之通ニ付物見三人被差出候事と奥  
書あり）

一同 三騎

二月廿八日明後晦日佛英蘭三國公使に謁見を賜ふ旨達せらる  
〔王政復古帳〕

二月廿九日太政官代より御留守居御呼出ニ而非藏人松室甲斐を以御渡ニ相成候

明後晦日午半刻佛英蘭公使參 内被 仰付候間爲心得相達候事

二月廿八日

二月廿八日東海道鎮撫總督橋本實梁同副總督柳原前光駿府に着陣す

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

二月廿八日正副總督着軍アリ〔駿府〕

二月廿八日日本藩世子護久行幸に供奉して下坂するに際し家臣の隨從者を任命す



〔王政復古帳〕

覺 御小姓頭 御用人 記

若殿様大坂 行幸供奉後陣被爲蒙 仰候付御國許方御供ニ而罷登候而々之此節茂御供被仰付候條左様相心得組支配方にても支方

二月廿八日

口達

永屋猪兵衛  
林常之允

其方共儀 若殿様御下坂之御供被仰付之以上

二月廿八日

其方共儀 若殿様御下坂之御供被仰付足輕共御先ニ被差立候條可被得其意候以上

同日

奉行所

小篠彦右衛門殿  
井上休之允殿  
八木田小右衛門殿  
神足少助殿  
神足十郎助殿  
松崎次郎殿

覺 御奉行記

右者 若殿様御下坂之御供被仰付御跡ニ被差立候

小島富太  
長瀬五十槻  
財津勝之助  
大島久平  
門弟共

右同斷御供被仰付御先ニ被差立候

魚住萬之丞并  
附屬之面々共

右者御國許御軍備筋繁雜之砌ニ付早々被差下旨

右之通候條此段可被達候以上

同日

其方共儀 若殿様御下坂之御供被仰付御跡ニ被差立候條可被得其意候以上

同日

奉行所

陣 半右衛門殿  
續 少介殿

落合彌次兵衛柏原要人組  
御番方爰許に被殘置候而々

明治元年

二二三



右者 御供被仰付御跡ニ被差立候條此段可被達候以上

同日

下 津 縫 殿 殿

澤 村 八 之 進 殿

其方共支配後藤彈助儀 若殿様御下坂之御供被仰付候條此段可被達候以上

同日

御 留 守 居 衆 中

覺 御奉行に

奉 行 所

奉 行 所

坂 本 彦 兵 衛

廣 田 貞 右 衛 門

岡 松 辰 吾

右者 若殿様御下坂之御供被仰付候條此段可被達候以上

同日

覺 御奉行に

末 岡 左 兵 衛

池 永 一 平

渡 邊 彌 兵 衛

永 山 熊 雄

右者 若殿様御下坂之御供被仰付御行列立教師之場相勤候様被仰付候

右同斷御行列立小隊司令士之場相勤候様被仰付候

渡 邊 平 之 助

田 中 又 之 允

右同斷御行列立半隊司令士之場相勤候様被仰付候

村 山 傳 左 衛 門

財 津 軍 丞

右同斷御行列立分隊司令士之場相勤候様被仰付候

右之通可被達候以上

同日

二月廿八日長岡護美は上京の爲め航行中其觀察及び所感を敘述して大坂より在藩老臣に贈る

〔一新録自筆狀〕

一翰申入候春寒未退候處依舊御勉各位御平安致拜候候小生義崎陽出艦後無恙罷在汪洋大海を凌候而愈無事ニ候條御休  
襟可被成候呼子ニ一泊漁火煌々夜景頗ル感情を催し申候夫より玄界ヲ經馬關ニ碇泊小倉一昨年之地理初而一覽地之理  
我ニ有之候儀顯然と相知申候川上彦齋崎村常雄上陸崎村も洋服ニ而出立雄偉ニ有之一時計リニして薩藩堀直次郎土藩  
佐々木三四郎來而同船す干板上等始末無隔意遊歩夜ニ入り話も多ク四頃迄相話畢而酒食を勤む兩氏共殊之外喜悅也別  
紙一冊進達仕候翌朝佐賀關出帆驚濤如雪山大分之動搖逆風ニ而凌雲艦時々波を打入申候無程萬里丸は御机ニ碇泊于時  
字和島藩兩三人小舟ニ乘り船之動搖を見ル小生干板に在り是を觀るに平生之知己松根内藏也則不圖面語相互ニ悅不少  
右ハ京地老侯より被爲召候處風波ニ而行不得候よし小生も別而懇意之事ニ而候間直ニ便船之儀申入候處誠ニ雀躍感謝



不少則其儘乘組無程從者二人來ル一人は一昨年騎陽ニ而出會之小兒シガボルより歸り通辯之爲ニ上京之處内藏從者ニいたし上京幸兵庫ニ而御國之通辯無之候間右之者ニ相頼申候處大慶之様子ニ而小兒ニ之珍敷發明之者ニ御座候奇遇ト謂ふべし翌朝出帆青島より齊宮灘を走ル右内藏話も別紙一冊差出申候内藏ハ美濃大夫之安否ヲ問フこと頻ニ御座候右ニ豫州之山連綿雪猶白ク相見ヘ申候尤一日山杯ハ高山ゆへ殊更潔白不可寫候御手洗より直ニ三原之瀬戸を通り申候頃ハ滄海雲低ク陽映島左ニ暗礁多ク舟行變轉右ニ暗礁あり肥前老侯之船是ニ觸レ半傾キ小島々々人員多く見ヘ申候老侯之乗船を見請申候言語同斷之模様ニ御座候既ニ二艘ニ而御出帆之處臯月丸ハ呼子に而洲ニ乘一日後レニ而馬關ニ而側を通行之處又々甲子丸ハ三原ニ相止り餘程之不手際ニ御座候天保山沖ニ着之處臯月丸ハ來り甲子丸ハ不來老侯茂無之よし全ク三原ニ御座候ものと相考申候近來肥前ハ一國尊大ニ相構ヘ上海行ノ秋杯も異人より散々誑惑され其節船將等も難けられ等有之不案内船將ニ而も乗組居候歟と被相考申候其夜ハ播磨洋迄相過キ英軍艦明石之迫門測量する船を見ル兵庫ニ之和之蒸氣船三十餘艘戸ニ之英之軍艦三艘佛蘭西軍艦其他商船不少碇泊後直ニ宇和島藩之通辯同行銅鐵軍艦ニ乗組申候誠ニ廣大美々敷士官赤衣帶劍三階迄ハ皆士官部屋ニ而炮器之美麗耳目を驚し申候船將ハ丁寧ニ相もてなし申畢而上陸ガラバを問訊スガラバ大慶無極ガラバも明日大阪ニ航し明後日より上京のよし京地ニ之各國之公使初軍卒等多ク上り宮門をも徘徊大阪も異館取建カゝり居申候土州疎暴之末ハ最早相片附中候委細ハ役筋より可申入候誠ニ攝海ハ蒸氣煙天ヲ焦し縱橫ニ往來内外之汽船如海山御座候將又三月よりハ浪華城ニ遷都之よし小生も明日出京直ニ罷下り歸坂之管ニ御座候 皇居ハ先ツ本願寺之よし萬縷之事情千緒之心端ハ後音ニ相託し申候早々不具

二月廿八日

良之助

長 帶 刀 殿  
右 將 監 殿  
沼 勘 解 山 殿

机下

尙々春寒御自愛專一ニ祈念申候矣々々も御國家御一新之御盡力可被成様奉願候小生も愈以見識も相開け申候以來ハ五大洲之形勢 皇國之動靜之御着眼被成候様頼存候敬白

宇和島藩松根内藏談話中要録

- 一 宇和島より徴士被仰付候ハ西園寺雪江首藤但馬井關齋右衛門之由尤井關齋右衛門ハ長崎ニ滞在崎陽ニ而徴士被仰付候西園寺跡ニ私被召呼候ものと察候段演舌仕候
- 一 兵制之調ハ長州之由土州之容堂公不一方御配慮ニ候得共長柄連ハ矢張過激炮器も不持位之事ニ有之候し今一層開ケ申度との事尤武力ハ盛ナルよし
- 一 松山征伐ヤして同人も出立長土字之よし然處長州ハ宿怨有之候事ニ付土州より一日早ク出立取扱松山降參之よし尤蒸氣船ハ伏罪中ハ入不申ト長州より借用いたし候よし長州ハ軍艦五艘英ニ注文のよし富國ト被察候
- 一 薩ハ大久保列主ニふり盡力尤高崎列ハ今日中ニ下り候様との命ニ而過日罷下候由國論ニ合ひ不申よし西郷ハ雄偉之士也大久保ハ力量家也まらし我輩惜らくハ土州之坂下良馬ヲ失し事也トテ良馬ヲ殊之外惜み申候三四郎話ニ茂新選組之見込ニ御座候

二月廿九日我藩天草警衛兵を増遣す

〔機密問日記〕

其方組久武彌平左衛門儀忌被遊御免天草御警衛として組共至急被差感候條此段可被達候以上

二月廿九日

奉 行 所

載 圖 書 殿

明治元年



其方組仁田四郎左衛門儀組共天草御警衛として至急ニ被差越候條此段可被達候以上

二月廿九日

溝口藏人殿

覺 將監殿

奉行所  
關 繁兵衛  
組共

右者天草御警衛として至急ニ被差越候條此段御達之事

二月廿九日

覺 將監殿

島 又左衛門  
組共

右同斷御達之事

同日

三月五日出立之段達有之候事(四人組共)

〔北岡文庫輯録〕

(警衛出兵人数 從元治元年 至明治元年二月 坂本彦衛調の内)

同月(二)

一天草爲警衛物頭四人組共出張最前出張ノ人数ニ合物頭五人足輕百人トナル

二月廿九日佛國公使上京して相國寺の旅館に入る

〔一新録自筆狀〕

(三月朔日澗口米田三宅より通告秘書一節)

二月廿九日

一佛人今日入京ニ付伏見より相國寺迄爲警衛三騎可被差出旨今晚御沙汰有之無異儀相濟

二月晦日佛蘭兩國公使參朝す天皇之を引見し兩國との交際益々親睦し永久不變ならむことを欲すとの叡旨を宣し給ふ

〔太政官日誌第四〕

二月三十日午ノ半刻佛國公使レヲシロシユ、ベニユス船將ロワシユ、ビレツキス船將ベテイトワール參朝

但副總裁始メ公卿諸侯及掛リ役員列座

一皇帝階下親シク敕曰貴國帝王安全ナルヤ朕之ヲ喜悅ス自今兩國之交際益親睦永久不變ヲ希望ス

佛公使曰

天皇陛下今日各國公使等ニ拜謁ヲ賜ヒシハ余佛國ニ對シ玉ヒテ御厚意ナル確證ト仰キ奉ル也貴國ノ衆民ニ於テモ如斯

高明ナル證ヲ知ル上ハ即チ

天皇陛下ノ尊キ御宸念ヲ遵奉スルコト疑ヲ容レサル所ナリ故ニ今日ハ即後來ニ長ク祈念スヘキ日ニシテ貴國ト各國ト

至誠ノ交誼ヲ親クスル始ナルヲ以テ余我國帝陛下ニ代リ

天皇陛下并ニ貴國ノ幸福盛美ヲ祈リ深ク神明ノ守護アランコトヲ奉願也

同日和蘭國公使デテクヲフアンボルスプロツク書記クラインケース參朝

一皇帝陛下自カラ敕スル前ノ如ク



和蘭公使曰隨近報承り候處和蘭國王陛下安全也

天皇陛下長ク御安全ヲ保セ玉ヒ且御在位幾多ノ年ヲ重ホテハシコトヲ希望シ奉ル也

二月晦日英國公使參朝の途上事變ありたるを以て深く宸憂し給ひ更に戒嚴を加ふべき旨我藩並に列藩へ令達せらる

〔一新録皇令、京都并江戸返達御用狀扣〕

二月晦日太政官代に御留守居御呼出御渡之御書付寫(此のはし書は京都並江戸返達御用狀扣に隨ふ)

肥

後記

今般被 仰出候通今晦日英國公使參 朝掛於途中亂妨之所業有之終ニ參 朝及延引實以不容易事體致出來 皇國之御大事ニ茂相係り候儀ニ而此御處置振如何收捨相整可申哉と深く被爲惱 宸襟誠ニ以奉恐入候次第ニ候就而之其藩之儀兼而警衛被仰付置候得之別而嚴重可致守衛ハ勿論之事ニ候得共猶以厚可相心得候此往萬一有様之所業出來之節警衛之者傍觀體之儀於有之者其主人之落度ニ被 仰付候事

二月

列藩に御達

今般(此間我藩へ令達之文) 誠ニ以奉恐入候次第就而者前以嚴重御沙汰之趣茂有之末ニ候條於藩々茂猶又手厚取糺不審之者有之候ハ、召捕速ニ可申出候萬一等閑ニ相心得候者於有之者急度御答被 仰付候事

二月

〔自筆狀并稜書〕

慶應三年十月ヨリ明治元年閏四月迄  
三月朔日溝口米田三宅より通告稜書一節

二月晦日

一英佛蘭之公使參 内被仰付佛蘭之無異儀御規式相濟候處英人於途中狼藉ものゝ疵ヲ負引返候事

此儀時刻ニいたり智恩院ヲ發眞先 此方様より三騎次ニ夷人十騎計其次夷人銃隊其次公使其次尾州阿州御人數ニ而警衛いたし罷越候途中夷人より頻ニ乘懸候付 此方様之三騎ハ成丈差急候内新門前ニ折曲り三拾間計も罷越跡ヲ見送り候處丁度角折曲り候時分見物人之内カ士壹人伊賀栗坊主一人抜刀ニ而飛出夷人ノ騎馬銃隊之間位ニ斬懸候付警衛人之内薩ノ脱走中井幸藏ト中者馬ヲ飛下候處ヲ彼士方頭上ニ切付候を夷人共馬上カ手槍ヲ以突伏セ候付幸藏乍手負直ニ首ヲ討候由坊主之是又夷人とも槍ヲ以相防積り生捕候由是も疵ヲ負候得とも死ニハ不至上ハ洛外桂村醫師之子ニ而林勝太郎自身之和州眞宗寺之弟子ニて脱走いたし何をも御親兵ニ入同志十五六人有之候處昨日カ今朝ニ懸色々申出終ニ義論合兼兩人ニ相成候段申出候由

〔小島家書類見聞雜錄〕

慶應四年從八月至十二月  
小島伊左衛門三月十一日京都より別段之一書一節

二月晦日英使參 内之節警衛御物頭堀内彈右衛門副使御番方井上儀左衛門ニ而右之由行列之眞先與方馬上其跡足輕其跡英之騎馬隊ニ而其跡段々押行候處新門前ニ而葛村之浪人林田衛太郎と申者廿一二才位之由騎馬隊之所ニ切込候由此口ニ乘押候中井弘藏右騷動を見馬より下候へハ林田直ニ中井ニ切てカ、候由既ニ弘藏受太刀ニ相成候得共暫相凌居候内後藤象次郎後より馳付其内弘藏さし候一刀衛太郎咽ニ中りひるむ處を首を打落申候由外ニ同類一人有之是者生捕レ候由衛太郎懐中ニ一首有之由

さきかけて散や大和の櫻花よしや浮名を世に立むとも

生捕御吟味之處與當皆々被捕御尋之處英人ハ亂妨之儀之不可然達而留メ候得共右兩人聞入不申終ニ右之次第ニ成行候間私共ハ逃去候段申出候得共遠島と相究候ニ付段々於刑律不當之段被仰立候得共取揚無之 天子御請招之御珍客ニ對



候而之事 朝敵之律ニ相成候由

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人数 從元治元年 至明治元年二月 坂本彦衛調の内〕

同日(二月) 晦日

一英人參 内ノ途中狼藉もの疵ヲ負スルニ因テ御沙汰ノ趣有之人数相増愈以嚴重警衛申付

二月晦日大坂行幸供奉者下宿の件につき武家前列は下鳥羽全後列は上鳥羽に指定の旨を達せらる

〔王政日新録〕(熊本縣 歴所藏)

御用之儀候間明三十日巳刻大政官代に出頭可有之候也

二月廿九日

辨 事 役 所

細川 右京大夫 殿

長 門 少 將 殿

森 對馬守 殿

松 浦 肥前守 殿

肥 前 侍從様殿 少 將 殿

留守居中

向々早々廻達之後早々返却可有之候也

小枝橋南北百姓家 行幸御用下陣ト申札張置候處引はなし銘々名前下陣之札張有之も候得共武家前列之下鳥羽村後列

之上鳥羽村之筈ニ候間此段可相心得候事

但小枝橋最寄武家下陣之戸田大和守小堀數馬兩人ニ限り候事

二月

右御書付大政官代は松尾形助罷出候處辨事松尾但馬を以御渡相成候事

猶々御書付之通ニ付 行幸之節鳥羽御小休ニ茂下宿御手當ニ相成候哉間合候處下宿等之御用ニ付而戸田大和守小堀數

馬兩人被差越置一兩日之内歸京之筈ニ候處罷歸不申而ハ御小休之下宿手賦有無相分兼候付御藩々々より御見繕ニ相成

下宿取究無之候ハ、右兩人に被成御懸合御手當ニ相成候而可然と返答いたし候以上

二月晦日長岡護美京都に到着す

〔慶應三年十月ヨリ 明治元年閏四月迄 自筆狀并稜書〕

〔三月朔日溝口米田三宅より通告稜書一節〕

二月晦日

一良之助様今曉伏見御發駕四半時分壬生邸御着尤無足并銃隊等は火坂ニ被殘至而御輕隊ニ而被爲入

但左馬助(米)長谷川二右衛門も着

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人数 從元治元年 至明治元年二月 坂本彦衛調の内〕

同日(二月) 晦日

一舍弟長岡護美依召今日着京通例世廻ノ外騎士ノ子弟百人引卒

明治 元年



〔京都并江戸返達御用狀扣〕

二月晦日有吉井上青地村上松本が三月十三日着

早打御飛脚立候間致啓達候

一良之助様御平安段々御渡海一昨廿八日大坂御着今晦日伏見七半時之御供捕ニ而當御陣屋被成御着目出度御儀奉存候  
一御京着ニ付辨事御役所に御届且總裁様初御案内御使者被遣一條様久我様其外御在京之御同席様方にも御使者奉札等夫々仕出相濟申候

二月晦日本藩世子護久の先に在藩老臣に與へし書翰に對し老臣等連署して請書を在京重臣に贈る

〔一新録自筆狀〕

去ル十三日同十六日從若殿様被成下候登書謹而奉頂戴候方今 大政御一新ニ付外國御交接之儀萬世不拔之大典御確定無之候而者難相濟就而者向後渠か參 朝を茂被 命方變可仕處を存候様被遊度旨越土薩藝之君侯若殿様御連名ニ而御建言被爲在候處御採用ニ相成一統に御布告茂御座候上者彼等往々諸藩に茂罷越可申左様之節ニいたり萬一不都合之儀差起候而之御上言之御末別而難被爲濟候ニ付心得違不仕様末々迄精々相示可申旨且御軍制之儀未變更之場ニ相運不申此節關東出師之御諸藩之形勢ニ對し被遊御苦慮候旨誠以奉恐入候然處神州一般西洋之兵制ニ可被改御模様之旨岩倉卿より御内話之由御座候間天下之大勢を辨偏見固執之弊を除炮術之勿論土臺之兵制より斷然御改革被仰付一刻茂御團體相立候様尊慮之趣奉敬承候兵制御變革之儀者種々調略仕候折柄被仰下候御旨趣素太守様ニ茂至極御同意ニ被思召上候間彌以孰茂差入盡力仕候様被仰出候依之右御兩條御直書之寫早々一統に茂拜見仕せ御軍制之急ニ一新仕實地強剛之御備相立候様精々誘掖可仕奉存候右之段御請可然様御披露可被下候恐懼謹言

二月晦日

沼田	勘解由	花押
尾藤	金左衛門	花押
木村	男	吏花押
郡	夷	則花押
小笠原	美	濃花押
有吉	將	監花押
長岡	監	物花押
長岡	帶	刀花押

溝口 孤雲殿  
米田 左馬助殿  
三宅 藤右衛門殿

二月晦日本藩天草派遣員は天草郡警衛の朝命我藩に下りし趣を薩藩派出員に通告す

〔一新録自筆狀〕

辰二月晦以後於天草薩藩往復之書狀

未得拜肩候得共愈御清壯御詰之由珍重存候然之當郡之儀今般御領と相成候ニ付而越中守様は取締被 仰付差向人民安業貢米等之儀無滞相運候様御取計太政官代に御申出有之候様 朝命御座候段熊本より申越候此段御知せ爲可申如此ニ御座候以上

肥後

二月晦日

御警衛所役人中

明治元年

二二五



得能彦右衛門様

二月某日元京都守護職松平容保自ら責を引きて徳川慶喜を寛典に處せられむことを請願す  
〔王政復古帳〕

不肖之容保謹而奉言上候去戊年以來在京奉職仕候處料らすも無限天恩を蒙り冥加至極奉存候然處宗家慶喜以下不束之次第二而天怒ニ觸れ御親征被仰出候段遙ニ奉伺該以驚愕之至奉惱 宸襟候條重々恐入奉存候京都之儀ハ容保專職ニ有之今日之形勢ニ立至候段旁以何共可申上様無御座候畢竟容保上慶喜を補翼して不能安 宸襟下者頑固疎暴之家臣とも制御不行届之所致ニ御座候間何卒慶喜儀寛大之思召テ以御取扱被成下度奉懇願候容保儀者退隱之上在所に引退恭順謹愼御沙汰奉待候右之趣宜御取成御奏聞之儀伏而奉懇願候誠恐敬白

二月

容保

謹上

二月某日我藩先きに興發後日田に出張せしめたる警衛兵を撤退す

〔北岡文庫輯録〕

〔警衛出兵人數 從元治元年 坂本彦衛調の内〕

同月(二)

一日田表ノ儀中川久留島兩隊へ取締命セラル依テ此方ヨリ出張ノ警衛人數悉皆引揚

二月某日會津藩は藩主朝敵の名を蒙り人心不穩にして脱藩するものあるにより兵隊を派遣して鎮撫せしむへき旨各地へ通牒す

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

以剪紙致啓上候寡君儀數年在京精忠を抽候ニ付 先帝已來度々御賞譽を茂奉蒙候處不計茂 朝敵之汚名を負候ニ付人心不穩候處今度 勅使御通行之間有之候ニ付尙又動搖脱藩致候者共茂有之固陋之國風萬一御不敬之義有之候而ハ對天朝奉恐入候間右爲鎮撫大砲組一隊番頭組一隊其外遊擊隊之者共尙又追々出張申付候右爲御心得申述置候已上

會津

軍事局

二月  
五家陣屋 一ノ木戸陣屋 長岡 椎谷  
御郡奉行様 御役人様 御郡方様 御郡奉行様  
高田 御郡奉行様 御町奉行様 御表奉行様 御軍事方様  
三根山 七日市御陣屋 柏崎 御郡方様  
御郡方様 御郡方様 御郡方様 御郡方様

二月某日松平陸奥守等連署建白して徳川慶喜追討の疑議を陳す  
〔安津免久佐〕

皇國東隅之臣等謹而奉獻言候旨趣者徳川内府天下之形勢を觀察し自己之失錯を顧祖宗以來御大任被爲。候大政を在落カマ、朝廷ニ奉歸候儀ハ天下之公義無此上儀と奉存候處去月三日於京攝之内兵端相開候より偏ニ畏 震怒東退シ恭順ニ被在候由ニ候處從 天朝ハ既ニ追討被 仰出即今 御親征之御運ヒニ相成候由實以天下罪涕を生候儀深驚愕之次第ニ奉存候勿論内府反逆顯然たる事狀も可有御座候へ共臣等邊境ニ到り候而ハ辨詳ニ至候儀無之各區之儀を取不能無疑念如此ハ在朝之奸邪立塞要 幼皇嬌 朝權陽ニ其名を假り陰ニ其私を行テ、詐術欺と深闇疑候而有所謂刑律ハ天下人育之治道として至重也故唐虞三代ニ茂有刑法而古賢之最重なる處ニハ我 朝神代於此道備り中頃より公家之世淡海藤原不比等律十二卷を作る輕重細微ニ分チて國家を治ル之的道とモ況や大臣以上之於刑典ハ先哲屢所説ニ有之候へ共廣百



官諸侯之公議を盡シ宜衆言を執り萬民疑心を不抱様 御施行被爲在刑律明白タル上ハ普天之内不被容之反賊御親征茂無之自滅ニ到り候儀ハ天命自然之條即ニ可有之是等之事件ハ今更新ら敷申分ニ而申迄も無之於 朝廷百官列藩正大之被爲懸 朝議候御事トハ奉恐察候へ共内府東歸之儀伏罪之次第一應御詢問之趣度拜承不仕内 御親征之御手筈ニ相成列藩に茂東征之儀被 仰出其末渠等<sup>御願</sup>暴暴を茂不被爲糾候儀不安憂慮仕候儀ニ御座候間 國下 御廟決之次第審ニ明辨仕度其上罪狀明白ニ至り候へハ無二念爲 皇國同心戮力共ニ賊誅ハムシ可申爰ニ又退而駕斗然考仕見候ニ 先帝崩殂後漸ク諒闇被爲解未タ御頃合ニ無之今や急務トスル處ハ 皇國と外國之交際ニ相抱<sup>拘</sup>ムガ<sup>カ</sup>ら國內ニ干戈を被爲動候ハ尤以不可然事ニ候 主上御即位之大禮を被爲行四海萬民不安之場合御國內御多難之折柄世界氣運之御活眼を不被爲開候而ハ難相叶折節早ク字内之大勢を被遊 御觀察 王政御一新萬從天朝被 仰出候御勤政何方ニ茂 御仁恤之御處置ヲ普ク天下ニ被爲及 御德化を以無罪之域ニ移天下協心一和し 皇國是迄之衰運を挽回シ世界ニ縱橫ハムシ 皇威を全海外萬國ニ光輝し 皇國万世之大基礎を被爲振候様 御開業被爲在度仰願クハ 主上之御英斷能天下億兆之蒼生をして方向を知し給らん事を奉懇願候臣等不肖之身を以大國ニ藩鎮ムガ<sup>カ</sup>ら非常多難之時ニ逢候上ハ抛身命 王事ニ勤勞之外無他事不堪感激赤心奉言上候誠恐諸白頓首死罪

二月

松 平 陸 奥 守  
上 杉 彈 正 大 弼  
南 部 信 濃 守  
佐 竹 右 京 大 夫

二月某日信州小諸藩主牧野遠江守は徳川慶喜追討の兵を出すことを辭す  
〔尊攘錄諸家建白並御届書等、王政復古帳〕

信州小諸藩主建白

正月九日十日私名代家來之者被召出以御書付徳川慶喜 朝敵之罪 御追討被仰付候間各藩陪臣吏卒ニ至迄方向ヲ定メ候様并右大御號令御趣意相心得國力相應人數差出候様可仕旨被仰渡誠ニ以驚愕畏縮之至奉存候就而ハ速ニ奉 勅從事可仕之處仰中朝郡縣之御制度被爲在候得共 皇國自然之御體裁ハ封建世祿ニ有之鎌倉幕府之時將軍家臣之名自ら相立陪臣陪々臣之分隨而相定時移物換慶元以來今日迄之形勢ヲ成し居候儀ニ而大凡普天之下卒士之濱尊卑貴賤不爲王臣者之豈人も無之候得共封國領邑其治内之上民各共主其君ニ忠勤候ハ則 朝廷に服事之道ニ可有御座奉存候私儀ハ徳川家臣ニ候得ハ一意ニ徳川家ヲ翼奉シ 朝廷に忠勤仕度素志ニ有之元來一途同路ニ而更ニ方ヲ異ニし向ヲ二ツムすべき所無御座追々慶喜恭順之効相立候而寬典之御處置只管歎願哀訴仕度心底ニ御座候又人數差出候儀ハ外御用筋候ハ、何様ニも出精相勤可申候得とも徳川御征伐ニ付而之御沙汰ニ而ハ乍恐臣子を以君父ヲ擊之譯ニ有之人之大倫天地之大經於是乎相悖り昔時源義朝勅 命不得止トハ乍申父爲義ヲ斬候も同様之筋義朝逆名千歳難遣 勅命ニ被爲於候而も亦三綱壞九法戻之御失體之終古難被爲免實ニ私一身之進退難遣而已ニ無御座候 朝廷之御爲ニ深ク御情申上何分奉 勅從事難仕陪隸微臣之身を以直諫仕候儀ハ餘り恐入敢而言上仕兼候得共臣子之身進退難遣仕候段幾重ニも性情之忍兼候處ニ御座候何卒御憫察御宥恕之儀奉願度右願之趣意御採用被下置候得ハ獨私一家之幸福而已ニ無御座世道人心ヲ千歳之下ニ維持仕今日 朝廷之御闕失ヲも聊奉補候儀ニ而冥加至極難有仕合ニ奉存候乍去頑愚固陋遠ニ逆鱗ヲ奉犯候次第其罪萬死難遣 國下ニ拜伏斧鉞之誅謹而可奉持申付以重臣此段哀痛奉懇願候誠恐頓首敬白

慶應四戊辰年二月

牧 野 遠 江 守

三月朔日暗殺暴行猶ほ止まざるを以て重ねて取締方を嚴にすへき旨を達せらる  
〔京都并江戸返達御用狀控〕

三月朔日太政官代に御留守居御呼出御渡ニ相成候御書付寫

明治 元年

二二九



一近來於所々暗殺之者有之候付而是一同及布告置候得共今以相止不申重疊難相濟次第ニ付彌以嚴重取締方被仰付答ニ候於諸藩右様心得違之者ハ有之間敷候得共即今何方茂大勢詰込居候儀ニ付精々糺方行届候様被 仰付候事

三月

本文取締方之儀ハ裁判所に茂被 仰付置候付承合取計可被申候事

三月朔日長岡護美に參與職を命せらる

〔一新録自筆狀、京都并江戸返達御用狀扣〕

長岡良之助

參與職被 仰付候事

三月

以別紙申達候良之助殿今日依 召大政官に被成御出候處別紙之通被爲蒙 仰候此段爲可申達如是御座候以上

三月朔日

三宅藤右衛門  
米田左馬之助  
溝口孤雲

御家中老衆殿

三月朔日鍋島閑叟議定兼軍防事務局輔に同直大議定兼外國事務局輔に任せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔三月十一日道家松野村上松本より送附の内〕

一肥前様か、然之前中将様今般議定職軍防事務局輔被蒙仰難有思召候越中守様は右爲御知被仰進度、侍從様前

中将様被仰付候條、

三月〔綱文の日付は暫近世史料編纂例に據る〕

一右御同方様か、然之侍從様今般議定職外國事務局輔被蒙仰難有思召候越中守様は右爲御知被仰進度、

三月〔日不明なれとも原書に二通連記したれば假りに茲に附載す〕

三月朔日我藩世子護久大坂行幸供奉に用ふる隨從荷物等の員數を辨事役所に申告す

〔王政日新録〕

來五日供奉之節召連候人數并荷物員數等之書付差出可

申旨御達之趣奉畏候取調候處左之通

銃隊 百人

諸役付近習手廻共 五拾人

六拾五荷 玉藥兩懸類

拾棹 長持類

拾三箇 雜物類

右之通御座候以上

三月朔日 細川右京大夫

三月朔日先に泉州堺に於て割服を命せられたる土州人の内九名は佛人の歎願に依りて死一等を減し流罪に處せらる

〔一新録皇令〕

今朝日於大政官代御書付堂通宇和島老公より池邊棕右衛門に御渡相成別紙之通被仰出候付兼而此方様に御預ニ相成居候土州人於坡地同藩に懸合引渡候様尤於同所別段御達無之旨御口達御座候付寫相添此段御達仕候以上

三月朔日

林新九郎  
池邊棕右衛門



溝口 孤雲殿  
三宅 藤右衛門殿  
寫

土佐 少將江

其藩士塚表ニおゐて外國人に對し暴行をたる二十人兼而割腹被仰出候處其場ニ於て佛人より歎願ニ寄九人之者暫時見合せ 朝廷ニ 奏問致吳候様申出其後別紙之通再願助命之儀願出候付而ハ此節之所置專外國ニ關係致候儀ニ付出格之寬典ヲ以死一等ヲ免レ其藩ニ被下置候條流罪可申付事

三月

三月朔日外國事務總督三條實美等書を英國公使に與へ其の昨日參朝の途次暴行者の妨害を加へしことを謝す

〔形勢雜記壹〕

三月朔日英國公使に被遺書翰寫

昨二月晦日閣下參 朝之途中大和産三枝翁城州桂村産朱雀操意外之暴行ニ及貴國之兵士數人へ手を負せ候次第ニ相運候處幸附添ものより壹人ハ打留壹人ハ貴國之兵士召捕候段申出候尤我々政府ニおひて専ら外國之交際を重し普親睦を厚せん之爲來朝之儀も申入候儀之兼々御諒知之通候處頃日ニ至右様之所業數々有之候畢竟我々政府不行届より生候次第各國ニ對し實以汗背之至ニ付勿論右之者余類有無精々探索を盡し何處迄も根を可斷候又召捕候三枝翁ハ兩國政府之重大禮式を妨げ不届至極ニ付嚴科ニ可處之勿論之事候且又貴國之兵士手負之者治療不相届終ニ及死亡候哉又ハ是よりして職掌ニ難活計を失ふものハ我政府より至當之養育料を與へて忿恚之一端を慰申度候我政府之實意候間此段貴下兵ハ勿論本國政府へも厚意貫徹候様以書面可申入旨 朝命有之候ニ付此段如是ニ御座候以上

三月

三條 大納言  
岩倉 右京督  
徳大寺 大納言  
越前 宰相

サリ、ハリー、パークス閣下

三月朔日英國公使參朝の途次警衛の任に當りし我藩物頭堀内彈右衛門井上儀左衛門は其傷害事變の顛末を太政官に申告す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

昨晦日英國公使參 朝之節私共儀途中警衛として尾州阿州之隊長申談行列先ヲ守衛仕午半刻知恩院發途繩手迄押行英人之騎馬隊列ヲ亂不一方混雜ニ付銃卒行列を圓メ早速場所ニ乗付候處上一人軒下ニ斬倒レ一人は被生捕居候ニ付猶繩手通之左右絶切通路を留取堅同類吟味いたし候處右兩人之外見懸不中然處後藤象次郎より一應英人爲引取候様附屬之者に申聞候間其通相心得嚴重ニ守衛いたし知恩院に引取申候此段御届仕候以上

堀内 彈右衛門  
井上 儀左衛門

三月朔日

〔自筆狀並稜書〕

慶應三年十月ヨリ明治元年閏四月迄

三月朔日

明治元年



一右警衛愈以致嚴重候様今朝此方様に御達尾州阿州も同様ト相見候

但此方之御警衛茂勿論十分ニハ無御座候得とも雖も居候付少之申譯も有之候まらし被惱 震懼との 御沙汰も有之候付今夕まで三藩被仰合明細之書付被差出明日ニも若殿様御心得方御伺之御模様ニ候且又向後警衛向之儀之良之助様を下津籠殿に被仰合智恩院に被差越候

一右及狼藉候一條付而不審成者も有之候ハ、捕置訴出候様御達

三月朔日 暮比

〔慶應三卯五月記筆〕

〔林新九郎日録〕

一三月一日晴 世子二條に御參、公子禁闕に御參内、依命智音院英人守衛之出先キ古門前青地に面會昨日暴動之末届書ヲ促シ辨事所に相達ス

三月朔日本藩老臣等書を在京老臣に與へ東西相應し一致協力して君徳を補佐し皇國治安の政策を樹立せんとの意を致す

〔自筆狀 并 稜書、一新録自筆狀〕

〔一新録自筆狀に、戊辰三月朔日京師に之自筆草稿副本本間持行とあり〕

以別紙得御意申候此砌東西之事情貫徹不致候而之不都合之儀可致出來も難計候間事々物々精細之往復ニ相成一轍ニ御運ニ被出度との趣之 公子御發途前厚御沙汰之次第も相伺居候付而之猶更深心を用御互ニ御爲筋を謀盡力勉勵可仕儀之勿論之事ニ候處其後此許之儀追々打寄衆議申談を凝し休焉殿初御席中ハ申ニ不及參政之方茂一致ニ申談是迄之不行届ハ各自反自責ハムし聊私心を不交憫ニ誠意を以 君徳を奉養陶上下一致一和して更始一新之御政體相立候様専心力を竭し候覺悟ニ罷在候間右之趣御序ニ 公子に茂御申上被下度且又從長崎表も態々御直書被成下難有奉拜誦候御委細

御書中之趣御愉快之御事共ニ有御座たる山雀躍恐賀之至ニ奉存候 御着京之上と 世子君ニ茂彌以御力を可被爲得乍恐猶一團之御至誠を以 皇國治安之御策を被爲達度奉懇禱候右御書之御請も別申上不得候條可然様御執成之程奉頓候紛冗中何茂難盡巨細之儀之治兵衛に申合置候付着之上直々御承知候様存候他后鴻ニ讓念略如斯御座候以上

三月朔日

尾 藤 金 左 衛 門

木 村 男 吏

郡 夷 則

小 笠 原 美 濃

有 吉 將 監

長 岡 監 物

溝 口 孤 雲 殿

米 田 左 馬 助 殿

三 宅 藤 右 衛 門 殿

〔溝口米田三宅よりの返書〕

委細被仰越趣致承知舊冬已來之形勢ニ而之纒之事より國家之盛衰存亡ニも致關係片時も油斷難相成御時節ニ付猶更自反自責東西一和一致ニ而相運不申候而如何成行候茂難量御書面之趣至極御同心ニ而御奉行とも重疊咄合勿論御二方様にも夫々申上候事ニ御座候已上

四月六日

三月朔日本藩天草出張物頭柏木文右衛門等に對し更に物頭四人を増遣すること及び警衛中の心得方を示達す



〔豊後國御預所一件帳附天草島共〕

其表御取締之儀今般從 朝廷被 仰付之趣付而之薩藩人數茂引拂候由ニ付猶御仲間中より四人増詰として被差越管ニ付着之上諸事申談可然ク所見計三ヶ所程ニ相分彌以嚴重御警衛有之候様且又此節被仰付之趣ニ而之向後何事ニよらず土地役人等より物躰之儀有之候とも一切受用無之家來末々至迄所柄難題ヶ間敷儀等無之様精々御示被置候様可申達旨候已上

三月朔日

御 奉 行 中

柏木文右衛門殿

宮部 璿 七郎殿

町市郎右衛門殿

一右之趣増詰被仰付候御物頭四人に茂相達且又御郡代に茂右之寫爲心得差遣候事

三月朔日薩藩得能彦右衛門は天草に於て前日の通告承諾の書を我藩に贈る

〔一新録自筆狀〕

如貴命未得芳意候得共御捕彌御健務珍重奉存候現天草郡中之儀今般王地複歸之場合ニ至り越中守様御取締被爲蒙仰隨而人民安業貢米等之儀無滞相運候様御取計可被爲在太政官代に御申出有之候趣 朝命御座候段爲御知之趣被入御念御取計辱致承知候仍而此段及貴報候以上

辰三月朔日

薩州

肥後出張御役人中様

得 能 彦 右 衛 門

三月二日親征行幸出糞延期の旨仰出さる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔三月十一日道家松野村上松本より送附の内〕

三月二日御所御假建に 御呼出御渡之御書付寫

大坂 行幸御延引日限追可有 御沙汰候事

三月二日長岡護美軍防事務局輔に補せられ且つ左京亮從五位下に任叙せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔三月十一日井上村上青地松本よりの書狀抄略〕

一去二日良之助様御用之儀被爲在候間唯今早々大政官代に被成御出候様辨事御役所より御達之處此日若殿様御同所に御出務中ニ付御名代被遊御勤候處軍防事務局輔被仰出候段之御書付一通被成御渡候右寫差上申候右之御禮若殿様御直ニ被仰上相濟申候

一同夕松尾形助外御用ニ而禁中御假建に罷出居候處葉室左心辨様御出座ニ而良之助様被爲召被仰渡管ニ候得共幸形助罷出居候ニ付被成御渡旨ニ而良之助様御事依是迄御精勤以格別之思食左京亮從五位下被任叙段之御書付等二通被成御渡目出度御儀奉存候右寫差上申候

〔露頭書人〕

本文葉室様より奉 勅之御捨ニ之細川左京亮と有之候得共御稱號可賜譯ニ之有御座間敷と御捨御請且御姓名書ニ茂矢張長岡之御稱號ニ出來被差出候處無異儀御落手其後御廻狀等ニ長岡左京亮殿と相認來候付全彼方之間違と相見申候

一右御書付葉室様御渡之節御姓名書明日迄ニ差出候様との儀茂被仰聞候付翌三日被差出相濟申候右寫差上申候

明治 元年

二三七



軍防事務局輔被 仰出候事

三月

右一過 依 是迄精勤以格別 思食被任叙之事  
右二過 葉守様御捨之寫

長岡良之助

細川左京亮殿 長 邦

左京亮從五位下等之事 宣下候珍重存候仍早々申入候也恐々謹言

三月二日

右一過 御姓名書寫

長 邦

三月二日延岡藩主内藤備後守勅免せられたる旨布達せらる

長岡左京亮護美

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月十一日道家松野村上松本より送附の内

三月二日太政官代に御留守居御呼出御渡之御書付

寫

内藤備後守

被 免入京候間爲心得相達候事

三月

三月二日英國公使に明三日參朝を命し且つ途上警護に關する條項を布達せらる

〔王政復古帳〕

明三日英國公使參朝被仰付候間爲心得相達候事

三月

明三日英國公使參朝被仰付候條此内以來度々被仰出之旨更左之件々等篤度相心得彌以不取締無之様嚴重可致御沙汰候事

一 公使旅宿知恩院新門前通り繩手通り三條通境町通行之事

一 往來筋已之刻ヨリ旅宿に引取迄諸人通行留之事

但左右横道木戸メ切之事

一 往來筋住居町家其外共家子召仕之外他人一切滯留被差留候事

但諸藩士等兼而止宿之者之格別ニ候得共萬一其者共致暴行候節者其主人之落度ニ茂被仰付候條於引請精々可致吟味候事

候事

一同所住居之者公用者勿論私用たり共難差延用出來他に往來之節者町方其他向々に申出免許を請け可致通行事

但脇方前文居住之者に同斷之節者木戸々々守衛之藩々に相達免許を請け同斷尤總而用辨之事ニ付多人數通行者不

相成事

右之通宜可相心得候事

三月

明治元年



三月二日英國公使下坂の節大坂まで護送すへき旨を我藩外二藩に命せらる

〔王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

三月二日

一今日大政官代に辨事御役所ヨリ御呼出ニ付代勤小暮罷出候處松尾伯耆松守甲斐を以左之御書付七通御渡相成候事

但内五通(諸領國等太政官代受附刻限の事、親征行幸御延引の事、三日外國人參内に付不及)之例之藩々に通達いたし候様演

達有之尾州様御列之登通之致廻達候様演達有之跡登通(明三日英國公使參朝)之此方様計ニ御渡ニ相成候事

尾州 肥後 肥前 阿州 肥前

右英國公使警衛向等引請被 仰付置候ニ付下坂之節中途警衛向之勿論手當相掛候儀一切申談取計無不都合様大坂迄可

致護送被 仰付候事

但下坂日限追而可達候事

三月

右四藩廻達之分

三月二日東海道先鋒本藩兵總帥清水數馬駿府を發して前進す

〔王政復古帳〕

(三月十二日相州湯元發淺井新九郎通信狀の内節略)

此元清水方一手無別條去ル二日駿府出陣同六日相州湯元は本陣着ニ相成云々

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

二月三十日來月二日當地雷發スヘキトノ命アリ

三月二日駿府出軍

三月某日本藩先鋒隊從軍者烏田治兵衛江戸定詰留 守居役也齋土彌一郎等江戸濱町の藩邸に至り金穀を保管して本藩兵の來着を待つ

〔淺井鼎泉記錄〕

駿府四日間滞在の處江戸より御勘定の書記二名來り江戸詰は惣て引拂候ニ付諸事引渡度段申出御備には人員殊に不足なれば會計事務受取の爲齋土彌一郎一人を遣し別に物見として烏田次兵衛増田順次郎等を遣し候處右の人々濱町御邸に於て殘金壹萬兩餘現米三百俵餘を受取物見諸藩交際等六七八人宛交替にて之を警衛し御人數の來着を待居たり勿論江戸の時情探偵旁々なり此間に於て西郷隆盛と勝安房守との間に談判の事有之候得共諸書に詳なれハ略す(本書に駿府四日は本藩先鋒隊が二月廿七日に駿府に到着せしものなれば其より起算して四日間ならむと思はるゝなり)

三月二日薩藩得能彦右衛門は天草にて更に書を我藩派遣員に贈り主用を以て該地に留まれとも敢て鎮撫等の爲に非ざる旨を辯す

〔一新録自筆狀〕

御揃愈御壯健大慶致候扱昨日也 朝命御沙汰之趣御布告辱致承知候然者拙者事就主川當所に出張追々主用も濟寄せ今一條長崎弊藩藏方之者に平常之用向有之去廿五日附を以掛合致置候得共海上不順故敷今以不相違いつき此事相分候迄

明治元年



ハ當所に滞在可致就而之外見鎮撫體之御疑念も可相應哉候得共曾以右様之筋ニ無之其事相濟候ハ、一日夜早ク目當所退散可致心急罷在候仍而此段爲御心得及御案内候以上

三月二日

薩州

得能彦右衛門

熊本藩出張御役人中様

三月三日天皇英國公使に謁見を賜ふ

〔太政官日誌第四〕

三月三日英國公使ハルリー、パークス書記ミットホールド參朝

一 皇帝陛下自カラ敕スル前ノ如シ

英公使曰我本國帝王陛下安全也

天皇陛下御尋問ノ件々且御懇親ノ 敕意余欣然トシテ本國政府ニ可奉通達也

夫外國交際ノ儀ハ貴國御政體ノ立ニ隨テ

益堅固ナルヘク事ニシテ此節貴國ニ於テ全國一般ノ御政弊ヲ被爲立萬國ノ公法ヲ基根ト被爲遊シ故追々外國交際盛

ナルヘキ義必然ト奉存也

皇帝陛下又敕曰去ル三十日貴公使參朝途中不慮之儀出來禮式延引遺憾之至ニ候今日改テ參朝満足ニ存候

英公使曰先日參 内ノ途中暴發ニ出會セシ所今日

天皇陛下ヨリ難有御諭言ヲ蒙リ且其場ニ於テハ

天皇陛下臣人ノ助力ヲ受ケ難有奉感佩尙今日ノ厚キ御待遇ヲ以過日ノ不幸ハ奉忘除候也

右之通ニテ相濟退出セリ

三月三日英國公使參朝の際我藩兵三十人遣はして之を警衛せしむ

〔一新録自筆狀〕

〔辰三月十二日京師より到來日記後書一節〕

三月二日

一 英國公使明日參 内ニ付御番方並子弟之内三拾人警衛被仰付候

三月三日日本藩英國公使下坂の際護衛すべく命せられたるを以て財津次郎兵衛等に大坂まで護送を命ず

を命ず

〔自筆狀扣稜書〕

〔慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄〕

同三日

一 英國公使明日下坂ニ付尾州肥後阿州肥前ニ大坂迄之警衛被仰付候

〔江戸京都來狀扣〕

財津次郎兵衛

門弟共

右者御國許に被差下今度英國公使下坂之護送被爲蒙 仰候付大坂迄右護送被仰付旨

右之通同三日及達候

三月三日我藩英國公使下坂の護衛を命せらる仍て請書を進達す

〔王政復古帳〕

上書

明治元年



肥後重臣中

被召御渡ニ相成候處火急之儀ニ付爲持上候以上

三月三日

追而爲念御落手書御越可被成候也

明四日卯上刻佛公使下坂ニ付相國寺門前に刻限無遅々可差出候事

騎馬警衛 三人

三月三日

右兩通御留守居より相達候事

佛公使下坂ニ付騎馬警衛三人明四日卯上刻無遅々相國寺門前に差出候様御書付之趣奉長此段御請申上候以上

三月三日

辨事御役所

三宅藤右衛門

三月三日我藩大坂邸に保管せる堺浦暴行の土佐藩人を同藩に引渡す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月六日辨事御役所に差出候御書付寫

於大坂表御預ニ相成居候土州人同藩に懸合引渡候様御達之通ニ付早速同所詰家來之者に申遣候處去三日無滞引渡相濟候段申越候此段御届仕候以上

三月六日

細川越中守内

池邊棕右衛門

三月四日太政官代行幸を來九日に治定せられたる旨通達あり

〔王政復古帳〕

太政官代行幸御延引之處來九日被仰出候仍申入候也

三月四日

安藝新少將殿

細川右京大夫殿

秋月右京亮殿

俊

政

三月四日先に英國公使參朝の途次暴行せしものを處刑せらる

〔自筆狀並稜書〕

（三月十二日立有吉清助へ相渡候稜書一節）

同四日

一、英人に致亂妨候伊賀栗坊主今朝於粟田口死刑

三月四日佛國公使下坂に就きて我藩騎士三名を遣はし護して伏見に到らしむ

〔自筆狀並稜書〕

（三月十二日立有吉清助へ相渡候稜書一節）

同四日

一佛國公使下坂ニ付依御達伏見迄爲警衛三騎被差出

三月四日日本藩末家細川利永家族及び藩士等を引率して江戸を退去す



〔密書輯録〕

自著子傳細川利永履歷大略

一慶應四年三月四日舊幕二屆ケ上京トシテ江戸引拂發途家族並藩中男女末々ニ至ル迄引拂尤上中下其外ノ屋舖々々ハ夫々取締ノ藩士ヲ殘シ利永並家族ハ四日品川沖ヨリ蒸氣船ニ乗シ殘ル藩士男女同斷跡船ニテ出發兵庫港上陸利永ハ上京家族ハ宗藩地ニ下ル

右引拂ニ付テハ先年養父在世中ヨリノ心痛アリ次テ利永ニ及ヘリ因テ左ニ贅ス

江戸引拂ノ義ニ付幕政大變革アリ以來藩士中種々ノ中唱モアリ其上安政年間ヨリ藩地ヨリ江戸詰士卒勤番アリテ在藩アルヘクトノ建白モアリ東西ノ情實モ通セス定府ノ藩士中ニハ同意ノ向モアリテ實ニ藩地ニ領地ナクシテ在任スヘキヲ難シ第一士卒大凡三百口數大凡七百有餘早卒下藩スヘキ日途無シ吾藩祖先以降江戸ノ外他國ヲ見シ事ナク祖先歴代ヲ初メ家族一同ノ墳墓ノ地ニシテ幕府ノ命令アルカ宗家ヨリ領地ヲ分與アラハ異議アルナカルヘシ或時養父利用ヒソカニ利永ニ諭示シテ曰追々ノ建白ハ君臣ノ情義ノ厚キハ懇ロニ謝スヘシ其事ハ置テ聽サルヘシ今江戸ヲ捨テ在邑ハ好マサルナリト利永モ共ニ同意ノ旨ヲ答フ重臣タリ共此内存ハ洩スヘカラストノ事ナリソハ重臣ノ重臣タラサレハ此諭アレハナリ其後父卒去アリテ以來利永深ク考レハ上下在邑セハ土地ナカラサルヘシ宗家ニ歎カハ相應ノ邸ハ分附セラルヘシ然レモ舊來定府ニシテ第一利永ヲ初メ一藩東西風土ヲ異ニシ隨テ人情モ又之レニ同シ江戸萬一戰地トナラハ格別可成丈此儘ニテ出兵等ノアアラハ宗家ノ指揮ヲ受ケ進退スヘクト決心ス然ルニ種々ノ事多クナリテ大ニ心痛置ク能ハス是ヨリ先利永家督前後ノ頃ヨリ震風火ノ三災打續外國船入港幕府政務大變革終ニ慶應ノ大亂ニ及ヘリ是ハ皇國一般ノ事故止ムヲ得サレ共重臣其他ノ有司ノ役人下位ニ在ル者ノ佞ヲ納レ重臣ニ媚ヒサレハ能力者ト雖モ用ヒラレス利永愚蒙ニシテ統御ノ力足ラス歎息ノ至ト云ヘシ重臣ノ意ニ違ヘハ返テ家事ヲ亂スニ似テ一家ノ紛亂ヲ生ス不得止舊

習ニ隨フハ門外ニ評ヲ受ク因テ一家ノ風評ヲ親友諸侯ノ三四名ト交換セシコトアリ

三月四日舊幕府目付中臺信太郎時勢の切迫に際し江戸に在る隊號及び兵數を調査す

〔一新録自筆狀〕

慶應四辰年三月四日夕御目付中臺信太郎より向々に相達候書附

此節柄時宜ニ寄詰切被仰付候儀茂有之候ハ、各方始メ御支配向役々何人詰切被致候儀哉役銘人數承知致度即刻書面を以拙者共に御申聞可有之候事

三月四日

答

遊撃隊	四百人余
彰義隊	三百人余
精銃隊	三百人余
見廻隊	二百人余
表銃隊	半大隊
勇剛隊撤兵	小六隊
傳習歩兵	三大隊
奥詰銃隊	二大隊
歩兵	五大隊半

大隊四千八小隊四百人之割合ヲ以凡七万七千六百八人余

三月五日有栖川大總督宮駿府に着營し給ふ

明治元年

二四七

刀撰隊 凡千六百余人

銃器兼列炮隊 凡三万人

也

幕下印

一布衣以上 白分紋

一御目見以上 同紋 黃

一以下 同紋 萌黃

同笠印

一布衣以上黒たゞ裏金 輪拔◎

一御目見以上青たゞ裏金 同



〔一新録探索報告〕

(三月六日附長州本樂精一郎と同藩廣澤兵助に之書翰の一節)  
奴廿一日薩長大村佐土原四藩函關を乗取り過る朔日尾備出兵二日肥後出兵三藩之兵隊小田原迄押出申候處今般輪王寺宮慶喜謝罪書御上被成尾越薩長大村佐土原之兵隊藤澤迄押出最初深入り致候處今以賊兵寄來模様無之已ニ鎌倉を取切り先鋒總督府を鶴ヶ岡に移度所存ニ御座候藤堂藩ハ本營固紀州ハ後陣ニ致し置申候過る五日大總督府殿府に御着ニ相成彌御軍議一決次第暫時ニ成功を遂度心事御明察可被下候

三月五日我藩警衛に係る元代官地調査の上九州鎮撫使へ申告すへき旨令達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(三月十一日井上賢地村上松本より送附の内)

一去五日大政官代より御呼出ニ付御留守居助勤林新九郎罷出候處、元代官地所取調之上鎮撫使に可申出との御書付一通内國局より被成御渡候付差上申候

細川越中守

九州取締之儀鎮撫使に御委任ニ相成候間先般御沙汰有之候元代官地所取調之上鎮撫使に可申出候此段爲心得申達候事

三月五日本藩世子護久大坂行幸供奉の支度金を拜受す

〔自筆狀並稜書〕  
(慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄)  
(三月十二日立有吉清助へ相渡候稜書の内)

同(三)五日

一若殿様供奉御支度料百九拾兩餘御頂戴

三月五日我藩兵箱根關門の守衛に任す

〔安田家記録〕 明治元年關東征伐事件覺書

三月五日函根山中宿ニテ輪王寺宮御西向ニ接ス本日ヨリ關門守衛薩長ヨリ當藩へ引渡ス

〔一新録自筆狀〕

(慶應四辰三月十二日關東出張之副奉淺井相州湯本々京師に之來朝の一節)

此許清水方一手無別條去ル二日駿府出陣同六日相州湯本に本陣着ニ相成御先手御物頭手者箱根關門守衛として同所に居殘殿御物頭三組三島より壹里半計南方葦山邊臺場と申所關門有之候付居殘守衛ニ相成申候

三月五日本藩軍制を改革して開國主義を取るへしとの旨を布達す

〔明治元年機密間日記〕

口達

溝口藏人

御軍制御改革之儀者太守様兼而之思召ニ被爲在候處今度猶若殿様被成下候御直書之趣及御同様之儀ニ付御先縦ニ無拘斷然被遊御改革管候就而者洋外之兵制を考合強大之御實備相立候様且又外國人交際之儀者既ニ參朝を茂被命候次第御直書之御旨趣ニ付而者能々宇内之形勢等勘辨いたし不都合之儀無之様屹と相心得可申旨被仰出候付則右御直書寫二通相渡候條奉得其意同役に通達組々に及可被達候以上 (御直書二通とあるは護久より老臣へ與へたる二月十三日二月省く)

三月五日

明治元年



三月五日舊幕臣勝安房書を官軍參謀西郷吉之助に與へ今や官軍江府に迫れとも君臣恭順の禮を守り居るを以て能く其の情實を詳らかにし條理を正して處置せられむことを乞ふとの意を致す  
〔王政復古帳、一新録探索報告、安津免久佐〕

無偏無黨王道堂々矣今官軍鄙府ニ通ると雖君臣謹而恭順之禮を守るものハ我徳川氏之士民といふとも皇國之民なるを以て之故なり且皇國當今之形勢昔時ニ異なり兄弟驕ニせめけとも外其侮を防之時なるを知まハなり雖然鄙府四方八達士民數萬來往して不數之民我主之意を解せま或ハ大變ニ乘して不羈を計る之徒頭撫盡力餘力を不殘と雖終ニ其無甲斐今日無事といへとも明日之變誠ニ難計小臣頭撫之力殆と盡き手を下ス之道なく空敷飛丸之下ニ憤死を決スルのミ雖然後宮之尊一朝此不測之變ニ到らハ頑民無頼之徒何等之大變驕内ニ可發哉日夜焦慮ス恭順之道從是破るといへとも如何せん其統御之道なき事を唯軍門參謀。諸君能々其情實を詳し其條理を正。まん事を且ハ百年之公評を以て泉下二期在ルのミ嗚呼痛哉上下道隔ル皇國之存亡を以て心とるもの少ナシ小臣悲歎して不得不訴處なり其處置之如きハ敢テ陳スル處ニあらず正ならハ皇國之大幸一點不正之學らハ皇國之瓦解亂民亂臣之名自千載之下消まる處なからむ小臣推參して其情實を哀訴せんとそれとも士民沸騰半日も去ル事不能唯愁苦して頭撫を將勞まるも其功なきを知ル然と雖其志不達ハ天なり到于此際何そ疑を存せんや恐懼誠恐謹言

三月五日

勝 安 房

軍門參謀閣下

先月越前家を以微志を 上達ス今其草を以テ附呈ス倉卒冒嚴威多罪々々(城藩に託せし建白書は二月十七日の條に在り茲に略す)

〔海舟日誌〕

五日

旗本山岡鐵太郎に逢ふ一見其爲人に感ず同人申旨あり益滿生(谷藏藩藩領討の際幕府に捕へられたる藩士益滿休之助也)を同伴して駿府へ行き參謀西郷氏へ談せむと云我れ是を良とし言上を経て其事を執せしむ西郷氏へ一書を寄す

〔吉本撰續海舟先生水川情話〕

〔前略〕この東京が何事もなく百萬の市民が殺されもせずに済んだのは實に西郷の力てその後を引受けてこの通り繁昌する基を開いたのは實ニ大久保の功だそれ故にこの二人のことをわれノハは決して忘れてはならない  
あの時おれはこの罪もなく百萬の生靈を如何せうかといふことに一番苦心したのだが併し最早斯うなつては仕方がないたゞ至誠を以て利害を官軍に説くばかりだ官軍が若しそれを聴いてくれねばそれは官軍が悪いのでおれの方には少しも曲つた所がないのだからその場合には花々しく最後の一戦をやるばかりだとかう決心した  
それで山岡鐵太郎が静岡へ行つて西郷に會ふといふからおれは一通の手紙を託託カけて西郷へ送つた山岡といふ男は名前ばかりは豫て聞いて居たが會つたのはこの時が初めてだったそれも大久保一翁ふとが山岡はおれを殺す考だから用心せよといつて一寸も會はせなかつたのだが併しこの時の面會はその後十數年間莫逆の交りを結ぶ本にふつた

三月六日大總督府江戸城攻撃の期日を定め且つ先鋒の注意事項を指示せらる

〔近世史料編算綱例〕

三月六日大總督府令シテ江戸進撃ノ期ヲ本月十五日ト爲ス

〔一新録皇令、王政復古帳〕

肥 後 藩



別紙之通從大總督府御沙汰候條相違候間銘々其心得可有之候事

辰三月

先鋒 總督府

一 江城進擊期限來十五日御決定之事

一 攻撃戰爭等之儀者先鋒總督に御委任勿論候事

一 若旗下或者諸侯杯慶喜嘆願儀杯中出候共先鋒ニ而決而御取上有間敷若可然實行並相立有之候ハ、大總督府に申出候様可被相答嘆願等ニ者無頓着ニ而舉城拔果之策速ニ御配運之事

大總督府參謀

〔一新録探索報告〕

〔三月七日附發府御薩海江田武次々同藩大久保一藏に之書留の一節〕

一 昨日大總督宮御機嫌能當地御着到御入城被遊候御參謀正親町中將様西四辻大夫様御同様御安心可被下候先鋒御惣督並御副將直様御登城木梨西郷下拙同様宮御前ニ於而軍議有之來ル十五日慶喜果崩へ官軍打入ニ相決し夫々手配り中仙道先鋒惣督へも急行報知何も臨機應變之都合ニ至り可申云々

〔王政復古帳〕

〔三月十二日淺井新九郎相州湯元より報告書の一節〕

一 慶公上野退隱後恭順之委ニ有之候へとも内輪ニ之兵を被募候様之儀も有之由ニ相聞迎も御切腹無之而者不相濟勢ニ有之江城當時之執權田安中納言様松平確堂様<sup>三河守様</sup>若老ニ而大久保逸翁勝安房<sup>守</sup>專旗下鎮定盡力有之田安公確堂公内々取扱ニ而慶公割腹有之候様周旋有之候由右ニ付攻手急々ニ攻懸候勢ニ而別紙之通進擊期限被仰付候へ共江城内輪之取扱調候而攻入ニ及相成可申候

三月六日日本藩轟木武衛山田十郎を上京せしむへしとの旨を達せらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

肥後 轟木武衛  
山田十郎

御用候間早々上京可爲致 御沙汰候事

三月

〔慶應三年十月ヨリ明治元年十二月迄  
自筆狀并稜書〕

〔三月十二日立有吉清助へ相渡候稜書一節〕

同六日

一 轟木武衛山田十郎早々上京候様達

三月六日日本藩京都留守居池邊悳右衛門は英國公使下坂の際我藩外三藩談合して護送したる旨を申告す

〔王政日新録〕<sup>(熊本藩)</sup>

英國公使一昨四日知恩院旅宿發足仕候付兼而御達之通四藩申談警衛仕伏見より淀舟ニ乗組昨晚八時過大坂八軒家に着上陸爲致候筈之處天保山沖に碇泊之軍艦に直ニ乗移申度段申出候付四藩申談俄ニ及其手配幸越中守手船國許より相廻居候付公使以下大坂戎島より乗組せ昨書九時分同所出船仕候段護送役長之ものより申越候此段御届仕候以上



三月六日

細川越中守内

池邊 椋 右衛門

三月六日長岡護美は天恩に感泣し就職叙位の已を得ざるを陳し且つ軍防局中の事情等を在藩老臣に通報す

〔一新録自筆狀〕

一翰致拜具候各位御平安致拜祝候京地ハ春寒未退候得とも小生愈平安之在京御休襟可被成候取來ル九日二條ニ行幸被 仰出候又々珍ら敷馬乗杯有之物と被相考申候小生茂咫尺之間ニ天顏奉拜身ニ餘り感泣仕候既ニ英佛蘭ノ公使參 朝之時ハ帶劍之儘 紫宸之殿上ニ侍衛仕候間三間計リニ緩々拜 天顏舂之一庶子恐縮此事ニ御座候付而今般參與職を被 任候ニ付而之官位無之と申儀如何ニも六ヶ敷小生茂心痛至極ニ而之候得共職中ハ迎茂無官ニ之相成不中候若殿様よりも頻リニ御沙汰有之依而明白ニ職中在勤中之官位ト申候處ニ相願申候且又軍防局輔被 仰付候軍防ハ御承知之通仁和寺親王督府ニ而鍋島閑叟公長岡左京亮兩人輔ニ御座候委細別冊ニ而御一覽可被下候誠ニ繁務混雜御國之政府よりも書附類ハ猶更多く時ニより候而之中々之混雜尤判事ハ吉井幸助土肥典膳大村増太郎次カ杯ニ而吉井大村ハ人材ニ而話も熟し大ニ仕合ニ御座候大村ハ村田藏六ニ而御座候吉井ハ氣力才智兼備ニ御座候しかし諸局ザハノヽニ而誠之共和政治ニも未タ至リ兼候間吉井列申談軍防一局ハ規則手捌等大ニ相立チ申候勢ニ相成申候サスガ閑叟公モ人物ニ御座候同局ニ而大慶相互之事ニ御座候吉井杯ハ昨夜も緩々相話シ殊之外相進居申候有名之人物ハ各藩追々招キ寄せ酒宴杯催シ互ニ論談仕り一興を催し申候流石小松ハ薩之中ニ而も上等平和之人材ニ御座候軍防局も輔ハ兩人ニ而候得とも參與之公卿ハ山之如く不慮之笑を催し申候既ニ海軍ニ而衆議院宮様近日御發足ニ而時々局中ニ御出座有之白髮之伊賀栗

坊主様ニ而眼色常ならず柏木同様蒸氣船之魔ヲドシ也ト宇和島兄之説ニ御座候只アクビ計リ被成話茂無之程ニ御座候神州之門地尊クして人物朝々少く長大息ニ御座候委曲之儀ハ追々可得貴意候官位一條且御安否伺旁如斯候不具委細云云とあれとも其書缺く

三月六日

左 京 亮

長 岡 帶 刀 殿

有 吉 將 監 殿

小 笠 原 美 濃 殿

沼 田 勘 解 山 殿

尙々御自愛爲邦家番候御席中御一覽之上御奉行にも御示し可被下候

三月六日副總裁兼海陸軍務會計事務總督岩倉具視は長岡護美の横井平四郎召命を辭するの書に答へ何等留意せず勿々命に應ずへしとの旨を内示す

〔子爵長岡家文書〕

昨日御書中之處御用繁御即答ニ不能失敬此事ニ存候然者横井平四郎依 召上京之處先年江戸表ニおゐて云々都而百細御書付御示諭何も令承知候段々御入念之儀ニ而之候得共右等決而御心配ニハ不及兼而人才之趣 聞食被入此度御用召之儀ニ候間早々可罷出候様御取計可給候尤三條始示談之上御答ニ及候條御安心可被下候也 追而早々可及御答之處御用繁且今日休息ニ付旁延引仕候不惡御承知可被給候也

三月六日

具 視

細川 左 京 亮 殿

明治 元 年



三月六日佐伯藩儒臣秋月小相書を我藩領鶴崎毛利到に與へ王政維新に際し尊王の國議に定まりたる旨を報し且つ小藩獨立し難きを以て諸事誘掖せられむことを乞ふとの意を致す

〔毛利文書〕

春寒未退候得共高堂御揃彌御安靜奉賀候然ハ先日ハ時勢之儀ニ付御細書被成下辱奉存候早速御答可申上處彼是仕漸ク兩三日相認候テ差出申候今日トモハ相建候半ト奉存候前書被仰聞候總テ重役共ニモ申建候處御懇切ニ被仰下候段難有奉存候ニ付其都合ニ仕候様子ニ御座候又今度貴書之趣爲申聞候處元々正議ニカタマリ居候事故一々成程ト申候其内貴藩ノ御都合宜布時分ヲ見合セ弊邑無他意段御申入可被下候先日藩人竹中武之丞ト申者熊本へ使者相動申候テ直様泥谷同道長崎へ罷越候都合ニ相成申候如命四海一家別心無之様有之度別テ敵邑ナトハ唐土ノ縣侯位ノ事ニテ獨立ハ思ヒモ不寄候得ハ無御伏藏被仰聞候ニ非ラサレハ不都合ノミ多カラント恐入申候梓葉侯御都合能由目出度奉存候府内侯モサアリ度奉存候泥谷長崎へ向ヒ以後未タ便リ無之何之模様モ相分リ不申候鎮撫使御廻國ニ相成候事ニヤ萬一重役之者被召呼候事ニ相成候ヤトノ噂モ承リ候然シ是ハ未詳事ニ御座候大政一新ニ付愚按モ少々有之候得共不遑陳候右草々得貴意候頓首

三月六日

小 相拜

空 桑 先生 栢 右

三月六日東海道先鋒總督府參謀木梨精一郎書を廣澤兵助に與へ關東の情勢及び徳川氏に對する處置之意見を通報す

〔一新録探索報告〕

長州木梨精一郎が同藩廣澤兵助に之來狀極秘

晚春相成候處上々様登御機嫌克被遊御座恐悅至極ニ奉存候將又老豪彌御壯健可被成御奉職奉珍重候次小生無恙去月廿八日駿府到着爾來引續御用相勤居中候間乍憚御安心可被下候扱廿一日薩長大村佐土原四藩函關を乗取り過る朝日尾備出兵二日肥後出兵三藩之兵隊小田原迄押出申候處今般輪王寺宮慶喜謝罪書御上被成尾越薩長大村佐土原之兵隊藤澤迄押出最初深入り致し候處今以賊兵寄來模様無之已ニ鎌倉を取り切り先鋒總督府を鶴ヶ岡に移度所存ニ御座候藤澤ハ本營警固肥州ハ後陣ニ致し置申候過る五日大總督府駿府に御着ニ相成彌御軍議一決次第暫時ニ成功を遂度心事御明察可被下候關東之景況時々探索爲致候處依然たる恭順ニ而更ニ氣魄も衰候様ニ見へ申候委細ハ別紙ニ認メ差出候間御一見も乍恐情實ハ全休御承知無之只管慶喜謝罪徳川家名斷絶不仕様日夜御工夫被爲在田安にも何れ御談合も有之様承り申候此程田安重役一兩人當地に罷越折柄對談致し懸候處乍恐京師之一件慶喜先供偶然之行違と計り承り其ニ而ハ

王命とハ乍申餘り御無理之様相考候處他年之行掛り等一々承り候而ハ實ニ慶喜之罪天地所不容大ニ發明爲致候兼而御軍議も可有之候得共何レ策略なくてハ彼を死地ニ入レ候而ハ官軍大不利と奉存候第一乍愚存慶喜追討と申事ニ而徳川家名斷絶之趣意ニハ無之采地ハ田安ニ有之と申事を内密江戸に相達旗下之十千石已上ハ如元采地安堵改而 王臣ニ御取立被遊寛仁大度を示し候ハ、平日慶喜ニ背キ候而々彌決心仕慶喜獨夫ニ相成候上ハ官軍之大幸不一方候段西郷生相談致し懸ケ候處大ニ同意致し老豪へも御談合御内慮何度御待申上候處ごふら大參謀御斷之様子ニ而失望仕候十分ニ九戰必カ心用ニ相成候共甲府迄并吞致し函關を乗り取り候上ハ賊之本城を棄攝海に海軍を差向候節ニハ不容易形勢ニ立至も難計候間紀州兵庫邊防禦之手當肝要ニ奉存候自然降伏致し候節ハ江戸城ハ兎も角も彼之長技海軍之城を 朝廷に被召上候ハ、賊之類處々手足切り差當り妙策賊ニ奉存候先ハ御見難旁如斯ニ御座候餘期後便申候恐惶謹言(本文中別紙とあれども未だ見當らず)

三月六日

精 一 郎

兵 助 様

明治元年



三月六日東山道先鋒總督の軍甲斐國勝沼にて舊幕兵と戦ひ之を破る  
〔王政復古帳〕

三月十一日夕より甲州表に被差越候付承候稜々左之通ニ御座候

一今般關東勢甲府を志罷登候人數百五六拾人ト申事ニ御座候

一隊長大久保剛助ト承申候

一三月六日晝九ツ半比官軍ト戦争相始り夕七ツ半比及休戦申候由大小之炮聲瞬息も相止ミ不申候由ニ御座候

一關東より罷登候人數格別重立候者ニ者無之矢張新撰組位之者之由ニ而軍裝茂皆吳呂服ニテ羅沙等着候者一切無之由ニ御座候

一關東勢萬一官軍が先立チ甲府入城いたし候へ者一朝ニ退散致せ候儀者中々六ヶ敷との趣ニ御座候

一關東勢者裝藥彈丸之設も一ト通ニ而格別用意茂無之畢竟甲府に者米穀金銀之貯も相應ニ有之銃炮之藥等も餘程相備り

第一ハ甲府勤番を始メ與力同心等彼是多分之上自カ内應之旗茂有之甲府入城サへ出来いたし候得者存分防戦も被行候見込ニ而必多物差急キ候内官軍急ニ着城之趣相聞候付不得止事鶴瀬勝沼之間ニ柏尾村ト申所ニ而炮戦ニ相成申候處此

甲府より五六里  
一此地形關東に參候ニ者勝沼邊より次第ニ先高ニ相成二三里之輪路ヲ越候而征生峠ニ出申候今度取合之場茂左右高山ニ而谷筋ヲ廻り候街道一ト筋之外人數進退等者甚六ヶ敷右街道ニ添而日川ニ相流兩岸之間者左迄相隔不申候へとも五ニ川ヲ渡候ニ者十丁ニ一ヶ所茂有無之絶壁ニ而御座候右柏尾より官軍東カ出切候得者凡登町半計之要地に炮臺ヲ設ケ大砲ハ二挺之由ニ而矢障リニ相成候大木ハ切斃し炮臺と柏尾村と之間ニ有之候茶小屋等燒拂柏尾村ニ茂四五軒燒亡有之候惣而街道之橋茂曳候由ニ而當時者漸通行差支不申文ニ取締有之候官軍道ニ添而押登候を口下ニ見下大小炮頻ニ放候

よし官軍茂矢隠ニ相成候畑ニ石垣下ニ人數を配り双方頻ニ打合候得とも死傷者殊之外少ク土藩之足輕一人大炮之ため即死仕手負者因土ニ而拾人餘り關東勢ニ茂即死四人是以拾人餘之由御座候

一日川之南方に岩崎村ト申處ニ而同時ニ炮戦相始り關東よりハ伏兵のためか三拾人計岩崎村之東南ニ繰出置候由官軍者五手程ニ分隊いたし峯々谷々ヲ押登候人數之内一手者川越より炮臺等有之ヶ所横合より打崩候積にて川邊ニ添百五拾人程繰出候途中右之人數ニ出合僅壹町計にして炮戦相始候得共關東小勢ニ付暫時ニ而散亂いたし候由其隊長池田竹三郎ト申者壹人踏留官軍八人ヲ相手ニ而血戦仕り遂ニ打死ニ仕候由

一右柏尾村ト岩崎村者川ヲ隔候迄ニ而渠リ六七町も甲府之方へ下り居申候得共全ヶ横矢ヲ防候人數ト相見申候

一右關東人數散亂致候ニ付必多物川ニ添而因土之人數押上シ横合四五町之場所より放發致候付關東勢々、へ兼大炮ヲ捨引揚候よし此場所より二十丁程東ニ横吹ト申所ニ而も六七町相隔互ニ炮發ハムし候へ共關東勢茂引打ニ而踏留候模様ニ茂無之官軍も進撃屈兼此處ニ而者死傷互ニ無之由ニ御座候

一關東勢尙小佛峠ニ而此節之戰地よりハ十里餘ノ處ニ御座候 再戰之儀も有之候得共何分火藥等乏敷其儀茂出來兼江戸に引取申候由尤人數者百ニ滿テ不申其餘ハ柏尾之一戰後散亂致候趣ニ御座候

一五日之晚關東勢峯々ニ烽火ヲ照候由

一東山道に茂百五六拾人江戸脱走相違無之由御座候得共引方相知不申右人數茂今度甲州路に懸候一味ニ相聞申候

一郡内谷村陣所より三月五日梶原監物日野元之丞兩人人數才足之たま罷越心配中六日勝沼之破レ急脚ヲ以大久保列へ注進いたし候付直様江戸へ引返申候由此兩人數歩兵隊頭分之者ニ御座候由

一三月七日會藩大島莊助ト申者土藩之手ニ而捕取り細承候處同人儀者身命抛テ幕府ト存亡ヲ共ニスル之存念ニ付或ハ助命被仰付或ハ志之程を替候ハ、厚被仰付候半等者固より存懸茂無之兩限明ナル間えいつ迄も素願相立候存念ニ付連ニ誅を被加候様強而相募候付日川之邊ニ而刎首被仰付潔ク死ニ就キ申候由節烈感入候との事ニ御座候當年二十歳



一甲府開城致候様先鋒より城代に沙汰ニ相成候處直チニ兵馬ヲ被加候半敷ト驚キ所々に散亂いたし候者茂有之或ハ内應之趣急ニ官軍に漏達いたし候敷ト脱走致候者茂有之一且者餘程騒立候得共鎮靜相成居申候但陰謀荷掛之者十人計も行方未タ相分不申候尤魁首ニ組頭某等ハ早城に入牢致居其餘七八人茂同様ニ城内に押込罷在候  
三月十七日

岩男助之丞  
野田善之允

〔太政官日誌第七〕

東山道先鋒諸藩より届書寫

東山道出兵本藩人數信州上諏訪ニおゐて依命致手分甲州路罷越本月五日甲府ニ到着即日城代佐藤駿河守に及談判府城受取候然ニ翌六日朝賊徒共府城より三里計東ニ着陣候由相聞石和驛迄斥候差出候得者勝沼驛ニ致屯駐候ニ付因州高遠二藩及本藩之兵同時押寄候處驛中ニ關門を設け官軍を差障候躰ニ付押破り其番兵を追拂夫より惣勢を三手ニ分ち一ト手ハ因州一小隊本藩大砲隊隊長北村長兵衛本街道より進ミ一ト手ハ因州高遠之兵本藩小隊隊長小笠原謙吉吉川を渡り右ノ方より進ミ一ト手ハ本藩小隊隊長谷神兵衛左ノ山を攀ち敵背へ出候様約束を定置操出候處賊徒共街道の橋を撤し砲臺を築き罷在忽ち互ニ發砲賊徒ハ民家ニ放火し谷を隔て防戦長兵衛隊及苦戰候折柄因州勢其應援之爲め左ノ山ニ登り又因州高遠之兵及謙吉隊右ノ山ニ登り雙方より發砲合撃いたし賊徒共一時計り防禦候得共神兵衛隊急ニ敵背へ出賊三人討取大音を揚げ山上より餘賊を追下候故賊衆落膽要害を棄て候ニ付三面より追撃いたし神兵衛隊砲臺を奪ひ賊徒共敗走少々退又防戦仕候得共亦敗走し官軍進て鶴瀬驛ニ至り賊徒ハ遂ニ笹子峯を踰へ遁去候ニ付笹子の要害ハ因州ノ生兵へ托し甲府守衛之儀ハ眞田家に引渡本藩軍勢ハ江戸へ致進發候趣被表軍監共より達越候ニ付此段御達仕候討取候首級擄獲いたし候賊ノ姓名等ハ別紙ニ相認差上申候以上

覺

賊徒

保々忠太郎  
柴田監物  
市川五郎  
市川幸八郎  
中川權五郎  
原田金之丞  
疋田喜一郎  
佐々井安左衛門  
秋鹿慶之助

右小笠原謙吉討取申候

旋條砲一挺

玉廿四五計  
小銃十二三挺計  
合羽駕籠二荷  
雜物入共  
大小二腰

右本藩兵分捕仕候

長持十荷計

右因州及本藩兵互ニ分捕仕候

味方  
手負一人

右之者共眞田家に引渡申候  
會藩

山崎壯助

右北村長兵衛隊小川弼太郎銃丸ニ中り手を傷き  
小笠原謙吉隊今井和助謙吉を助け賊と戦被傷申候

右之通ニ御座候以上

三月十五日

山内土佐守

右當斬梟首仕候

首三級

右谷神兵衛隊討取但賊ノ隊長加々爪某と申者の首清太郎  
郎助小橋某討取申候

首一級

辰三月六日午刻於甲州勝沼驛大橋島居坂戦争いたし戦死手負分捕器械左之通

即死一人

明治元年

二六一



右天野祐治隊中之者ニ候  
 手負一人  
 大砲一挺  
 小銃三挺  
 大砲銅卵一ツ  
 太鼓負皮一ツ  
 太炮玉藥扱

右佐分利九丸組士之内ニ而分捕仕候  
 小銃三挺  
 右馬場金吾足立眞藏分捕仕候  
 右之通御座候此段御届申上候以上  
 因州  
 三月  
 和田 壹岐

三月七日言路を洞開し士民の意思を盡さしめ脱籍者を生せしむへからすとの旨諭達せらる  
 〔王政復古帳〕

今日大政官代に御呼出ニ付松尾形助罷出候處辨事ヲ御書付三通御渡相成候付則寫御達仕候以上

三月七日

林 新 九 郎  
 池 邊 棕 右 衛 門  
 青 地 源 右 衛 門

御家老 衆 三人

王政御一新之折柄天下ニ浮浪之者有之候而者實ニ不相濟儀ニ付十分之者ハ不及申農商たり共一切脱國不致様嚴敷取締被 仰付候畢竟言路鬱塞政令之不行届より自然脱國之もの相生候事故無上下 皇國之御爲者勿論主家之爲筋等存込建言いたし候者は大ニ言路を洞開し公正之心ヲ以其旨趣ヲ十分ニ盡させ上下隔絶之患無之様可致候猶其趣ニ寄り太政官代に茂可申出候様被 仰出候事

三月

三月七日外國交際に關し臣民均く朝旨を奉戴すへく若し違犯者あらは刑典に處せらるへき旨令達せらる

〔王政復古帳〕

〔三月七日太政官代にて辨事より松尾形助へ渡されたる書付三通の内なり〕

今般王政御一新ニ付 朝廷之御條理を追ヒ外國御交際之儀被仰出諸事於 朝廷直チニ御取扱被爲成萬國之公法を以條約御履行被爲在候ニ付而者全國之人民 詔旨ヲ奉戴シ心得違無之様被 仰出候自今以後猥ニ外國人ヲ殺害し或は不心得之所業等いたし候者は 朝命ニ悖り御國難ヲ醸成し候而已ならず一旦御交際被 仰出候各國ニ對し 皇國之御威信茂不相立次第甚以不届至極之儀ニ付其罪之輕重ニ隨ヒ上列之ものといへとも「削士籍」<sup>イナシ</sup>至當之刑典ニ被處候條銘々奉朝命猥ニ暴行之所業無之様被 仰出候事

三月

三月七日長岡護美襪を穿つことを許さる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔三月十一日井上村上青地松本より通信一節〕

一去七日太政官代より御呼出ニ付御留守居代として形助(尾松)差出候處左京亮様御職中御機御免被 仰出候付而之御書付被成御渡候右寫差上申候云々

參與職中被被 免候事

長 岡 左 京 亮

明治元年



三月七日姫路藩主酒井忠惇入京官位を止めらる

〔王政復古帳〕

(三月七日太政官代にて辨事より松尾形助へ渡されたる書付三通の内なり)

酒井雅樂頭

被止入京官位候事

三月

三月七日小倉藩主小笠原豊千代先年來避難して熊本に滞在し居たるが此日熊本を發して領地へ歸る

〔肥前外十五藩へ此方様々御使者被指立候一件〕

慶應四年

一小笠原豊千代丸様爲御歸國三月七日熊本廣町伊勢屋御發足ニ相成候段美濃殿宅に御家來之内參入申述候由ニ而御歡等之儀取調可申哉と御客屋方根取より申來且龜右衛門宅に茂參入委細申述候由ニ付上には龜右衛門より直ニ申上候由依之御歡被進物等之儀左之通ニ茂可有御座哉伺書差上候處思召寄不被爲在候由ニ而御下ニ相成候事

但御家族様方ハ此節御發足無之今暫御滞留ニ相成候由

小笠原豊千代丸様爲御歸國來ル七日熊本御發途之由依之御歡御使者を以左之通可被進哉

納島(此二字本朱書)

御端物

二端

朝鮮飴五斤入

一捲

交御肴

一折

御口上計

御家族様

〔小倉來使一件〕

慶應四年三月

一小倉様御家族様方當時伊勢屋に御出に相成居候御方之御年等問合候處左之通り之由申來

故左京大夫様御奥様

貞順院様

登代姫様

當近江守様御祖父備後守様御娘ニ而御幼年を御木家に

御出ニ相成居候由

豊千代丸様

御七歳

光姫様

故左京大夫様御實家之御女子御内實御養ひ豊千代丸様

御姉之御續

錦姫様

幸松丸様御叔父敬次郎様御子之由

銳吉様

御十九歳

御六歳

故左京大夫様御妾腹之御女子豊千代丸様御妹之御續

三月七日東海道先鋒總督府參謀海江田武次甲府の急報に接し駿府より兵を分け自ら率ゐて鎮撫に向ふ

〔一新録探索報告〕

薩州海江田武次より薩州大久保市藏へ之來狀極秘

明治元年

二六五



一昨日大惣督官御機嫌能當地御着到御入城被遊候御參謀正親町中將様西四辻大夫様御同様御安心可被下候先鋒御惣督並御副將直様御登城木梨西郷下拙同様 官御前より於而軍議有之來ル十五日慶喜巢窟へ官軍打入ニ相決し夫々手配り中仙道先鋒惣督へも急行報知何も臨機應變之都合ニ至り可然處昨晝時分甲府より急行報知之趣ニ之關東兵二千人計り甲城より十二里位之處猿橋と申處迄寄來甲之代官中山誠一郎と申者手代を以引合致候處賊申候ハ甲府鎮撫委任被申付各出張也と云手代夫之決而不宜最初天領にて官兵御差入相成り候素より鎮撫相成居必被扣候方可然杯と極々申入候處本來天領にて乍一端御預り致未返上之不致引取候事不相成と云是之去ル三日之事ニ而候因州土州人東山道より差分相成り入城致居候折柄右官軍運之強き處大幸不少奉存候當所滯陳濱松勢四百人計り引連賊徒征伐甲府鎮撫致候様夕部大總督官御前ニ於而被仰付誠難有御受致申候則今朝出兵仕候追々大吉を答可申上候取込中早々謹言

駿府滯陳

三月七日 海 江 田 武 次

大 久 保 市 藏 様

三月八日我藩横井平四郎を上京せしむへき旨重ねて令達あり

〔一新録自筆狀〕

辰三月二日京師ヨリ到來日記後書

同八日

一横井平四郎猶又名

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

肥 後 後 記

横 井 平 四 郎

御用候間早々上京可爲致候事

三月八日

三月八日在京長岡護美は我藩邸内物論沸騰して薩長の處置に不満なるものあり且つ兵制改革に洋法を採用するを否とする論者あるを慨し又横井平四郎を徴士に採用せらるゝ件等につきて在藩家老に情報す

〔一新録自筆狀〕

慶應四年三月八日京師より左京亮様御直書之寫

一翰申入候春寒未退候處益御清程奉賀候然之國許出立以前相考候よも御邸内之都合混亂不少餘程沸騰之勢を醸シ居候件々も不少尤大略相片付申候間先之御休襟可被下元來定見之開け候向ト開け不申向との混亂も少々之有之候得共是迄詰込之面々事情ニ疎ナル着眼よ見候之條理之不立事茂只々 朝命御遊奉ト申邊ニ慨嘆之勢ニ御座候然處小生着已後も大政官代ハザハノ、多ク小松帯刀杯も此邊ハ尤心配之よしに御座候尤兩三日ハ餘程宜敷相成申候小松木戸列ハ誠ニ懇意ニ御座候扱横井一件小生よハ涯分ヲ盡し申上候得とも最早言上之以前田上鐵之尤被差下候事も有之且岩倉様ニ拜謁之上書ヲ以而申上候處別紙登通之通御差越候間則入御披見申候得斗御諒察可被下候此上之御邸内より被差出候而之連も六ヶ敷形勢ニ候間 天朝に被差出切ト申候よ外無他候間左様御含可被下候且又御邸内も少々之物議且御人線等之義も有之候得共別段不費候と申し兵隊御改正之折柄御物頭之中ニも頑固火繩之論も有之深く痛嘆可笑之事ニ御座候當時徴士木村得太郎長谷川仁右衛門溝口孤雲老津田山三郎ニ御座候猶國友田尻列之如キ人物ニ而も差出可申候留局之方も今日ハ大分活眼相開け申候得とも鬼塚嘉太郎ニ而も又被 仰付候方敷ト相考申候御邸内よも起候義ニ之無

明治元年

二六七



之候得共御國議ニ而元田八右衛門ニ而も御差越可被成敷猶委細ハ後音可申上候内外之混亂人世之風波可驚事而已ニ御座候不日ニ各國之商館京地ニ充滿敷ト相考申候事ニ御座候先之右迄早々不具(別紙未だ見當らず)

三月八日

左 京 亮

御 家 老 中 様

玉 案 下

二仲御自愛專祈仕候兵制之儀於崎陽上田休兵衛ニ申越候段申置候處今日ハ 皇國之兵制相立可申勢ニ付何茂英之兵制ニとられ洋法を御取用可然ト相考申候間右申入候間上田に御通達可被成候尤御國ニ而も御取まらべ之筋有之候ハ夫ニ而もよろしく然し御邸内は英式に相成申候ニかし物論ハ有之候間御國之御兵制を被建段々ト實地ニ御運ビニ而可然委細有吉清助に御聞取可被下候

三月九日太政官代に行幸あり三職を召見し蝦夷地開拓の事を諮詢せられ且つ先帝の御旨を繼述し國基を確立し皇威を振起し萬民を安堵せしむへしとの旨を宣し給ふ

〔太政官日誌第五、王政復古帳〕

三月九日辰刻

太政官代エ 行幸被爲在御座ノ間エ 出御 玉座近ク三職ヲ被爲 召親ク蝦夷地開拓之事件ヲ 御下問有之一同大イニ開拓可然之旨ヲ言上ス此儀相濟テ後酒肴ヲ賜フ

敷旨曰 先帝深厚之 叡旨御繼述被爲遊度至重之 宸慮被爲在偏ニ寛洪ヲ以御國基ヲ被爲立度 思食候處兵革草卒ニ起リ不可言之勢ニ至リ内外御多難之御三職百官之兼奮發勉勵之力ニヨリ即今粗方向相立テ候段深ク 御満足候依之乍聊酒肴ヲ下シ賜候間各積日之勞苦ヲ可慰然候リト雖モ巢窟未タ平カス人心深憂懼ヲ抱候得者尙此上忠誠ヲ盡シ志ヲ遠大ニ期シ 皇威ヲ振起シ萬民ヲ安堵セシメ宿昔之 叡慮貫徹候様 御沙汰候事

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月十一日井上青地村上松本よ梨

以別紙申達候一昨九日 主上太政官代に朝五時過 行幸夕七時過 還幸被遊候

一右之御儀ニ付 若殿様兼而御先廻被仰出置候付可被遊御勳處御風氣ニ付御斷被仰上候

一左京亮様ニ之朝正六半時之御供揃ニ而太政官代に被成御出務候處今度 御新政ニ付而之被成御勳御満足被 思召旨御一統に副總裁様被仰渡賜御酒肴夕七半時過御歸座被成候

一若殿様御不參ニ付 還幸後 天機御伺之御使者被遊御差出方哉ト於太政官代相伺候處不被爲及共儀旨御差圖ニ相成申候以上

三月九日日本藩天草島警衛の爲め増遣せし物頭久武彌平左衛門等四隊を富岡に駐屯せしむ

〔豊後國御預所一件帳附天草島共〕

各儀於其許之可然ク所見計三ヶ所程ニ相分御警衛有之候様最前申達置候通候處此節増詰として被差越候久武彌平左衛門殿列之富岡に被相詰候様猶可申達旨候以上

三月十九日

御 奉 行 中

天草詰

御 物 頭 衆 中

三月九日東山道官軍大垣藩兵薩長二藩兵と俱に舊幕兵を武藏國築田宿に討ちて之を走らす

〔太政官日誌第五〕

當月八日武州羽丹生村邊ニ歩兵屯集之由ニ付薩州長州並弊藩人數爲斥候操出候處築田宿ニ集リ居候ニ付一同出進翌九

明治 元年

二六九



日朝六ツ半時過より及砲戦九ツ時頃迄ニ賊徒盡く敗走討取分捕等も多分有之趣急使を以申越候於出先 御總督御本陣  
にも御届申上候趣ニ者御座候得共此段不取致御届申上候以上

三月十七日

戸田 采女 正

(幕末實戰史附録)  
衝鋒隊 戦史

(前略)當時番町の歩兵聯隊に在て差圖役頭取たりし古屋佐久左衛門は脱走兵の日増に不良行爲増長するを聞き内心頗  
る穩かならず如何にもして是れを歸順せしめ他日一朝事あるに際しては大に用ゆべしとなし無二の親友たる今井信郎  
を説て同志に加へ協力事に當れり古屋今井等は豫め善後策を講じ更に内田庄司永井蟬仲齋天野新太郎楠山兼三郎等同  
氣相照すの士數輩と共に幕府に請て脱走兵鎮撫の許可を得彼等の屯集せる野州佐久間山に赴き藤吉の梶原雄之介初め  
近藤巴之助等重立ちたる面々を集めて理非曲直を説き利害を論したるに彼等も幡然改悟して服従を誓ひたれば是を武  
州忍藩に謹愼せしめ眞岡の代官山内源七郎を説て金子千兩を得盡く是を兵に分配して將來を戒め(中)茲に於て脱徒の  
始末も大方落着せるに付き一先つ歸京して事の委細を復命し更に此兵を率て今井の知人たる信州佐久郡中の條の代官  
松本某を誘ひ金穀を得て此を根據と定め兩野信越奥羽の諸藩と氣脈を通じ江戸に殘留せる一味徒黨と相應じ徳川家處  
分の如何に因ては大に成すあらんと三月朔日威風堂々甲府を發し武州桶川宿に到り大雲寺に宿營を張りぬ(略)(中)  
兩毛地方に於ける脱徒は已に鎮定せるも當時徒黨を組める無頼の徒は猶兵器を弄して諸所に出沒横行し頗る危険なる  
のみならず官軍は鳥羽伏見の戰鬪以來頗る神經過敏となり此一行に對しても疑惑を狭み稍もすれば迫害を加へんとす  
る形勢なれば充分に警戒を加へ行く行く斥候を放ち只管事なかれと漸く熊谷驛迄前進せしに斥候長秋澤貞治蒼惶しく  
引返し來り報じて曰く 勅使の一行は已に信州諏訪を出發し先隊は今武州本庄驛に到着せりと茲に至て衆心大に惑ひ  
今此一行と出會せんか如何ある間違ひを生じて葛藤を惹起し謂れなき賊名を蒙るも知れず滯らんか一行と相接するの

虞れあり今は遠路を迂回しても是れを避るに如すと忽ち衆議一決して道を右方に採り麥浪菜波の間を隱るが如く雖て  
羽生驛に進み只管勅使一行の通過をのみ待ち居たるに官軍は隊の延長十數里に及ひ容易に通過し去らんとせや且  
つ先隊の熊谷驛に達するや前進を停めて滯陣の模様ふりければ衆心大に倦み待つ事五日にして斷然前進に決す先づ兵  
を三分して今井信郎前軍に將とふり中軍は古屋佐久左衛門後軍は内田庄司是れを率ひ遠く淺間街道を迂回して前進に  
移り其夜は梁田驛に宿營する事とふしぬ翌朝總督以下總數八百五十四名天明を待て再び旅程に上らんとせしに哨兵急  
を告げて曰く「何れの隊ふりや不明なれど哨に乘じて前哨線に近附き來る部隊あり」と元より何事あるや知る可き筈も  
ふければ所在を確むる爲め士官を派して應接せしめんとせしに奇怪なるかふ使者未だ先方に達せざるに二手の軍勢は  
此時早く彼時遅く已に驛の西口及び北裏手より濃霧に乗じて突進し來り有無の沙汰にも及はで突嗟火口を開き急霰の  
如き彈丸を猛射し始めたるにぞ古屋等の隊は元より事を好んで殺戮をふすものに非ざるも事業に茲に至ては武士道の  
面目上相手の何者たるにせよ一矢酬ひざるべからず總督は涙を揮て開戦の布告をふしぬ時に三月七日午前六時驛く内  
に配兵の順備は整ひ今井信郎の率ゆる前軍は西口の敵に當り内田庄司は後軍を以て北裏手の軍に對し古屋總督は中軍  
を指揮して遊軍たり別に砲兵は前軍に屬して旋條線四斤砲二門を進め北面より突進し來る敵兵の横合を掃射し合戦は  
茲に開始せられて股々轟々砲煙天を被ひ喊聲野に滿ちて壯烈を極めたるが忽ちにして旋條砲の威力は偉大なる効力を  
現し敵が無二の楯と頼みたる障蔽物を思ふが儘に粉碎し盡して身を隠すの余地ふきに至らしめたるを以て敵は少ふか  
らず砲彈の射殺に遭ひ今は全滅の止むふきに至りたれば流石勇敢ふりし軍兵も八時頃に及んでは凌巡の色見へたるに  
より前軍は機を失せず總勢を擧げて追撃に移り進撃急進十町餘に及ひしに優勢なる敵の一隊は是れを見て急ぎ來援し  
追ぐる敗兵を收容して搦土重來悲惨なる白兵戦は茲に再び演出せられ龍攘虎鬪相混亂して世にも激烈なる戰鬪とはふ  
りぬ

我れに數倍せる敵を相手に追つ追せつ數時間に亘て力闘せる古屋等の隊も遂には多勢に無勢の詭に漏れず次第次第に



追戻されて漸く驛の入口に防戦せしが其時已に軍監柳田勝太郎差圖役中山振平野村常三郎等を初めとし戦死せる者二十八名砲兵頭取磯野光太郎軍監前田兵衛等重軽傷を蒙れる者三十餘名に達し猶續々死傷相次ぐの状勢にて戦闘力は著しく削減され健在なる者も拂曉よりの悪戦苦闘に未だ一物も口にせず魂疲れ氣衰へ士氣沮喪せる上大砲の車輪は碎け撃鐵は飛ばされ二門の大砲は已に使用し能はざるに至れるより今は無益の戦闘に有用の兵力を損じ主家の爲に殉せんとする大望の達し能はざらんを恐れ止むべく繰引の命を發して中軍を第一に前軍後軍交互に戦戦し漸く堤防迄退却を決行せしに捷も誇たる敵兵は飽迄追撃の手を緩めず猶も肉迫接戦し來れるを以て再び堤防に火線敷き残る山砲二門と力を合せ隊伍を亂して群り來る敵兵目掛けて一齊に發砲し瞬時に敵兵數百を殲し一時凌巡せしむるに至りたるも奈何せん此山砲とて僅かに短銃もて雷管を碎きつゝ發砲する有様なれば潮の如き軍兵を防ぎ止めん威力とはよく剩へ差圖役加藤惣兵衛以下十餘名討死し砲兵頭取田隊軍之助差圖役河原精之進等重軽傷を蒙れる者數十人に及び戦況は刻一刻不利に陥るのみにて何等の效果なきを以て負傷者七十五名をば一先つ田沼方面に落し置き重傷の爲め到底回復覺束なき者十四名をば不慮ふから戦友に於て其頭を刎ね形計りの埋葬を施して攻撃の緩るを待ち万難を排して河畔迄は退却せしが渡舟小にして大砲の運搬に堪へず命と頼める大砲も茲に至ては捨るの外なきより先づ其車臺を破壊し砲身には石を詰めて河中に沈め漸くにして梁田を去る一里余の田沼村に到て隊伍を整へ敵の襲來に備へたるが敵も亦多大の損害を蒙りたる事として渡河して迄追撃の勇氣あらざりければ除々に退却を開始して午後の三時頃漸く永野村に引上げ茲に初めて人員検査を行ひたるに死傷せる者百有餘名を數へ逃走せる者も若干あり云々

三月九日舊幕府は幕臣の暴動せむことを憂ひ恭順の意を守り君家に禍を及さざるやう深く謹慎すへしとの旨を諭達す

〔王政復古帳〕

辰三月九日備後守(川)殿御渡

今度追討使被差向候ニ付末々ニ至候迄も不敬之儀無之様此程より精々被仰付候事ながら猶又御諭遊し度思召候朝廷ニも謝罪の次第ニ寄る様ニも寛大之御所置被爲在候様子ニ御伺被爲在候得共當地多人數之内ニ者萬一心得違之者有之候而者其邊より恭順之境取失ひ候而者朝廷ニも最早寛大之恩召も絶させられ徳川家も是限之由京都より御伺はらせられ候間たとへ忠義ヲ存候而茂恭順之境取失ひ候而者朝廷に恐入思召候而已ならず立せられ候御家名も立せられず候様ニ成行候而者實以御殘念至極ニ思召候間人氣御取領之事ニ付此度大總督宮様御陣中ニ上臈御使ニ立られ候間何卒靜寛院宮様御當家之御爲ニ深御深痛被爲在候思召下々迄も貫通致し恭順之境取失さるよふ相心得候様厚御諭之事御領思召候

右之通大奥より被仰出候間末々ニ至迄心得違無之様可致旨向々に可被達候事

三月十日我藩箱根關門守衛の件に關して疑議を生し總督の指揮を仰く此日本藩安場一平總督府參謀を命せらる

〔王政復古帳〕

(三月十二日相州湯本在陣奉行淺井新九郎書御抄略)

御先手御物頭手者箱根關門守衛として同所に居殘殿御物頭三組三島より壹里半計南方並山邊臺場と中所關門有之候ニ付居殘守衛ニ相成申候大炮手一昨日より小田原に繰出四ヶ所手分ニ而殊之外迷惑仕候併靜謐ニ而御座候、前文之通所々に手分ニ相成一統迷惑仕候間追々督府に相伺尤箱根ハ關門之儀御承知之通通行繁之所にて當時ハ從御所御差留之諸伯有之日夜江戸より在所々々に引取之面々夥敷通行ニ相成一々相改ニ者御物頭甚當惑之様子も逐一兩督に言上且薩長之人數最早川崎迄押出尾備之人數も順々ニ繰詰小田原大磯邊者明所も出來何方にそ關門御預ニ相成申候様致願仕



候處箱根關門之儀者上下第一之要所ニ弱國小藩受持候處。無之兩督府箱根に着陣迄之處ハ御預被仰付見込被取計候様  
との旨ニ有之且先手之方明取宿等出來候共不苦段御沙汰ニ相成候不得止相止申候安場一平儀兩督に伺之儀有之候付罷  
出申候處參謀所々出張仕候付當分參謀被仰付候組者北村甚九郎に預候様清水方より演達ニ相成申候右參謀所々出張  
と申候ハ海江田武者甲府に被差出候由云々

〔安場一平自叙傳〕(男野安場家藏)

戊辰の變に際し出兵の藩命に應じ萬里丸より上京神戸港ニ至り慶喜東退の事を聞得直ニ上京の途ニ就キ世子の側ニ至  
る大テ東征の議決し先鋒の命ニ從ひ東海道惣督橋本實梁ニ名古屋ニ調し先發函根の關ヲ守衛す時に幕臣方向一定せず  
歸順の名を表して多ク郷里に歸る關門處分に疑議數條を生し互撰ニ依り蒲原驛滞在の惣督ニ其疑ヲ窺ふニ決し早急同  
所ニ至る使事終て調を賜ひ督府參謀の命あり夫より沼津鎌倉神奈川を経て遂ニ本門寺ニ移り大城收受之事を調理す云  
々

〔男爵安場家文書〕

關門通行之儀ニ付相伺候處左之通

- 第一二條 御親征中關門之規定肥藩より伺出「御指圖之旨」夫々「相答置候間」御指圖茂有之居候得之差向御條目等別段御渡無之との旨ニ候
- 第三條 宮堂上方諸侯伯通行之節 御親征中關門番土下座ニ不及尤前以通行之段ハ答有之事ニ付改而駕戸引せ候ニ不及との旨ニ候
- 第四條 正邪之辨者愈嚴重たるへく無辨之農商往來之取扱者苛察ニ無之やうとの旨ニ候
- 第五條 書面之通ニ候(此條今明かならず)

第六條 外國人故奈久通行無之旨ニ候得共萬一之節ハ時宜ニ隨差留置早々可被相伺候事

但言語不通之事ニ候得之輕卒之取扱無之様との旨ニ候

三月十日舊幕府は中山道總督府へ歎願せしに對し官軍の先鋒隊長より答書を交付したるを以て益々恭順の旨を守りて謹慎すへしとの意を舊幕臣に諭達す

〔王政復古帳〕

三月十日川勝備後守様御渡

大 目 附に

中山道御惣督府に爲御歎願大目付梅澤孫太郎被差遣候處別紙之通御惣督府より被仰出候趣ニ而先鋒隊長相渡候付爲心得相達候就而者彌以恭順之御趣意厚相守決而心得違無之様被仰出候

三月

右之趣萬石以下之面々に不洩様可被達候

徳川慶喜並家來共歎願書一通被致傳達及披露候處右者早速 朝廷に御差出可有之乍去先鋒總督 勅命を蒙り御發向ニ付而者私ニ進軍ヲ止候事者難被遊候何分大總督官及東海北陸兩道之總督共ニ於江戸御會議之上可被仰渡尤慶喜一身之進退者 朝廷に被爲伺候上ニ無之而者私之御取計難相成候右之趣意家來共に可被中渡旨御沙汰ニ候間御達申候也

東山道總督府

參 謀

三月七日

薩州御 人數 中

三月十日舊幕旗下の土山岡鐵太郎先に駿府に至り參謀西郷吉之助に面して慶喜恭順謝罪の意を



達し總督府の處置條件を得て江戸に歸報す

〔海舟日誌〕

○十日(三月)

山岡氏東歸、駿府にて西郷氏へ面談。君上之御意を達し、且總督府之御内書、御所置之簡條書を乞ふて歸れり。嗚呼山岡氏沈勇にして、其識高く、能く、君上之英意を演説して殘す所なし、尤以て敬服するに堪たり、其御書付は

一慶喜儀謹慎恭順之塵を以て、備前藩へ御預可被仰付事

一城明渡可申事

一軍艦不殘可相渡事

一軍器一字可相渡事

一城内住居之家臣向島へ移り慎可罷在事

一慶喜妄舉を助け候面々嚴重に取締謝罪之道屹度可相立事

一玉石共に砕く之御趣意更無之に付鎮定之道相立若暴舉致候者有之手に餘り候は、官軍を以て可相鎮事

右之條々實効急達相立候は、徳川氏家名之儀者寛典之御處置可被仰付候事

此程より法親王並一橋殿參政服部筑前河津伊豆等駿府或は箱根へ御出張御敷願之事ありしか各一つも御採用とも聞へず獨り山岡氏行くに當て總督府に達し參謀等此御書付を渡せり歸府後諸官驚懼してまたいふ所なし

〔一新録探索報告〕

山岡鐵太郎

右官軍參謀西郷吉之助に面會すべく赴く之途中警衛隊人銃口ヲ向け遮り止む山岡泰然曰徳川家之直臣某主用ニ依り官

軍參謀西郷吉之助ニ面會之事ニ而戰ヲ欲スルニ非ず若し我を討んとならば討取て首を出すべし道無クハ通さゞルヘシと返答爰ニ於而堂人も手ヲ出す者無し西郷に面會吉之助左右ニ六キウ砲ヲ構へ山岡之後ニ刀ヲ拔て持居者有之如何ニも嚴威ヲ示す山岡之此度御征討之官軍東下之處主人慶喜ニハ恭順謹慎東叡山籠居致し徳川臣民何れも恭順の道ヲ不失管乍去中ニ之如何様之心得違之者可有之哉も難計若し其節主人恭順ニ障り無之様致度江戸之方ハ鎮靜方ハ手を盡す事なれとも衆人之中如何様之者有之哉も難計此儀——致吳候様致度且又征討官軍御討入之儀ハ御有免可有之管就而之若御討入有之てハ人々心服無之自然人心不居相成候事故何卒人心居合候様取計方御頼申度且又海陸軍器差出候様之御沙汰も是以命ヲ奉し難ク又々武備之有之ハ武士之兩刀ヲ帶ると同様の事なれハ是ヲ可渡と中共可渡管ハ無之右之外いづれも難成儀何卒致吳候様申請ひ候へ之吉之助答ニ尤之事評議可致答たる由

〔防長回天史第六編上〕

官軍東征(抄略)

同(三)六日山岡益滿久之助ト共ニ駿府大總督ノ本營ニ至り西郷吉之助ニ會シ恭順謹慎ノ意ヲ陳シ且總督府ノ徳川氏ニ提出スヘキ條件ノ内命ヲ乞フ西郷付スルニ左ノ内書ヲ以テス(前記條件ニ同シ)十日山岡歸府シテ總督府ノ條件書ヲ出ス諸官惶惑シテ復々言フ所ナシ

三月十一日長岡護美は在京諸藩親交の狀況及び親兵設置の要を略叙し本藩政府に通告す

〔一新録自筆狀〕

春寒未退乍暖乍寒時勢亦如此追々相認候貳通之後昨日ハ於圓山亭薩州侯長州侯阿州侯藤州侯小生集會小松大久保廣澤木戸中島宮田諸藩各集會酒宴を催し緩々相親み無隔意米田長谷川も一同集會ニ御座候各醉氣ニ而面白キ事ニ御座候扱之追日關東之形勢汽船より報告有之愈以伏罪之實跡相立申候ニ付而之寛大之御主意ニ被仰出度越老公尤御盡力ニ而



大キニ能キ都合之様ニ有之候將又吉井幸輔大村益次郎杯局中申談天下之諸侯如此兵力を京師ニ費し候而之難相成就而之一刻も親兵を御選び有之御警衛被 仰付各國之諸侯幸ひを得候様有之度且之西の宮尼ヶ崎を初メ攝海岸防禦等皆所々之御方に被 仰付置候處是以疲耗不仕様有之其上同所ニ長く滞在せまハ風弊不少間士氣不屈候様處々ニ轉衛被 仰付候方可然西洋軍艦を各國ニ差出候も港内一ヶ月計リニして亞細亞洲所々ニ轉候規則誠ニ美事ト被存候儀小生初何々も同意ニ而堂上方ニ申入候様有之度ト閑叟公も申談シ先局中之仁和寺様御初メ申上候處御喜悅之御模様ニ御座候追々親兵御養之會計ハ可有之先加州侯より當年分七十萬俵御献米之筈ニ付夫ニ而御養之筈ニ御座候萬里丸出立ニ差臨ミ早々不敬之至御海容可被下候

三月十一日

左 京 亮

御家 老 中 様 玉案下

二仲御自愛專祈仕候

三月十二日我藩副奉行淺井新九郎は相模國湯元陣中より征東軍進行の次第甲府の戦争及び總督府の徳川氏處置に關すること等を藩政府へ通報す

〔王政復古帳〕

飛脚差立申候間小翰拜啓仕候若殿様良之助様益々御機嫌能被遊御座奉恐悅候將各様愈御清寧被成御水務珍重遊悅仕候此元清水方一手無別條去ル二日駿府出陣同六日相州湯元に本陣着ニ相成（中略、此間の文は三月十日箱根關門守備の件に關し總督府の指揮を仰ぐの條に出つ）去ル五日六日舊幕府之兵と土因之官兵と取遣始候由舊幕府之兵會人新撰組等にて甲府之東猿轡邊に兵器携候者相見候付代官所物見ヲ懸候處人數三四百計陣行ニ而參候付何方に參候哉相尋候處甲府鎮定之爲ニ罷越候由申出候付甲府者最早鎮定仕候付參ニ及不申且官軍關門及堅候間差扣候様説得仕候處關門者幕府之關門ニ而是より相堅候由にて押而罷通

候付土因より人數押出相懸ニ而直ニ炮戰ニ相成五日終日又六日終日七日休戰八日飛脚出立後炮戰相見炮聲相聞申候由督府に注進有之候當手物見岩男助之尤歩御使番野田善之尤被差出申候未報告無之現大督帥宮様ハ駿府に滞留先鋒兩督府一昨日沼津之驛に着ニ相成今暫者同所に御滞留之由參謀木梨誠一郎先手々々之様子爲見籍昨日川崎に參夫々々參り又夫々横濱に參候由鎌倉へ兩督府陣所見立候由横濱外夷に應對有之候得共主意相分不申先手々々參候儀者隊長々々に申含之儀有之候由密事有之別録上仕候付極々機密御披見覺御家老衆迄ニ而他ニ洩候而相成不申候付精々被入御念被下候様奉願候前文之通所々手分且江戸探索兩人被差越甲府に差越歩御使番歩御小姓可然人物手足不申候付阿部野權平甲斐武一郎内田敬之助等可然御用立候人物兩人計急々被差越候様御取計被成下候様ニ希申候別紙之通ニ而此節ハ於江戸戰爭者必定相成可申其用意專手當仕候且又御承知之通ニ而此節別段御人減ニ而先日駿府方差越候飛脚番ハ急々被差返候様當時飛脚番無之此節小使之内方差立申候間跡者財津小拙之從者共御用ニ遣候様申談置申候位にて御賢察奉仰候尤此節飛脚番此許に被差返候節者惣御人數方宿狀等も參候ハ、御遣可被下候而者如何勿論出陣仕候而茅屋ヲ顧ミ戀々ト有之儀本意ニ無之候へ共間々老人病人等有之候而々も有之旅情之常ニ而古郷ヲ思惟仕候儀當然ニ御座候間可然御取計を仰候最早今日ニ而京都出立三十日ニ相成候得共追々幸便ニ有之候へ共惣軍古郷之様子承候者無之已ニ澤村に被差添候飛脚番者御國許方被差越候者ニ而少々御國許御模様共承候位ニ而御座候良之助様御許に御着之儀傳承仕候迄ニ而京地之様子如何案勞仕候事御座候何様遠境出軍之情態御憐察被成下一統之氣追ニ相成候様御取計之程奉希仰余者後鴻ニ讓置申候以上

三月十一日

淺 井 新 九 郎

御 奉 行 中 様

猶々時下隨分御自重御專一萬祈仕候御繁務之儀深奉察候此許も近來用繁ニ相成昨日箱根に參段々相談等いたし清水方者一昨日箱根ニ被參今日者歸之筈ニ御座候以上

明治元年

二七九



機密

一大督府に江戸方より日光宮様靜寛院宮様御款願書御差出ニ相成日光宮様御款願之趣者御取上之稜無之追而被差返候筈ニ有之候靜寛院宮様御款願之趣者初慶喜公御相續之御尊慮ニ不被爲在候處從御所被仰出候儀ニ付無致方被差置候處遂ニ失體を被重今日之形勢ニ相成此節德川家御親征被仰付候へ者乍恐直ニ御自害之御覺悟ニ被爲在

一旦德川家に被嫁候而者德川家之御家族ニ相違無之候ニ付本文之通  
若又慶公迄被爲觸天怒御追討被仰付候て可然御事ニ被思召上候段大惣者府に被仰上候由ニ而大督府御尤ニ御聞上相成候由

一慶公上野退隱後恭順之姿ニ有之候へとも内輪ニ者兵を被募候様之儀も有之由ニ相聞迎も御切腹無之而者不相濟勢ニ有之江城當時之執權田安中納言様松平確堂様三河守様御隠居若老ニ而大久保逸翁勝安房專旗下鎮定盡力有之田安公確堂公内々取扱ニ而慶公割腹有之候様周旋有之候由右ニ付攻手急々ニ攻懸候勢ニ而別紙之通進撃期限被仰付候へ共江城内輪之取扱調候而攻入ニ茂相成可申候

一橋玄洞公 勅使御迎として川崎迄御出ニ相成候へ共薩長方御差留申候由當時池上本門寺に止宿ニ相成候其外旗下等之款願書悉被差返候而愈以差迫候勢ニ江戸に相響候様仕懸申候様子有之逆も慶公之一命者免無之儀ニ而是迄之處を以考候へハ殘念之至ニ奉存候併今日之勢ニ相成候而者致方無之候併德川家血食ニ者差支無之田安家御相續ニ被仰付候御内儀百萬石以上者相違有之間敷旗下も夫々被仰付譜代家之分 朝廷御直臣ニ被召本領安堵被仰出候由ニ而先治安ニ趣申候様被考申候併江戸之逆茂一旦之沸騰必然ニ被存候間無怠様用意仕候事ニ御座候以上

從相州湯許

淺井新九郎

三月十二日  
御奉行 中様

三月十二日我藩從軍醫員内藤泰吉關東の情況を在京の山形典次郎等に詳報す

〔王政復古帳〕

三月五日大總督府中着橋本卿ハ同九日府中發途十日沼津着滯留ニ相成居申候扱江戸事情ハ慶喜彌恭順ニ而御座候然處全拜慶喜恭順と申儀城を開き東叡山ニ退キ申迄ニ而幕下方款願之次第も尤と申持ニ至兼候處清觀院宮様方女使を以京都ニ被仰上候ニ者私事 朝廷之血脉あるら一度德川ニ降嫁いたし候上ハ全德川家之後室ニて元來慶喜ヲ養子ニ被仰付候節德川家之家督ニ可然者ニ而無御座候處御相談と御座候得ハ遮而御斷可申上管之處何之御相談も無之直ニ家督を被仰付候上者致方も無之何とも申上候譯も無之只々心痛罷在候處慶喜心得違ニて正月三日之亂暴ニ及於慶喜ハ全く

朝廷之逆臣其罪不可通候然ルニ德川家ニおゐてハ其罪と申儀ニも有之間敷如此官軍御指向ニ相成候ハ慶喜一人を被罪候思召ニ候哉德川家ヲ御潰しニ相成候思召ニ候哉慶喜一人ヲ御征伐とあれハ重々敬服仕候萬一德川家ヲ御潰しと御座候得ハ何分我家之眼前ニ亡候を見るニ忍不申自殺仕覺悟ニ候兩端之處如何之思召ニ候哉との伺款願也

右之一段 朝廷ニも總督中ニも大ニ相貫候而此節之役之全慶喜一人を共ニ御征伐之御主意ニ相決し居申候 是木梨精一 郎内々委 細承り候 坂木梨儀者昨十一日方先鋒之藩兵之分ニ用事有之急ニ當驛ヲ出立候海江田儀も府中甲府ニ罷越居木梨も出立跡ニ參謀一人も無之折節安場氏木梨氏立前ニ用事有而橋本卿ニ參り直ニ參謀職被仰付木梨共緩りと咄合相濟立別申候

江戸之情實者清觀院宮様右之通之思召之上外ニ江戸人材之内方も必死と官軍ニ意ヲ通し幕下ヲ大ニ鎮撫ニ力を盡シ候付先今日迄之處ハ大略慶喜ニ此上之反逆ヲ勸メ候人者無之由ニて幕下方官軍ニ意ヲ通し居候人よりも何卒急擊無之様ニと内々之頼本り

右之通之次第ニ而萬一少々幕下沸騰之者有之候共幕下之上方手ヲ付鎮撫ニ及候半又少々之沸騰雖レハ少戰有之候歟ハ

明治元年

二八一



難計候へ共先大駭大事ハ無之ものと被相考申候大島吉之助大總督之參謀ニ而候處昨日橋本卿ニ参り木梨同道先鋒手之様ニ参り安場も大島とハ緩りと囁合ニ相成互ニ大ニ安心ニ相成候也御座候右之次第ニ而橋本卿ハ四五日も當地御滞座ニ而木梨先鋒手ハ一筆之書狀参次第函關御越ニ而追々鎌倉ニ御陣ヲ被居候御内存也  
右件々安場氏ハ紙面も出来不申私ガ執筆仕候様只今箱根之本陣ガ御飛脚通り懸り私ニ相認候様との事ニて大意ヲ拜呈仕候以上

三月十二夜四時

山形典次郎殿

山田五次郎殿

内藤貞八様

内藤泰吉

前文海江田甲府ニ參候儀ハ甲府ガ江戸迄之内猿橋と申處ニ會之脱走人五百人計實ハ百五十人計之由參候付因土之東山道兵ガ甲府ニ繰込ミ使を以會勢ニ尋候處甲府鎮撫之爲ニ罷越候と答申候使者曰甲府ハ最早官軍ガ鎮撫ニ相成居候上ハ猶又其勢ガ鎮撫と申而ハ間違も起り可申夫ハ相止メ候様ニ申向其上此間ニ關門も有之因土ガ相固メ居通行も出来不申と申向候處會勢より申候ハ夫ハ幕府之關門故是ガ相固候逆乗り入因土兵ヲ戮セ五日ガ戰始り六日迄相戰皆々追散し官軍兩人死亡と申事ニ而甲府ハ是限り之事歟と相考申候右會勢之沙汰ニ而海江田ハ七日ニ府中ヲ立未タ歸り不申候  
京都之事情一切淺井氏列ニも相聞へ不申一々急ニ御申越候様安場氏ガ申聞ニ相成候政府ニも飛脚ハ追々相立御申向可被下候

此狀者直ニ政府に御出し可被下候御奉行ニ直付と考候得共指扣候段御斷可被下候

三曰木梨ハ大ニ入魂ニ相交候處非常之人材ニ而當年廿六才坂下良馬引續之人と看定仕同人心中之事皆々吐露仕大ニ講習仕居安場氏も大ニ信仰ニ而一軍中ニ其信相顯居大幸之至ニ御座候以上

三月十二日小笠原豊千代領國豊前田川郡に歸邑す

〔若殿左京亮御藩坂中  
御國京師仕懸返達上帳等扣〕

辨事御役所に

私儀去々寅秋以來肥後表に逗留罷在候處去七日同所出立今日領分田川郡に歸着仕候此段御届申上候尤右之趣之長崎裁判所にも御届仕候以上

三月十二日

小笠原豊千代

三月十三日我藩汽船を兵庫港より關東へ廻航せしめ且つ輸送藩兵として横濱を警衛せしむへき旨命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

肥後蒸氣船

右來ル十八日兵庫港揚關東に可被差廻旨 御沙汰候事

三月十三日

銃隊人數百人乘組駿州三島に着船江城之模様ヲ窺横濱港に乘廻シ彼地警衛被 仰付候事

大原侍從殿並參謀兩人に諸事御委任相成候間各々其差圖ヲ請候様可相心得事

〔自筆狀並稜書〕

慶應三年十月より翌明治元年十二月迄

同十三日

明治元年



一蒸氣船關東に被差廻候様且銃隊百人乗せ組横濱警衛被仰付候  
但兩肥薩土長之由也

三月十三日神祇官を再興し祭政一致の舊典に復し且つ諸國神職の者を支配せらるへき旨布達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月十三日御所より御呼出御渡之御書付寫

此度王政復古神武創業之始ニ被爲基諸事御一新祭政一致之御制度ニ御廻復被遊候ニ付而之先第一神祇官御再興御造立之上ハ追々諸祭典茂可被爲興儀被仰出候依而此旨五畿七道諸國ニ布告シ往古ニ立歸諸家執奏配下之儀之被止普ク天下之諸神社主禰宜祝神部ニ至迄向後右神祇官附屬被仰渡候間官位を始諸事萬端同官に願立候様可相心得候事但猶追々諸社御取調並ニ諸祭奠之儀モ可被 仰出候得共差向急務之儀有之候ハ可訴出候事

三月

三月十三日本藩世子護久刑法事務局輔を免せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月廿日井上才七村上源助より 四月朔日着(節略)

一去十三日辦事御役所より御留守居御呼出ニ付青地源右衛門罷出候處若殿様刑法事務局輔被遊御免候段之御書付一通被成御渡候右寫差上申候

刑法事務局輔被 免候事

細川 右京 大夫

三月

〔慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄  
自筆狀並稜書〕

(三月廿日溝口三宅より在藩家老へ報告一節)

一若殿様刑法事務局之方ハ初發より御不安意ニ而御通之思召ニ候處此節ニ到り被免議定一偏ニ被爲成最上之御都合ニ相成申候薩州侯杯も議定迄ニ而御分職ハ無之其分諸侯方も追而ハ御同様ニ相成御模様ニ承り申候

〔小島家見聞雜錄 慶應四年從八月  
至十二月〕

小島伊左衛門三月十一日京都より別段之一書

一若殿様御儀今月三日夷使 參朝之日御參 内後者御異例之御模様ニ而大政官不被遊御出務候得共御客様或之小松帶刀如キ之者共被召寄候段恐なら何分共之御都合ニ被爲在候哉と相尋申候處サル仁申候ハ議定職被爲蒙 仰御刑法惣督之重キ御分職ニ被爲在候處土藩土夷人を殺候末切腹被 仰付候得共不違尊聽亦頃日林田衛太郎列夷人に亂妨一條彼同志之浮浪被召捕御吟味ニ相成候處無罪明白たるに違島可被 仰付ニ相成候間於刑律不當之儀被仰達候得共不立刑又打變り其節亂妨ニ者不及候得共全く同意たると申處を以死ニ宛り候由仍而木村得三條様ニ御義論申上候處早速御負ニは相成候得共理之事者行をす然者御職ニ被爲居其詮無ク殊ニ天下之見る處者事無大小ト刑罰ニおるてハ此方様より出ると存候ニ右之通不當之刑ニ被處候而者其怨ニ此方様ニかゝる譯ニハ無之哉迎も御趣意不相立ものニ候得ハ御斷之外被爲在間敷奉恐考候段申候現者御異例之各別之御事ニハ不被爲在と奉存候

三月十三日東山道先鋒總督岩倉具定全副總督岩倉具經進みて江戸市外板橋驛に到る

〔防長回天史 第六編上〕



官軍東征(抄略)

十二日(三)先鋒(東山道鎮撫使)板橋ニ着ス恰モ東海道先鋒品川ニ着セシノ日ナリ翌日總督岩倉兄弟板橋驛ニ着ス甲州經由ノ別軍ハ勝沼戰勝ノ後十一日八王寺ニ着シ千人組ハ武田北條ノ遺臣ニシテ幕府ノ慶傳ヲ仰カスヲ慰撫シ十三日府中驛ニ十四日四谷高島藩邸ニ着ス是ニ於テ東海東山兩道ノ官軍全ク江戸市外ニ集リ總軍將二十五日ヲ期シテ江戸城ヲ攻撃セントシ軍令既ニ全軍ニ下レリ

〔一新録探索報告〕

廿五日出書狀(筆者不明)

一當地之形勢追々せりつめ有之候へ共先書も申上候通敷願中なを共多分關八州敷外國遣し親下ハ御預け位之事ニ而相濟候ハ、宣敷哉と申時ニ御座候板橋宿に岩倉様兩方御着滯留品川宿ニも薩長旅宿多分人数江戸に入込諸明屋敷に滯留毎日ノ市中歩行ニ御座候關東方手も足も引拔るを何共あわなる事筆紙ニ難盡會津領分殊之外嚴重なる固よて此節登人も通行致させ不申候奥州白川口せん堂驛ニ先關門出來其外口々同様ニ而是者多分事發り可申哉何卒平穩ニ致申度而已奉願候下略

三月廿五日

三月十三日日本藩政府は軍制改革に着手せしこと及び出張兵交替の件を在京重臣に通報す

〔一新録自筆狀〕

戊辰三月十三日京都へ之自筆草稿

以別番申達候從若殿様御直書被成下候御條々者去ル五日御請申上委細者本間治兵衛へ申含置候通ニ而去ル五日頭々に書付相渡則右之寫以他筆申達候通候間於御元も夫々可被及御達と存候御軍制御改革一件付而者必多度打寄申談席中御

備四者別番あらへ之處ニ落合御備立之圖式茂致出來候間此末急々取堅御施行ニ相成候様專盡力致し居候且海軍之方も早々御手賦無之候而者難相成候付先差寄御總奉行始炮術士官等之人柄御撰用之儀最中取あらへ居候間是以近々御沙汰之時ニ相運申答ニ御座候右等之趣若殿様公子君ニも被仰上可被下候  
一御元詰地場御番頭之儀下津組者當六月交代之期限ニ付輪番松野孫三郎組共其中出京之及達可申澤村組者最早餘程之詰越ニ相成御地之模様何程ニ可有之哉右交代等之儀ニ付而者由良へ申含置良公子ニも申上置候付御地之模様者可被仰越と相考候得とも便宜ニ任せ得御意申候條御模様ニ應松野ハ引上出京澤村組と交代も可被仰付如何様とも被仰越次第取計可申と奉存候以上

三月十三日

惣 連 名

溝 口 殿  
米 田 殿  
三 宅 殿

〔安津免久佐〕

覺

今度御軍制御改革被 仰出候ニ付御備頭中に茂話合相決候趣左之通  
一御昇ハ被廢止四半之御旗貳本宛一ト御備被渡置度奉存候  
一役昇圓居馬驗分明印等惣而被廢止度奉存候  
但惣備ハ中軍ニ自分紋之四半壹本持せ可申候  
一差物者被廢止肩印ニ而身分之御取分御定有之度奉存候  
但法被茂被廢度奉存候

明治元年



一當時之御備之儘御人數増減等無之様西洋之規則折衷を加別紙之通取調申候六御備之儀ハ調之通被 仰付度奉存候  
 一金被旗之相圖者惣而相止號令ニ而御備之駢引仕度奉存候  
 但螺貝ハ被爲置度奉存候  
 付紙

一出張之節衣服之儀者惣而下着ニ小袴着用ニ仕度奉存候  
 但具足并服當等着用ハムし度面々勝手次第被 仰付度奉存候  
 一此節申談通被 仰付儀ニ御座候ハ、御物頭ハ一小隊之長ニ而繰廻等一ト通ニ而者被行申間敷是迄通御願遣ニ而被仰付候得ハ老年之面々多迎茂壯年ニ無之而ハ充分差入稽古仕候儀茂何程ニ可有御座哉左無之而ハ實地ニ臨ミ駢引之指揮も届兼可申依而向後ハ御願撰被差止御役高等も被廢止御撰作以上御人撰ニ而被 仰付度奉存候  
 一御備組之面々平常歩操之儀熟練不仕候而ハ隊長之司令出來候様茂無之依而御番頭以下足輕迄於演武場炮術并歩操之儀早々鍛練仕候様一統ニ至急ニ御布告有御座度奉存候  
 一出張之節ハ惣而燒出御賄被下度左候へハ幕陳鍋等之雜具持越ニ茂不及充分雜人茂減し可申見込ニ御座候  
 右之通稜々奉伺度候條至急ニ御差圖奉願候以上

三月十三日

長岡監物  
 有吉將監  
 郡 夷 則

三月十三日東海道先鋒總督府參謀木梨精一郎は英國公使と横濱に會し徳川慶喜の處置につき談判す

〔王政復古帳〕

〔三月廿日參謀安場一平の報告書に添付せしもの〕

横濱情實

去ル十三日木梨精一郎横濱ニ參り英之公使ニ面會いたし公使曰此節慶喜粗暴ニ附而御追討ハ御尤之事なり然ル處慶喜彌恭順相愼候上ハ死ニ入レ候道理ハ無之助命有之度江戸城明ケ渡し 朝廷御請取ニ相成候へハ 朝廷之御趣意ハ相立可申西洋各國ニおゐてハ假令暴惡之人ト雖一度大權を取り候人體を死ニ入レ候例無之萬國公法之道理如斯既ニ佛之先ナボレラン其道を失ひ候へとも放逐迄ニ而死一等を赦し有之候と申候右之通之事ニ而木梨茂尤之事ニ思大總督府ニ駢歸談判相濟候而木梨ハ直ニ猶又横濱へ參り申候而同意之返答いたし居候大總督府ハ全英公使之言を待たす其前より助命之内議ハ起り居爲申慮幸公使之一言を以彌夫ニ決定ニ相成申候様ニ相聞此儀別紙ニ相認置候西郷吉之助品川より上京之節木梨も駿府に而囁合候事故京師に茂相達申事と相考申候

三月十四日天皇祖宗の祭典を宮中に行ひ神明に誓ひて廟謨を定め五條の誓文並に宸翰を下し給ふ翌日之を發布せらる

〔太政官日誌第五〕

三月十四日南殿ニ於テ

天神地祇御誓祭被爲在公卿諸侯會同就約ノ次第左ノ如シ

一午ノ刻群臣着座

公卿諸侯母屋殿上人南廂徵士東廂

一鹽水行事

神祇輔勤之吉田三位侍從

一散米行事

神祇權判事勤之植松少將

一神祇督着座白川三位



- 一 神於呂志神歌
- 一 神祇督勤之
- 一 獻供
- 一 神祇督同輔同權判事等立列拜送同輔 津和野侍從點檢
- 一 天皇出御
- 一 御祭文讀上
- 一 總裁職勤之三條大納言
- 一 天皇御神拜
- 一 親夕幣帛ノ玉串ヲ奉獻シタマフ
- 一 御誓書讀上
- 一 總裁職勤之

- 一 公卿諸侯就約
- 一 但一人宛中央ニ進ミ先ツ
- 一 神位ヲ拜シ
- 一 御座ヲ拜シ而後執筆加名
- 一 天皇入御
- 一 撤供
- 一 拜送如初
- 一 神阿計神歌
- 一 神祇督勤之
- 一 群臣退出

御祭文之御寫

懸 久毛恐文  
 天神地祇乃大前今年三月十四日乎生日乃足日聖撰定天稱宜申左久今與利天津神乃御言寄乃隨仁天下乃大政  
 執行之天親王卿臣國々諸侯百寮官人衆引居連天此神床乃大前仁誓久遠近頃頃保比邪者乃是所彼所仁荒備武  
 比天下佐夜藝仁佐夜藝人乃心毛平穩 故是以天下乃諸人等乃力盡合世一之津仁 皇 我 政乃輔翼奉和令仕奉給閉止  
 請祈申禮代設横山乃如置高成良奉形聞食日天下乃万民 治給比育給比谷蟻乃狹渡極白雲乃墮居向伏限逆敵對  
 者說令在給受

遠祖 尊乃恩 賴蒙 利天 無窮仁仕 奉 人共乃今日乃 誓約 遠 者 天神地祇乃 倏忽仁 刑罰 給 物曾止 皇神等

乃前 誓乃吉詞申給止 申

御誓文之御寫

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ  
 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ  
 一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス  
 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ  
 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ泉基ヲ振起スヘシ  
 我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ 朕躬ヲ以テ衆ニ先シ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス業亦  
 此旨趣ニ基キ協心努力セヨ  
 年號 月日 御 諱  
 勅意宏遠誠ニ以テ感銘ニ不堪今日ノ急務永世ノ基礎此他ニ出スヘカラス臣等謹テ敬旨ヲ奉戴シ死ヲ誓ヒ黽勉從事冀  
 クハ以テ 宸襟ヲ安シ奉ラン  
 慶應四年戊辰三月

總 裁 名 印  
 公 卿 各 名 印  
 諸 侯 各 名 印

〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳、太政官日誌 第五〕



三月十五日太政官代に御留守居御呼出御渡之

御書付寫

御宸翰之御寫

朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ爾來何を以て萬國に對立し

列祖に事へ奉らんやと朝夕恐懼に堪ざる也竊に考るに中葉朝政衰てより武家權を専らにし表は 朝廷を推尊して實は 敬して是を遠け億兆の父母として絶て赤子の情を知ること能ざるやふ計りなし遂に億兆の君たるも唯名のみになり果 其か爲に今日 朝廷の尊重は古へに倍せしが如くにて 朝威は倍衰へ上下相離るゝ事皆壞の如しかる形勢にて何を 以て天下に君臨せんや今般 朝政一新の時に膺り天下億兆一人も其所を得ざる時は皆 朕が罪なれば今日の事 朕自 身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立古

列祖の盡させ給ひし難を履み治蹟を勤めてこそ始て天職を奉して億兆の君たる所に背かざるへし往昔

列祖萬機を親らし不臣のものあれば自ら將としてこれを征し玉ひ 朝廷の政總て簡易にして如此尊重ならざる故君臣 相親みて上下相愛し徳澤天下に洽く國威海外に輝きしなり然るに近來宇内大に開け各國四方に相雄飛するの時に當り 獨我邦のみ世界の形勢にうとく舊習を固守し一新の效をはからず 朕徒らに九重中に安居し一日の安きを偷み百年の 憂を忘るゝときは遂に各國の凌侮を受け上は

列聖を辱しめ奉り下は億兆を苦しめん事を恐る故に 朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ

列祖の御偉業を繼述し一身の艱難辛苦を問はず親しく四方を経營し汝億兆を安撫し遂には萬里の波濤を拓開し國威を 四方に宣布し天下を富岳の安きに置ん事を欲す汝億兆萬來の陋習に慣れ尊重のみを 朝廷の事となし神州の危急を知 らず 朕一たび足を舉れば非常に驚き種々の疑惑を生し萬口紛紜として 朕が志をなさざらしむる時は是 朕をして 君たる道を失はしむるのみならず從て

列祖の天下を失はしむる也汝億兆能々 朕が志を體認し相率て私見を去り公義を採り 朕が業を助て神州を保全し 列祖の神靈を慰し奉らしめは生前の幸甚ならん

右御 宸翰之通廣く天下億兆の蒼生を 思食させ給ふ深き 御仁惠の御趣意ニ付末々之者に至る迄敬承し奉り心得 違無之國家之爲に精々其分を盡すへき事

三月

總 輔

裁 弼

三月十四日日本藩末家細川利永江戸より京都に至り壬生の地藏院に入る

〔密書輯録〕

自著子爵細川利永履歴大略

一慶應四年三月四日江戸引拂海路旅行十四日入京本陣壬生寺ト定京着萬事宗家ノ指揮ヲ受ク

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月廿日井上村上より四月朔日着

細川若狭守殿去五日江戸表御乗船同十一日兵庫表に御着船同十四日御京着壬生地蔵院に御旅宿ニ相成申候依之太守様 顯光院様御前様より被仰付越置候趣を以御歡御留守居御内使者を以被仰進候儀取計申候右ニ付若殿様より者御重詰一 組被進左京亮様より者御悅一ト通右一同被仰進候事御座候以上

三月十四日我藩兵箱根關門の守衛を小田原藩に譲りて前進す

〔王政復古帳〕

（三月十八日慶應在陣後并新九郎通信の一節）



先日從湯元得貴意候通存外行軍も緩ニ相成十四日函關小田原藩に引讓同日出立十五日藤澤に着陣又々露陳ニ相成云々三月十四日舊幕臣勝安房高輪薩藩邸に至り大總督府參某西郷吉之助と徳川慶喜謝罪の件を談判す西郷領する所あり自ら總督府に至り指揮を請ふを約し且つ令を諸軍に傳へて明日の江戸城進撃を中止す

〔王政復古帳〕

三月廿日安場一平の報告書ら添付せしもの

一慶喜儀謹慎恭順之廉を以備前藩へ御預可被仰付事（外六條略す、三月十日山岡鐵太郎西郷吉之助に面會云々の條にある箇條書に同じ）

右之條々先達而大久保勝兩氏より之内使者山岡鐵太郎と申仁駿府大總督府ニ參候節大總督より内々勝氏ニ御含め被置候然ル處勝氏ニ面會なくしてハ幕情相分兼申候付西郷吉之助去ル十一日沼津を通り品川ニ罷越極内々勝氏を呼出候勝氏右之件々ニ付而御返答ニ〇重覺御尤千萬之件々也然ル處希クハ慶喜御預之儀之水府ニ被仰付度（備前ニ而ハ幕情扨格之由）

〇旗下之士ハ向島ニ不限城外ニ被差置被下候様

〇城軍艦軍器ハ差出可申城之田安ニ御預被下候様軍艦軍器御請取之節重々順然ニ被成下候様

右之勝氏之主意敢望かましき中分ニ無之旗下無辨之者軍器請取等之儀より沸騰いたし而之慶喜恭順之意指障其處を重々御助辨被下候様との事也

右之通官軍より順然ニ御取扱被下萬々一旗下暴發之輩於有之之勝氏より討取可申との覺悟なり西郷ハ右之内歎願を承知直様京都ニ駈登今頃着と相考申候横濱之事件も同人承知仕居登り申候

右之譯合ニ而十五日進撃之期限ハ御延引ニ相成申候木梨海江田咄しニ茂徳川ヲ計り力を計り寛典可然との見込（ニ而慶喜之助命家名も相應ニ接續、家名も相應ニ接續）いたし度と申居候（本文中横濱之事件とあるは去十三日參謀木梨精一郎と英國公使と會談せしことなり）

〔海舟日誌〕

〇十三日

高輪薩州之藩邸に出張西郷吉之助へ面談す、後宮之御進退、一朝不測之變を生せば、如何そ其御無事を保たしめ奉らん哉、此事易きに似て、其實は甚難し、君等熱慮して、其策を定められむには、我が輩もまた宜敷焦思して其當否を量らむ歟戦と不戦と、興と廢とに到りて、今日述る處にあらず、乞ふ明日を以て決せむとすと云。

〇十四日

同所に出張、西郷に面會す、諸右司之歎願書を渡す。

第一ヶ條 隠居之上、水戸表へ愼罷在候様仕度事

第二ヶ條 城明渡之儀は、手續取計候上、即日田安へ御預け相成候様仕度候事

第三ヶ條 第四ヶ條 軍艦軍器之儀は、不殘取收め置、追而寛典之御所置被仰付候節、相當之員數相殘し、其餘は御引渡申上候様仕度事

第五ヶ條 城内住居之家臣共城外へ引移愼罷在候様仕度事

第六ヶ條 慶喜妄學を助け候者共之儀は、格別之御憐憫を以て、御寛典に被成下ニ命に拘り候様之儀無之様仕度事但萬石以上之儀は、本文御寛典之廉にて、朝裁を以被仰付候様仕度候事

第七ヶ條 士民鎮定之儀者、精々行届候様可仕、萬一暴舉いたし候者有之、手に餘り候は、其節改而相願可申候間、官軍を以、御鎮壓被下候様仕度事

右之通屹度爲取計可申、尤寛典御處置之次第、前以相伺候へば、士民鎮壓之都合にも相成候儀に付、右之邊御亮察被成下ニ御寛典之御處置之趣、爲心得伺置度候事（中略）



我西郷に中て云、大政返上之上は、我が江城下は、皇國之首府なり、且徳川氏數百萬之祿地を保つ所以のものは、幕府之入費に充てむが爲めなり、此二は、宜敷大政と共に其御處置如何を伺ふべきなるべし、況んや外國交際の事興りしより、其談する所、獨徳川氏の爲にあらず、皇國の通信にして、我が私にあらず、印度支那の覆轍、顧みさらむ哉今日天下の首府に在て、我が家の興廢を憂て一戦し、我が國民を殺さむことは、寡君決而爲さる所、唯希ふ所、御所置公平至當を仰かは、上天に恥る所なく、朝威是より興起し、皇國化育の正敷を見て、響應瞬間に全國に及び、海外是を聞て、國信一洗、和信益固からむ、是の意我が寡君獨り憂て、臣輩の不解の所なりと云々。西郷申て云く、我壹人今日是等を決する不能、乞ふ明日出立、督府へ言上すへし、亦明日侵撃の令あれどもと云つて、左右之隊長に令し、從容として別れ去る。亦彼が傑出果決を見るに足れり。

## 〔續海舟先生水川情話〕

さて山岡に托けた手紙でまづおれの精神を西郷へ通じて置いてそれから彼が品川に来るのを待つて更に手紙をやつて今日の場合決して兄弟塔に聞くへきてよいことを論じた所が向ふから會ひたいといつて來たそしてよい官軍と談判を開くことによつたが最初に西郷と會合したのは丁度三月の十三日この日は何も外の事は言はずに只た和宮の事について一言いつたばかりだ前躰和宮の事については豫て京都からおれの所へ勅旨が下つて宮も據ない事情で關東へ御降嫁によつた所へ關するも今度の事か起つたについては、陛下も頗る宸襟を惱まして居られるからお前が宜しく忠誠を勵まして宮の御身の上に萬一の事の本い様にせよとの事であつたそれ故おれも最初にこの事を談じたのだ和宮の事は定めて貴君も御承知であろうが拙者も一旦御引受け申した上は決して別條のある様本事は致さぬ皇女一人を人質に取り奉るといふ如き卑劣本根性は微塵も御座らぬ此段は何卒御安心下されいその外の御談は何れ明日罷り出てゆるし、致さうからそれまでに貴君も篤と御勘考あれと言ひ給て、その日は直くに歸宅した

翌日即ち十四日にまた品川へ行つて西郷と談判した所が西郷がいふには委細承知致した然し本からこれは拙者の一存

にも計らい難いから今より總督府へ出掛けて相談した上で何分の御返答を致さう其れ迄の所兎も角も明日の進撃だけは中止させて置きませうといつて傍に居た桐野や村田に進撃中止の命令を傳へたま、後はこの事に付て何もいはす昔話本として從容として大事の前に横はるを知らぬ有様にはおれもほと／＼感心した

この時の談判の詳しいことは何時か話した通りだがそれから西郷に別れて歸りかけたのにこの頃江戸の物騒な事といつたら中々話にもふらぬ程で何處からともなく鐵砲丸が始終頭の上を掠めて通るのでおれもこんふ中を馬に乗つて行くのは險呑だと思つたから馬をは別當に牽かせておれはその後からほと／＼歩いて行つたそして漸く城門まで歸ると一翁を始めとして皆々がおれの事を氣遣つてそこまで迎へに出て居つたがおれの顔を見ると直ぐにまづ／＼無事に歸つたのは目出たいが談判の様子はさうであつたかと尋ねるからその顛末を談して聞かせた所が皆も大層喜んで今し方まで城中から四方の様を眺望して居たのに初めは官軍が諸方から繰込んで來るからこれは必定明日進撃する積りだらうと氣遣つて居たが先刻からはまた反對にぞん／＼繰出して行く様本ので如何したのかと不審に思つて居たに君のお談てあれは西郷が進撃中止の命令を發した譯と知れたといふのでおれはこの瞬間の西郷の働きが行き渡つて居るのに實際感服した談判が済んでから假令歩いてとはいふものゝ城まで歸るに時間は幾らもかゝらぬがその短い間に號令がちやんと諸方へ行き渡つて一度繰込んだ兵隊をまた後へ引戻すといふ働きを見ては西郷はふか／＼凡の男てふといふよ／＼感した

## 〔防長回天史第六編上〕

官軍東征(抄略)

十三日勝高輪ノ薩州邸ニ赴キ西郷ト會見シ十四日更ニ薩州邸ニ赴キ西郷ト會見シ左ノ數願書ヲ出シテ之ヲ西郷ニ托ス  
(數願書ハ十四日の條海舟日誌の文と同じ故に之を略す) 西郷領スル所アリ自カラ督府ニ至リ指揮ヲ請フ事ヲ約シ且令テ諸軍ニ傳ヘ明十五日ノ總進撃ヲ中止ス



西郷ハ即日江戸ヲ發シ駿府ニ至リ慶喜謝罪ノ條款ヲ大總督ニ稟ス督府乃チ三道官軍ノ進撃中、止ヲ令シ西郷ヲ京師ニ遣リ朝裁ヲ仰カシム

三月十五日親征發軔に關する日程及び行幸路次供奉進止等の規定を告示せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳、大政官日誌第六〕

御親征日限御延引之處來廿一日 御發途石清水社 御參詣同所御一泊廿二日守口御一泊廿三日 御着阪其後海軍整備  
御覽可被爲在之旨被 仰出候事

三月十五日

但シ太政官代被移候儀者先被止候事

〔王政日新錄〕(熊本縣廳所藏)

(三月十五日越州島津十大夫外一人より廻達の書付)

一御道筋本街道之事

一廿一日八幡御參詣同所御一泊翌日守口御一泊廿三日 御着之事

一銘々人數書鳥丸家え可差出事

(耳ニ列奉ヨリ同定書とあり以書取奉伺候條々)

一法螺之次第

一聲 御催 二聲 供奉揃 三聲 御出輩

御道中

一聲 御止 三聲 御進

右之通夫々御達被置候様仕度候事

一宮堂上方當曉御參 内之節御供廻之内御壹方ニ兩人宛程御便宜之所ニ被差置其餘之直様御馬共後院前御馬繫ニ御稱號札張置申候間其邊ニ屯之積

但右被淺置候御供兩人程之ニ聲法螺御合圖次第建禮門外ニ被相廻候様御銘々様より屹度御申付御座候様仕度候事

一諸侯御供廻り前同斷

但前同斷銃隊之儀ハ先陣境町御門外後陣日御門前ニ屯其邊より御主人御隨從之積

一建禮門内御獨歩之積

但雨儀之節御傘持壹人御隨從之積

一後院前御馬繫之邊ニ而宮方御初都而御乘馬之事

但馬沓者元より爲打被置候積

一内侍所御列堂上方並諸司とも御假殿拾帖之間邊其外御間内御便宜之所諸侯並供廻り共伶人樂屋駕輿丁常勤番所堂上方並諸司供方等日華門南廻廊ニ屯之積

一惣而地下之輩僮僕境町御門内より院參町邊ニ屯之積其邊迄獨歩之積

一當曉先列諸司承明門東西廻廊後列諸司月華門廻廊等に參集尤供廻り共ニ聲合圖次第供廻りは何れも境町御門内より院參町邊に繰出之事

一雜色境町御門外より御列ニ差加に御泊並大阪 着御等便宜之方ニ而進退爲仕候積

一六門建禮門外より御列ニ差加に御泊並大阪 着御等便宜之方ニ而進退爲仕候積

一雜具ハ御道路之儀ニ付御銘々御跡ニ被付候様仕度候事

一御小休御中食等之節御列其儘ニ被置御主人様御支度濟次第御加列御合圖之法螺三聲吹立候ハ、御進之事



但御從者之向者都而列立候儘支度之事

一御泊之節御本陣以前ニ而御下馬小人數被殘置其餘御馬雜具ニ至迄御旅宿に直様被引取候様仕度無左候而者 御本陣前御混雜と奉存候

但御銘々御旅宿之儀者御泊宿々ニ而夫々宿役人之もの出張御案内可致候積

一御泊より 御出籠之節ハ 御所 御出籠之通御合圖之法螺

一聲御催二聲御列立三聲御進ニ相成候様仕度候事

但 御本陣御用被爲在候御方ハ御同所御便宜之所ニ御出方ニ僮僕一兩人程被差置御用濟次第御加列之事

一翌日御小休御中食等前日之通

一大阪 着御之節淀城 着御之節之通

一御列奉行差圖違背無之様夫々御下知置可被下様仕度候事

但轡ニ白木綿藍御紋付之印相付並ニ提燈ニは紅白石燈之印シ相携申候

一御道筋之外御用通行之砌 因所無滞通行之儀夫々御建置可被下候様仕度候事

但前同斷

右之通奉伺候以上

辰三月

御列奉行  
修理職

三月十五日親征行幸の意義を明らかにし上下疑惑なく各其分を盡すへき旨を諭示せらる

〔太政官日誌第六、王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

今般王政御一新萬機從 朝廷被 仰出候ニ付而者皇國內遠近ニナク若生安堵致シ候様日夜 御憂慮被爲在斷然御親征

行幸被 仰出尙海軍整備 天覽被遊關東平定之上者速ニ 還御被爲在大ニ

列聖之神靈ヲ被爲奉安度深重之 思食ニ付上下心得違無之様名々相勵可盡其分 御沙汰候事

三月十五日

但シ億兆之君タル天職を被爲盡御親征 行幸被 仰出候處委キ御趣意ヲ不辨モノ共只々 朝廷之御上ヲ奉按候故カ

或者一家之盛衰目前之榮利ヲ相考候故カ全體之御危急ヲシラス種々之浮説申唱に彼是疑惑ヲ生シ候儀モ有之哉ニ相

聞に甚以如何之事ニ候條末々ニ至る迄急度安堵致シ生業ヲ可營候事

三月十五日從來諸國に掲けたる舊幕府の榜示を撤去し更に國民の心得方を揭示せしめらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

今日大政官代に御呼出ニ而松尾伯耆を以御書付六通御渡相成候ニ付則寫相達申候以上

三月十五日

御奉行 業中

尙々本文御書付一同御震翰御寫卷御誓文壹卷御渡相成候付御右筆頭に相達置候間此段も爲御承知相達申候以上

諸國之高札是迄之分一切取除ケハムし別紙之條々改而揭示被仰付候自然風雨之ため字章等塗滅候節者速ニ調替可申事

但定三札ハ永年揭示被仰付候覺札之儀者時々之御布令ニ付追而取除ケ之御沙汰可有之尙御布令之候節者覺札

を以揭示可被仰付候ニ付速ニ相掲ケ偏境ニ至るまで 朝廷御沙汰筋之儀拜承候様可被相心得候事

追而 王政御一新後揭示ニ相成候分者定三札之後に掲示致置可申事

三月

第一札定

明治元年



一人あるもの五倫之道を正しくすべき事

一 鏢寡孤獨廢疾のものを憫むべき事

一人を殺し家を焼き財を盗む等之惡業あるまじく事

慶應四年三月  
第二札

太 政 官

何事によらずよろしからざる事に大勢申合候をととうとなへととうしてゐてねがひ事くまだつるをこうそといひあるひハ申合せ居町居村をたちのき候共てうさんと申を堅く御法度たゞ若右類の儀これあらば早々其筋の役所へ申出べし御ほふび下さるべく事

慶應四年三月  
第三札

太 政 官

きましぬん邪宗門の儀堅く御制禁たり若不審なるもの有之ハ其筋の役所に申出べし御ほふび下さるべく事

慶應四年三月  
第四札

太 政 官

今般王政御一新ニ付 朝廷之御條理ヲ追ヒ外國御交際之儀被仰出諸事於 朝廷直チニ御取扱被爲成萬國之公法ヲ以條約御履行被爲在候ニ付而者全國之人民 叡旨ヲ奉戴シ心得違無之様被仰付候自今以後猥リニ外國人ヲ殺害シ或者不心得之所業等イタシ候モノハ 朝命ニ悖リ御國難ヲ釀成シ候而已ナラス一旦御交際被仰出候各國ニ對シ 皇國之御威信モ不立次第甚以不届至極之儀ニ付其罪之輕重ニ隨ヒ士列之モノト雖モ削士籍至當之典刑ニ被處候條銘々奉 朝命猥リニ暴行之所業無之様被仰出候事

三月

太 政 官

第五札 覺

王政御一新ニ付而者速ニ天下御平定萬民安堵ニ至リ諸民其所ヲ得候様 御煩慮被爲在候ニ付此折柄天下浮浪之者有之候様ニテハ不相濟候自然今日之形勢ヲ窺ヒ猥リニ士民トモ本國ヲ脱走イタシ候儀堅ク被差留候萬一脱國之者有之不埒之所業イタシ候節ハ主宰之者落度タルヘク候尤此御時節ニ付無上下皇國之御爲又ハ主家之爲筋等存込建言イタシ候者ハ言路ヲ開キ公正之心ヲ以其旨趣ヲ盡サセ依願太政官代エモ可申出被 仰出候事

但今後總テ士奉公人ハ不及中農商奉公人ニ至ルマテ抱候節ハ出處篤ト相糺シ可申自然脱走之者相抱ヘ不埒出來御厄害ニ立至リ候節者其主人之落度タルヘク候事(片假名ハ太政官日誌に據る)

三月

太 政 官

三月十五日朝廷我藩軍艦に對する東海廻航の命を變し更に親征につき來る廿五日迄に汽船一艘を天保山沖に從船せしむへき旨を命せらる

〔王政復古帳 京都并江戸返達御用狀扣〕

右者來ル十八日兵庫港揚從東海に航廻候様被 仰付置候處御用延引被 仰出候條 御沙汰候事

三月十五日

但兵隊百人之儀者海陸ニ不限横濱迄早々出張被仰付候事

肥

後に

右此度御親征被 仰出候ニ付其藩持合之蒸氣船壹艘來ル廿五日迄天保山沖に着碇可致旨 御沙汰候事

三月十五日

明治元年



〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（三月廿日井上才七村上源助より四月朔日着）  
御飛脚立候間致啓達候（中略）

一同十三日太政官代に外御用ニ而御留守居方物書之内罷出居候處此方様蒸氣船當月十八日兵庫港揚碇關東に可差廻旨且銃隊百人乘組横濱港に乘廻彼地警衛被 仰付候段之御書付二通被成御渡候間寫差上申候（此の二通は前の十三日の所に既に登錄す）  
一右ニ付段々御參談有之御人數者可被差出候へ共蒸氣船之儀者幾艘之事ニ付何分難被差出との趣副惣裁岩倉右兵衛督様は源左衛門（地青）拜謁御内々歎願仕候處御含ニ相成去十五日御留守居御呼出ニ而右御船東海に航廻御用延引被 仰出兵隊百人ハ海陸ニ不限横濱迄早々出張被 仰付旨之御書付一通御渡ニ相成出張御人數に被渡候旨ニ而菊御紋御旗一流竿紐并肩印百枚被成御渡候右御書付寫并御留守居書上一通差上申候恐々謹言  
尚々青地源右衛門儀昨日より下坂被仰付候以上  
今日太政官代に御呼出ニ付罷出候處今度横濱出張御人數に被渡下旨ニ而松尾豊前を以菊御紋御旗壹流竿紐并肩印百枚御渡相成候付則御達申候  
畢而本文肩印者右之肩ニ結付候様との儀も演達有之候

三月十五日

御留守居中

三月十五日東山道先鋒開戦の報ありしを以て各藩兵益々奮勵すへき旨命令せらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

東山道官軍先鋒既ニ及戦争賊軍敗走之旨ニハ候得共東海道亦如何共難計趣言上有之旁以海軍出航被差急 御出發被遊候條各其分相心得出格勉勵可有之旨 御沙汰候事

三月十五日

三月十五日我藩東海道先鋒隨進んで藤澤に至り滞陣す

〔王政復古帳〕

（三月十八日藤澤在陣藩并新九郎通信の一節）  
存外行軍も緩々相成十四日函關小田原藩に引讓同日出立十五日藤澤に着陣又々滞陣ニ相成戸塚藤澤平塚ハ御國より取切戸塚半宿より東程ヶ谷金川尾備之人數ニ而取切云々

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

三月十五日藤澤驛近傍ニ於テ一橋公ニ行逢右ハ大總督宮へ嘆願筋且奉迎ノ爲ナリ

〔男爵安場家文書〕

（我藩先鋒隊總帥清水數馬三月十五日藤澤に至る途上より總督府參謀安場一平へ贈りたる書）  
（紙破損）候間藤澤の様罷越平塚へ者寺木氏野田氏殘堀同様ニ而御座候何様藤澤御書ニ而も可有御座と奉察候間同所ニテ御目ニ懸り可申樂居中候  
一御馬之儀前同一爲口付壹人差添差出申候間宜々相願候御替下御馬之儀之右口付へ御申付明後日藤澤之様ニ御ひかせ可被下候貴所様へも一疋差出可申候筈之處此節之些ト出來兼藤澤ニ而差出可申様手配可致候  
一存外御進軍御早メニ而大ニ安心仕候横濱江戸共ニ不怪御都合宜由誠ニ恐悅之儀ニ御座候海江田も甲府に御供之由ニ付愈以御配意之事ニ可有御座候嚙々御氣削可被成と勞察仕候  
一甲府行分隊後之私人數共ニ二百二十計ニ相成自然之節之如何相成可申哉扨と大ニ大砲隊又ハ政府之腰拔ケ土懸念之由ニ而申出之趣も御座候右ニ付而京都へ申遣程ニより御人數も可參かと察申候自然其前戰爭ニも相成申候ハ、私一手ニ而打散シ衆目を爲覺可申覺悟ニ御座候

明治元年



一 近來ハ奉口杯ニ唱も合兼彼是懸念而已ニ御座候在折得拜類候時分ハ御助力を以大分心強御座候得とも近來之獨立之様成ル心地ニテ節々短氣之持病差起甚タ以案勞仕候

一 龜山藩人數五百計も御座候由若御心配被出來候半々平塚迄同藩より固被 仰付様ニ出來不申哉左候半々藤澤戸塚迄受持申度備尾之方も分隊數ヶ所之由ニ大ニ困り候由承知仕候右之段ハ平塚殘之御同役衆より委細御唱と存候  
右之趣前田御許へ歸營ニ付得貴意置申候何様三四日内得拜類可申其節ニ委曲可申述候以上

三月十五日

數 馬

一 平様

尚々色々取紛居別而亂筆御推讀可被下候再白

三月十五日舊幕府は大總督府參謀西郷吉之助より進撃中止の答辭を得たるを以て益々鎮靜して大命を待つへき旨を舊幕臣に諭達す

〔一新録自筆狀〕

三月十五日川勝備後守殿御渡

一 今度御征伐使御差下ニ相成今十五日江戸表御討入相成候風聞有之候付御歎願ニ相成候處大總督府に御伺濟迄御討入之儀見合候旨參謀西郷吉之助相答候付屋敷並ニ市中とも猥ニ動搖いたし意外之不都合相生し候而者以之外之儀ニ付諸事靜穩ニいたし御沙汰相持候様可致候  
右之趣向々に不洩様可被相觸候

三月

三月十六日海軍天覽の爲め軍艦及び汽船の大坂出帆を停止せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月十六日太政官代に御留守居御呼出御渡之御書付寫

肥

後に

大坂 行幸之上海軍 天覽被遊候ニ付軍艦並蒸氣船共着坂候得之天保山沖に碇泊 天覽相濟候迄出帆被差留候事  
但右之趣早々大坂に可申遣旨被 仰出候事

三月十六日

三月十六日日本藩長谷川仁右衛門參與内國事務局判事兼大坂裁判所掛を命せらる  
〔江戸京都來狀扣〕

長谷川 二右衛門

參與内國事務局判事被 仰候事

三月

長谷川 二右衛門

大坂裁判所掛兼 被仰付候事

三月

三月十六日我藩溝口藏人に海軍總奉行を命す

〔慶應四年  
轉職進階帳〕

申渡

溝 口 藏 人

明治元年

三〇七



其方儀座席御備頭之上座被仰付御軍艦總奉行被仰付御役料米貳百俵被下置之

三月十六日

三月十六日仁和寺宮家木村右衛門は彰仁親王の來十七日兵部郷任官宣下あるへき内命を蒙らせられたるを告げ且つ翌十八日に悦使者を請けらるゝ旨を我藩左京吏員に報す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（三月廿日村上より四月朔日齋）

仁和寺宮木村右衛門より左之通

以手紙得御意候然者 宮御方來ル十七日 御元服兵部卿御任官 勅使帶劔可有 宣下 御内意被 仰出候右ニ付自然 御悦御使者被差出候ハ、翌十八日被爲請候仍此段御吹聴旁可得御意如此御座候以上

三月十六日

三月十六日舊幕府江戸城内の政廳を田安邸に移す

〔一新録探索報告〕

（首藤敬助江戸聞取一節）

一三月十六日西城引拂諸有司田安に引移候事

一同日府内居住有之向ハ不殘引拂墨田川向に相移可申惣督府より御沙汰之處是又款願ニ而郊外に引移相定 右中津藩古宇田三八々聞取申候

四月十二日

首藤

三月十七日去る十四日宮中の祭典誓約に洩れたるものは明十八日參朝して加名すへき旨を達せ

らる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

去ル十四日

天神地祇御祭祀

御誓約被爲在候節相洩候而々加名可有之旨被 仰出候

間明十八日巳刻參 朝可有之候事

但衣冠着用若用意無之向者直垂着用可致尤於服者茂

參 朝之事

三月十七日

辨 事

山内前少將殿

細川侍從殿

秋月右京亮殿

追而今晚中早々回達卯上刻迄ニ必返却可有之候事

御誓祭式

時刻群臣着座

南殿公卿母  
屋殿上人廂

次塩水行事

次散米行事

三月十七日來廿一日親征行幸八幡駐紮の際當該地附近の警衛を我藩に命せらる

次神祇伯着座  
次神於呂志神歌  
次献供  
出御  
次祝詞  
御拜  
次御書讀上  
次誓書之事  
一人宛其座ニ進ミ先神前之方ヲ拜シ上之御座ヲ拜シ  
加名  
入御  
次撤供  
次神阿計神歌  
次各退出  
（式場の間あれとも今之を略す）



〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀和〕

細川右京大夫に

來ル廿一日御親征 行幸八幡 御一泊ニ付近邊御警衛可致旨御沙汰候事

三月十七日

但場所之儀者奉行坊城頭辨に可伺出候事

三月十八日准皇を尊て皇太后と爲し大宮と稱し給ふ

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月十八日辨事より之御廻狀

細川侍從殿

寫

青山左京大夫殿

別紙二通之旨被仰出候事

有馬遠江守殿

三月十八日

辨事

追而今晚中廻達明卯刻返却可有之候也

毛利小將殿

今十八日立太后宣下被爲濟候付明十九日明後廿日之内御所並大宮御所に參賀可有之候事

但衣冠着用之事

三月

追而今日參賀之輩者不及其儀候事

准后御方立太后被爲濟候付自今稱大宮候事

三月

三月十八日我藩兵百人横濱警衛の爲め京都を發す

〔慶應三年十月ヨリ翌明治元年閏四月迄〕

〔自筆狀並稜書〕

〔三月廿日通報稜書一節〕

同十八日

一横濱警衛之人數百人出立

三月十八日我藩軍制改革につき自今演武場に於て洋法の步操砲術を練習すへき旨を布達す

〔機密問日記〕

月番也

藪 圖 書に

御軍制御變革之儀今般被 仰出置候通ニ付御備立等之儀之追而御沙汰被爲在管ニ候就而之御備組を始一統演武場に罷 出砲術並步練稽古等一刻茂早く熟練可致旨被仰出候條奉得其意同役に通達組々に茂可被達候以上

三月十八日

三月十八日東海道先鋒總督府參謀は副總督柳原前光甲府に進軍するを以て我藩兵の一半を分ちて該地へ派遣すへき旨を通達す

〔王政復古帳〕

甲府儀要厄之地ニ候條彌以嚴確之守衛可有之ニ付明十九日副總督彼地に御出陣被成候就而之其藩總勢之中一半分隊いたし急速同所に轉營御指揮可相待候一半者先鋒出兵之諸藩と申談大磯より高繩迄數驛之間可然分屯嚴衛可有之様總督府御沙汰候事

明治元年



三月十八日

先鋒總督府參謀印

肥後藩長官中

三月十八日藤澤左陣我藩副奉行淺井新九郎は征東軍行進の情况及び關東處置の件等を在京重臣に報告す

〔王政復古帳〕

當月十一日御仕出之葉翰一昨十六日藤澤驛ニ相連忝々拜誦仕候若殿様左京亮様谷御機嫌能遊御座奉恐悅候將各様愈御清康被成御勤務珍重拜祝仕候此許清水方一手無別條行軍次々私儀碌々依舊仕候付乍憚御休慮被成下候様奉希候然者御許之形勢讓々被仰下敬承仕候不相替御繁劇御心配深々拜察仕候別而行幸供奉被蒙仰候付ハ御多用奉想像候先日從湯元得貴意候通存外行軍も緩々相成十四日函關小田原藩に引讓同日出立十五日藤澤に着陣又々滯陳ニ相成戸塚藤澤平塚ハ御國を取切戸塚半宿より東程ヶ谷金川尾備之人數ニ而取切川崎に者大村佐土原長之人數ニ而取切品川目黒邊を臺町高輪薩長取切滯陣仕候早々江戸に押入候筈之處横濱ニ而英に爲談判木梨精一郎罷越候次第者竊斗者相分不申候へ共無答ニ人數練出候付爲備英より兵隊備置候由引候様木梨談判へし候へ共様子相分兼申候現江戸之方ニ者追々探索を遣置候處安場一平島田次兵衛昨日罷歸別紙之通御座候少々宛之不審者有之候へ共安場於江戸大久保逸翁殿に面會へし候付篤斗承候由ニ而官軍に聲息相通激徒者内外を測定ニ相成當時江城西丸に靜寛院宮様御在城ニ而少々御守衛之人數者有之政事者田安家に役々出仕之様子ニ御座候且一昨十六日於品川參謀西郷吉之助木梨精一郎徳川家重臣談判有之左之通ニ大略相分申候（此處に三月十日山岡鐵太郎西郷吉之助に面會云々の條にある七ヶ條の箇條書あれとも略す）右之ヶ條江戸に者格別不受之事件無之由右之通ニ而當時大督府伺ニ相成候由先ッ此節者大底目算も相立候由併會藩者愈以防禦之覺悟近隣之大小名にも唱候由

此一條未様子も相分不申候付近日江戸に被差遣置候遊學生林玄助本田友次郎村上辰次之内奥羽之方に遺探索いたし候様被仰付候取計仕候筈ニ御座候間左様御承知被成置御序ニ御國許に茂御申越奉頼候今日御勘定所御物書柴田文八永嶺次兵衛兩人過時當驛に着仕候江戸御屋敷ノ、惣拂ニ相成夷艦二艘神風丸に公私箇物御役々定府家族共乗組去ル十二日迄出帆神風丸者十五日出帆昨年御借用ニ相成候金一万五千貳百兩右兩人持越無別條着仕候付大安心仕候右様御承知被成置御序ニ勘定頭ハ右之趣御風聲奉頼先右迄匆匆如是御座候余者後鴻ニ讓置申候已上

三月十八日

淺井新九郎

京詰御奉行中様

追啓仕候別紙得貴意申候通於品川談判于今一向模様相分兼申候何レ横濱之一條埒明兼可申候慶喜公御處置者最初者死を給り候大督參謀之意氣込ニ御座候處近來愈恭順之實相顯且靜寛院宮御使村藤殿一兩日跡ニ茂駿府に被參今日日光宮様も上野に還御被是都合宜敷との趣ニ有之死者被有候由ニも傳承仕候是ハ御承知之通澤村志方列之盡力今日ニ至り相著候様奉存候余後鴻ニ錄上可仕候已上

三月十八日

淺井新九郎

御奉行中様

三月十八日東山道官軍先鋒隊新宿より進みて市ヶ谷の尾張藩邸に入る

〔一新録自筆狀〕

三月十八日川勝備後守殿御渡  
東山道總督岩倉殿御先鋒四ヶ谷新宿へ致逗留候處同所宿少之趣ニ而市ヶ谷尾張殿屋敷に今十八日練入ニ相成候得共御進撃之儀ニ之無之候間市中顛倒いたし失禮無之様嚴重相心得可申候  
右之趣向々に早々可被相觸候

明治元年

三二三



三月

三月十八日舊幕府は天璋院の旨を奉し再び恭順の意を嚴守すへき旨を其臣下に諭達す

〔一新録自筆狀〕

三月十八日川勝備後守殿御渡

此度天璋院様より女中御使ニ而薩州先手隊長迄御歎願御頼之筋被爲達候處西郷吉之助より御請申上候趣有之大總督府伺濟迄御討入御見合ニ相成候段同人より相答候趣ニ付万々一不心得之者等有之候而御家之御大事ニ茂相成御心痛被遊候廉も相立不申候儀ニ付右等篤と相心得一統穩ニ人氣も鎮り騒立不申神祖以來之御家へ御奉公と存心得違等決而無御座様急度可相守段天璋院様御意ニ被爲在候  
右之通大奥より被仰出候間向々不洩様可被相觸候

三月

〔一新録探索報告〕

〔秘密報告書抄略〕

一天璋院様より女使持参西郷吉之助に面會之節吉之助御書拜見潸然涕泣シツ、拜見終而更ニ涕泣ヤ、有て涙をおとる容を改め正敷手を突サテノ、斯迄御苦勞被遊候段何共奉恐入候絶言語候右ト申も畢竟逆賊慶喜之所業ニクキ慶喜ニ候と申候由女使並附添之者此節もらひ泣致居る處此一言ニて忽チ立腹心頭より怒氣發し既ニサ、ント云ふりと右女使附添之者自ら咄したりと云

三月十九日諸侯の參朝に關する心得方を示達せらる

〔王政復古帳〕

三月十九日太政官より御留守居御呼出ニ而松尾伯耆を以

御渡之御書付二通

一五節句

一毎月朔日

右在京之諸侯爲御祝詞參 内可有之事

一毎月壹度ツ、

但廿九日之外勝手ニ 天機可相伺事

右參 内着服之儀上京初度之官位有之輩衣冠直垂勝手

次第無官之輩ハ直垂着用之事

但二度目より直垂上下可任所意羽織袴被禁候事

右之通被 仰出候間此段申達候事

三月

追而近來申合日々禁中假建所に御用爲伺罷出來候輩ハ

御規則相立候迄當分是迄之通相心得可申事

右一通

三月十九日東海道先鋒兼鎮撫副總督柳原前光同參謀海江田武次甲府の鎮撫に向ふ我藩兵之に隨行す

〔安津免久佐〕

慶應四戊辰三月甲府戰爭之大意

甲府之儀去日相呈候通賊徒敗走後ハ無事也乍然甲府之儀以前通之幕吏を存し有之間ニハ心得違之者茂難計故今日柳原公海江田濱松懸川之人數を以鎮撫ニ甲府に發向ニ相成肥後人數茂ニタ手ニ分ケ一ト手ハ甲府之様ニ參り手配ニ相成惣して追々江戸ニ向イ橋本柳原柳共ニ落合之筈あり

〔王政復古帳〕

三月廿四日平塚仕出之備同廿九日壬生邸着御用狀(淺井新九郎發の一節)

明治元年

三一五



此節備差立候一條ハ別紙之通督府より達ニ相成(別紙に昨十八日の條に既載す)且内情者甲府表人氣六ヶ敷小藩ニ而者鎮撫出來兼據而此方様に被仰付候との旨ニ有之直ニ分隊柏原(要)落合(備次)組共御物頭木造(誠之)和田(權五)大槻(權九)吉田(源左)組共ニ芦村(嘉左)横山(助之)即夕出立小田原より甲州越路ニ懸申候云々

三月十九日我藩大和鎮臺守衛の兵數を減少すへき旨命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

肥

後に

大和鎮臺御守衛被 仰付置候處人數減少可致旨御沙汰候事

三月十九日

三月十九日長岡護美は京都の時體等に就き自己の觀察する所を在藩の老臣に通報す

〔一新録自筆狀〕

春暖相催し候處愈御清康拜賀仕候爰許之近況差而相替候義も無之小生無事御放懷可被下候天下愈以相開ケ各州皆洋學洋式盛ニ被行小生も洋書專らに熟讀無窮之味ヒテ見出し申候第一條理も深く相考申候不遠皇國之學校ト兵學校相立チ彼か活眼ニ相成り可申と想像仕候於御國許も屹度御一新無之候而者天下ニ何ヲ以而御面目相立可申歟薩之兩年計り中ニハ於鹿兒島蒸氣船も出來之よし洋人御雇入レ日々々々ニ國力充實と相考申候小生も軍防局ニ罷在り局中之大キに規則ヲ建テ申候尤薩吉井幸助長大村益次郎ナドハ皇國之人才屹度御爲ニ相成り大村は洋式洋制之上學力茂有之話シテ聽候者春の日も短く覺申候小生茂今日之萬事取しらへ明日より下坂海軍見聞等局中も繁務之至ニ而御座候關東も近來浮浪過激之徒所々ニ特起官軍と戰爭尤因州のミ敗北ニ而其他之官軍皆勝利大垣土州を初追々戰爭皆勝利之よしニ御座候

内外切迫之至り早々之呈翰亂毫海函可被下候猶後首萬事可申入候拜具

晚春十九

左 京 亮

美 濃 殿

金 左 衛 門 殿

要用

向々御自玉專祈仕候大久保一藏列皆局中々々ニ被加置候人物ハ文筆達者ニ而感心仕候近來之到而懇意ニ相成候處溫和ナル事ニ御座候小松之横文字をも流水之如く讀申候後藤象次郎茂木戸茂同様ニ御座候昨日之於東山木戸ト醉後園菴等仕り黑白之爭ヒ面白キ事ニ御座候昨日ハ誠ニ大會ニ而御座候君侯も八人計り寄合申候

仁和寺様之堂上第一之温和柔順之人物ニ而善ヲ被好候事深く局輔之仕合ニ御座候太政官日誌差出し申候以上

三月十九日内國事務局判事兼大坂裁兼所掛長谷川二右衛門京都を發して大坂へ至る

〔一新録自筆狀〕

同十九日(三月)

一長谷川二右衛門今日大坂に出立

三月十九日奥羽鎮撫總督九條道孝奥州鹽竈に至る

〔一新録探索報告〕

(四月十二日首藤敬助聞取書一節)

一奥羽鎮撫使九條殿三月十九日奥州鹽竈に御着直ニ仙臺に御着學校養賢堂に御宿陳ニ相成候由

三月某日鍋島閑叟軍防事務局輔を免せられ制度事務局輔に任せらる

明治元年

三一七



〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月廿日村上より四月朔日着

(仁和寺宮欄肥前阿州欄二通より之奉札四通の内)

肥前様百武作左衛門より左之通

以手紙致啓上候然ハ前中將様御事今般軍防事務局輔被成御免制度事務局輔被爲蒙仰難有思召候其御許様は右爲御知被仰進度各様迄宜得御意旨侍從様前中將様被仰付如此御座候以上

三月

三月廿日徳川慶喜と私に文通することを禁せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月廿日太政官代ニ御呼出御渡之 御書付寫

徳川慶喜御處分之儀於 朝廷者諸事御寛容ニ被思食御沙汰被 仰出候處舊冬鎮定ヲ名トシテ下坂之上軍配ニ及ヒ候次第始終言行相違正月三日已來之舉動叛逆顯然其罪天下萬民之共知ル處ニ候故不被爲得止大號令御發表終ニ 御英斷ヲ以御親征被仰出勤王之諸藩私情ヲ捨テ公義ニ基キ諸兵大總督ニ附屬シ已ニ賊城ニ相臨ミ候折柄恭順謝罪之實効茂更ニ無之尙先供之行違等ヲ口實ト致し停軍相願候次第 朝廷ヲ奉輕蔑候所爲ニ而不届之至候天下後世ニ對シ決而御許容難被遊候儀ニ可有之假令御許容被爲在候而茂亦前條暴入之權ニ出候哉茂難計御條理上者勿論彼之情實萬々御採用難相成却而人心之疑惑ヲ生し候而者此御場合不容易儀ニ付大義名分篤と勘辨いたし以來私ニ文通等之儀於有之者逆徒ニ均しき筋ニ候間屹度 御沙汰可有之候事

三月

三月廿日義に英國公使參内の途次事變を生したる際警衛の任にありし我藩隊長に五日間の差控を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月廿日太政官代ニ御呼出御渡之 御書付寫

肥後

去月晦日英國公使參 内之節右藩上警衛之途中非常之儀有之候處兼々御布令之御旨趣茂有之候處不行届之儀ニ付屹度可被 仰付筋ニ候得共此度寛典之御所置ヲ以其節警衛之隊長五日差控被 仰付候事

三月廿日

刑法事務局

三月廿日長岡護美行幸に先たち京都を發して大坂に到る

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

三月廿日

一左京亮殿朝六時之御供揃ニて玉生邸五ツ比御發途夕 比御着坂之事  
一虎之助左京亮殿御供ニて致着坂候事

三月廿日我藩八幡警衛として兵若干を派遣す

〔一新録自筆狀〕

同廿日

一八幡爲御警衛一番手殘之面々今日被差越右御用相濟候上直ニ下坂以上

三月廿日

明治元年



三月廿日西園寺公望權中納言に任せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

西園寺様方、三位中將殿去ル廿日權中納言被蒙宣下候仍此段、如此御座候以上

三月廿九日

三月廿日東久世通禧横濱裁判所總督に任せられ鍋島直大副總督に任せらる

〔太政官日誌第八〕

三月二十日

一東久世前少將兵庫裁判所總督被免横濱裁判所總督被仰付

一肥前侍從横濱裁判所副總督被仰付

三月廿日島津忠義米十萬石を獻し軍政宏張の費に供せむことを請ふ

〔一新録探索報告〕

一頃日薩州方 朝廷に十萬石献上ニ相成主意之儀之此節復古御事創之時ニ當リ御入費被爲在候ニ付右聊御教申上度趣之由

但十萬石之則十萬斛と申事也

〔近世史料編纂綱例〕

三月廿日島津忠義封土十萬石を獻し軍政を宏張せんことを請ふ

三月廿日征東大總督府參謀西郷吉之助徳川慶喜謝罪の條款を齎して入京す即日廟議を決し案を

具して宸裁を得たり

〔防長回天史第六編上〕

官軍東征(抄略)

西郷ハ即日(三月十)江戸ヲ發シ駿府ニ至リ慶喜謝罪ノ條款ヲ大總督府ニ稟ス督府乃チ三道官軍ノ進撃中止ヲ令シ西郷ヲ京師ニ遣リ 朝裁ヲ仰カシム二十日西郷入京シ大總督ノ條款書及勝安房ノ奉答書ヲ 朝廷ニ提出シテ裁ヲ仰ク即日朝議ヲ太政官代ニ開キ三職ノ意見ヲ徴シ西郷吉之助水戸準一郎等寛典以テ之ニ處スルノ可ヲ論シ庶議茲ニ決シ遂ニ案ヲ具シテ宸裁ヲ得タリ

(宸裁案)

第一ヶ條 謝罪實功相立候上ハ深厚ノ思召ヲ以テ死一等ヲ被宥候間書面之通水戸表ニ於テ謹慎之儀可被差許候事

第二ヶ條 總督官思食次第可被仰付候

第三ヶ條第四ヶ條 軍艦勿論銃砲ニ於テハ不殘取收武庫引渡可申御處置之上ハ追而相當可相渡候

第五ヶ條 書面之通可被許候

第六ヶ條 罪魁慶喜死一等被宥候上ハ格別之寛典ヲ以テ其他ノ者モ死一等ハ可被宥候間相當之處置可申出候事

但萬石以上ノ儀書面之通可被仰付會桑ノ如キハ問罪之軍兵被差向降伏ニ於テハ相當之御處置可有之拒ニ於テハ速ニ屠滅可有之事

第七ヶ條 書面之通可被仰付候事

三月廿一日大坂に行幸あらせらる本藩世子護久之に供奉す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕



(四月五日村上より同廿日蒲道家松野當り)

一筆致啓上候、

一主上先月廿一日曉卯半刻之御出門ニ而被遊 御下坂候付 若殿様曉正八時之御供揃ニて御參 内御供奉御後陣御勤益 御機嫌能御當地被遊御發駕恐悅奉存候

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

大坂行幸之事

三月廿一日發 策後八幡森口御二泊ニ而 御休所茂御間近ニ被爲在日々至而之御寛行聊無御異狀同廿三日大坂 行在所ニ被爲入候事

但後陣供奉 若殿様其次長州世子ニ而御書ハ勿論頻々之御小立ニ茂 若殿様御休所に長州之世子直々御出有之是より茂御同様ニ而始末御懇親且御家中之而々茂夫に應御双方とも一藩程ニ有之たる由之事

一長州世子ハ御供頭初御側廻幾四五人其外之都而銃隊茂士分以上ト相見候由御立之節ハ一聲之合圖ニ而直様列を立實ニ簡易無造作無申計候處此方様者餘程御差略も有之候得とも兎角億効ニ而御立之節も御供廻杯とさけひ廻り彼是御慚愧も被爲在又御感心茂被爲在候處より一入銃隊御取起之儀も御差急被遊候御模様ニ奉窺候之事

〔一新録自筆狀〕

(慶應四戊辰三月廿日京發溝口三宅より自筆狀抄略)

一大坂 行幸之儀明廿一日發 策八幡森口 御二泊ニ而 御着坂之上海軍整備 報覽之答ニ御座候右付而之種々之若説 茂有之素々虚誕ハ存候得とも乍恐重覺奉懸念候

一右付而今日五時分左京亮殿御下坂明日之曉八ツ時之御供揃ニ而若殿様御發駕供奉ニ而御下坂被遊候答ニ候加之八幡 御一泊御警衛被 仰付此方に御人數八十餘且又横濱御警衛も被 仰付此方ニハ銃隊百人士席輕輩相混被差越何も職茂

一同ニ落集不一方致紛雜候

三月廿一日薩長二藩の兵江戸千住新宿板橋品川等に關門を設け之を嚴守する由を報する者あり

〔一新録探索報告〕

一薩州人數よほと多人數江戸へ入込千住口新宿板橋品川何れも薩長關門取立嚴重固め出入殊之外やかましく武家帶刀人決し而通し不申(下略)

三月廿一日(筆者不明)

三月某日舊幕府政廳江戸城を出て、田安邸に移りしより旗下の士亦領邑或は近郊に退去す爲めに府下物情騒然たり

〔一新録探索報告〕

戊辰四月廿三日着歩御小姓持參(抄略)

一日光宮様御訖として御出張被遊如何御談事相成候哉今日(海舟日記ニハ十九日)法親王東歸トアリ(江戸へ御歸り相成申候田安一橋兩君共伏

罪ニ候之御出張中ニ六ヶ敷江戸城明渡何を圖ニ而る何萬石是非國替であらふ抔風聞致し申候右之場合ニ到候ハ、屹度一戰可有之候丸之内大名方屋敷不殘何レも引拂皆明屋敷と相成申候荷物運送致候事夥數舟屋車力小揚人足大◎もふけニて奉公人女中之近在近郷出之者ハ親里方迎ニ參り一人も不居江戸産之當節柄故都而奉公ニ出候者有之(海舟)學建具諸道具類之誠ニ下直成事ニ候下拙餘程書類中引取申候疊等一枚極上品一朱ニも買手無之たんす壹兩出し候ハ、極上重子と申筋ニも有之候(下略)

三月廿一日

〔海舟日誌〕

明治元年



廿一日

英吉利人來訪我が心裡を話す彼善と稱す亦聞く西郷吉之助上京して決議を 朝廷に伺ふと云  
此比都下之諸藩邸旗本よりして市街之者共貨物を輸して近郊に運ぶ日夜を分たす是が爲に人夫數千市街出火之如く令  
頻に出づれども更に聞く者ふし大抵旗下は知行所へ蝨し或は近郊に潜居すゆへに強盜是を知て四方に起り貨物を掠奪  
し婦女を犯すまた悲むに堪へたり

三月廿二日本藩横井平四郎に徴士を命せらるゝにつき早々上京すへしとの旨を達す

〔御國往來狀扣〕

横井平四郎

右者徴上被 仰出候付用意濟次第早々出京被 仰付旨

右之通同廿二日及達候

右之通候事

三月

〔全書〕

松村十之進支配

都築黙兵衛

横井覺之助支配

横井平四郎

右之先年御咎ニよりて御知行被召上士席被差放置候處今度從 朝廷救被 仰出候付十席被返下旨同廿日及達候

三月廿二日副總裁岩倉具視は親しく天地の神祇に誓はせられたる聖旨を奉戴し維新の實功を奏  
せざるへからす各局諸官は益々勵精事に當り意見あるものは隔意なく進言すへしとの旨を諭達  
す

〔太政官日誌第八〕

副總裁岩倉卿ヨリ御自書ヲ以テ各局へ御傳達ノ寫

臣不肖之身ヲ以テ妄ニ大任ヲ辱シメ敢而其任ニ當リ候儀ニ者無之候へ共何分當今内外御多難加之朝敵未タ亡ビズ殊ニ  
御親征之盛舉ニ被爲及候事實ニ至重至大之事件何共恐懼之次第素ヨリ鞠躬盡力一死ヲ以テ御奉公之外無之候然ルニ總  
裁官ハ御東下三條中山兩卿等モ亦供奉ニ候上者太政官之責ハ不可免之場合ニ立至リ只管苦心ニ不堪候段出願ニ及候處  
正親町三條徳大寺兩卿總裁局へ出仕萬機示談候様被 仰出先以畏存候抑今般親シク天地ニ被爲誓公卿列藩へモ御沙汰  
之通り屹度御一新之御實蹟相立不申候ハデハ不被爲濟御儀尤臣子之分ニ於テハ斷然奉戴シ盡サザル事ヲ不得旁以諸局  
之督輔ハ勿論判事權官ニ至迄益勵精諸事被申出度假令局外之事タリ共御爲筋之儀ハ御存分ニ御討論可有之ハ勿論之事  
ニ候間偏ニ公義ヲ御勘辨聊無御隔意申承り度存候仍テ此段申入候也

三月二十二日

具 視

三月廿二日舊幕歩兵隊長古屋作左衛門等兵千餘名を率ゐて若松城下に至り尋て奥羽聯合を策す

〔幕末實戰史附録  
衝鋒隊 戰史〕

三月十四日には軍を五十里宿に進め會藩の勸めに依り一先つ梁田戰團以來の傷病兵を預くる爲め古屋佐久左衛門補出  
兼三郎酒井兼三郎の三名は是れを護送して台津若松城に向て先發し續て十九日には今井信郎全軍を従へて行軍を起し  
二十二日相前後して一同若松城下に着するを得直ちに會藩老若二公に謁見して委細を告げ且つ七日町に滞在せる仙臺

明治元年

三二五



藩の玉虫十左衛門を介して米藩千坂太郎左衛門等と謀議の結果奥羽聯合の策ありたれば其夜は豫め旅舎として設備されたる日新館に入り一同久調にして圓かふる夢を結び得たり

三月廿二日信州上田藩人某信州地方に於ける古屋作左衛門等の行動及び之に對し各藩警戒の爲め兵を派遣せしことを京都の同藩人に通報す

〔一新録探索報告〕

信州上田藩來狀寫取

一書拜呈仕候然ハ陸軍隊長古屋作左衛門歩兵千五百拾人餘引率へたし越後筋を善光寺に掛り松本表迄先觸差遣候ニ付松代を援兵之儀申越並尾州家中三條出張之者と同様沙汰有之候ニ付一昨日を昨廿一日兩日御小隊御操り出相成申候然る處今朝相成松代表を探索之者相歸り去ル廿日飯山表六百程着跡六百程も参り候由壹手ハ七百人善光寺道に相掛り候由飯田開城と申説有之未だ體ニハ知兼候中野御陣屋ハ乗取候ニ相違無之趣ニ付川田宿迄御人數御差出ニ相成松代之兵ハ先に繰出し罷在候松本ハ一大隊並大炮隊繰出し申候小諸ハ一昨日小隊繰出し申候越後筋ハ古屋之説得ニ而一聞ニ相與候風聞専ら有之道々近々説得並ニ尾張に入尾張を打取候見込ニ候由ニ御座候

四月三日

首 藤 敬 助  
近 藤 信 之 助

三月廿三日天皇大坂行在所に着輦し給ふ本藩世子護久供奉して大坂に到る

〔慶應四戊辰三月廿五日 御親征行幸中行在所日誌第一號〕(佐田家藏)

先達テ以來度々被 仰出候通り億兆ノ君タル 天職ヲ被爲盡 皇國內遠邇トナク萬民安堵四海平定大ニ 列聖之御靈

ヲ安シ奉ラセラレ度厚キ 思食ヲ以テ中古絶タリシ 御親征ノ大典ヲ舉サセラレ三月廿一日辰ノ刻 皇都 御發輦被爲遊 御小休所東本願寺ヨリ葱華輦ヲ御板輿ニ召替ヘサセ給ヒ戌刻八幡エ着御亥ノ半刻石清水八幡宮へ 御參詣被爲 在辱クモ天下億兆蒼生ノ爲ニ早ク逆賊平治四海靜謐ヲ 御祈念被爲 遊同所豐藏坊 御一泊同廿二日卯ノ半刻 御發輦戌ノ半刻守口へ着御東本願寺掛所 御一泊同廿三日辰ノ刻 御發輦午刻 御着坂八軒屋ヨリ再ヒ葱華輦ニ召替サセラレ未ノ刻西本願寺行在所へ萬事御都合能 御着輦被爲在衆庶萬歳ヲ唱フ

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

三月廿三日

一若殿様夕七ツ時益御機嫌能遊御着阪候事

三月廿三日宗對馬守朝鮮國との交通事務管掌を命せらる

〔太政官日誌第八〕

三月二十三日宗對守へ御達之寫二通

宗 對 馬 守

今般 王政御一新總而外國御交際之儀於 朝廷御取扱被爲 在候ニ付而者朝鮮國之儀者古ヨリ來往之國柄益御威信ヲ被爲立候 御旨趣ニ付是迄之通兩國交通ヲ掌候様家役ニ被 命候對朝鮮國御用筋取扱候節ハ外國事務輔之心得ヲ以テ可相動候條被 仰付尤 御國威相立候様可致盡力 御沙汰候事 但 王政御一新之折柄海外之儀別而厚ク相心得萬弊等一洗致シ屹度御奉公可有之候事

三月

宗 對 馬 守



今般被廢幕府 王政御一新萬機 御寔斷ヲ以被 仰出候ニ就テ者今後朝鮮御取扱之事件等總而從 朝廷可被 仰出候 條此旨朝鮮國へ可相達 御沙汰候事

三月

三月廿三日石見國濱田藩主城池を失ひ作州へ流寓し君臣困厄に陥れるを憫み備前因幡二藩に命 して之が救恤の道を講ぜしめらる

〔一新録皇令〕

辰三月廿三日御達

濱

田に

別紙之通被 仰付候間爲心得相達候事

三月

備前 州に

松平右近將監儀一昨寅秋石州濱田城領地共相失候後僅作州八千石之領地に流寓君臣一統不一形致困窮候哉ニ相聞へ其 藩之儀別而近親柄ニ付者是迄救助筋無疎事ニ可有之素より最前捨城又ハ今般家來共於伏水邊官軍に發炮等之顛末ハ追 而御取糺之上至當之御處置可被 仰出候得共先其事實曲直之關キ既ニ三年必至之艱難憂苦不便之至ニ付猶又厚く可 致心配被仰出候事

三月廿三日大赦令の節目及び癸丑以來國家の爲め非命に斃れ若くは禁錮落魄に陥りたる者に對 し更に寛宥の恩命下をさる

〔京都并江戸返達御用狀扣、一新録自筆狀、王政復古帳〕

三月廿三日太政官代方御呼出御渡之 御書付寫

今般朝敵ヲ除之外一切大赦と被 仰出候者大綱領ニ而其節目ニ亘候而者逆罪且人ヲ殺シ其情罪難免者ハ別段之事ニ 而其餘罪之輕重ヲ不分免科之處置可致候且又癸丑以來時體ニ係り 皇國之御爲と相考謬而矯激之所行ニ及邦憲ニ觸枉 死不祭之鬼と相成候者毛不少哉ニ相聞右之内實ニ忠奮ニ出可憐情狀有之者ハ跡式再興等之儀其程ニ應シ取扱冤魂ヲ慰 候様可致將又當時存在ニ而禁錮又は落魄致シ居候者茂有之候ハ、是又前文之趣ヲ以寛宥之可及措置 御沙汰候事

三月

三月廿三日我藩糞に英國公使參内の途次事變を生したる際警衛の任に當りし兵隊長堀内彈右衛 門等に差控を命す

〔江戸京都來狀扣〕

四月

堀内 彈右衛門  
井上 儀左衛門

右者二月晦日英國公使參朝之節警衛罷出候處別紙之通大政官より御達有之候付日數五日宛差扣被仰付旨被仰出候彈右 衛門儀者先月廿三日儀左衛門儀者同廿一日及達候

三月廿四日在京の各藩人員を調査申告すへき旨令達せらる

〔王政日新録〕(熊本縣廳所藏)



在京藩々

右當時在京之人數等別紙雛形之通相調當二十六日迄ニ可差出候尤以來増減有之節之其時々無相違可相届候事

三月廿四日 軍防局

惣人數 一何百人

銃隊

何百人

何方出兵

何百人

何方警衛

何百人

當時在京

一何百人

役人

一何門

大 炮

月 日

何 之 誰

内

辰三月廿三日

一今日太政官代へ鶴殿罷出候處軍防局より明日御呼出相渡書之書付有之候付寫罷歸候様演達有之左之通御書付被爲拜見候付寫取罷歸御書方上々御奉行達布告とも相濟候事

但御觸下藩々調書ハ此方様ニ而取揃差出候様との儀も演述いたし候事

三月廿四日立太后宣下につき在邑の諸侯は來廿七日名代を以て祝詞を奉啓せしむへき旨令達せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

三月廿四日太政官より御呼出 御渡之御書付寫

今十八日 立太后 宣下被爲濟候ニ付在國之面々爲名代重臣差出 禁中 大宮御所等に恐悅可申上候事

但廿七日罷出可申上事

三月

三月廿四日銅錢の通用相場を定め布告せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

三月廿四日太政官代より御呼出 御渡之御書付寫

銅錢ノ儀當時各國相場御酌之上自今一文ヲ以テ銀錢六文ニ通用被仰出候事

右者是迄其位ヒ當テ得ザルヲ以テ動スレハ奸商トモ異邦エ輸出イタシ候儀モ有之依之速ニ海内ニ布告被仰出候事

三月

太 政 官

三月廿四日平塚仕出之備同廿九日壬生邸着御用狀左之通  
由鹿備差立小簡拜啓仕候若殿様左京亮様益御機謙能遊御滯京奉恐悅候將各様愈御清榮被成御奉務珍重奉存候此許清水方一手無別條滯陣次私儀無異條在陣仕候付乍憚御休意被成下候様奉希候然者追々得貴意置候通江城押詰茂在外段ニ相成于今御國之御人數藤澤平塚大塚三驛ニ屯陣ニ相成藤澤本陣之所一兩日前平塚に陣移ニ相成申候江城之様子物見歩御使番等追々被差越探索有之先者何方迄も恭順之様子ニ相聞候へ共所々に旗下浮浪等屯集いたし鎮撫方ニ者役々も大心配之由ニ有之事之有無之境も未了解ニ至兼申候當時攻手緩ニ有之候次第ハ先日得貴意置候五ヶ條之談判ニ付江戸方より願出之趣も有之太政官に伺ニ相成候由定而御承知ニ而可有御座候現又此節備差立候一條ハ別紙之通督府より達ニ相成且内情者甲府表人氣六ヶ敷小藩ニ而者鎮撫出來兼據而此方様ニ被仰付候との旨ニ有之直ニ分隊柏原落合組共御物頭木造和岡大槻吉田組共ニ芦村横山即夕出立小田原より甲州越路ニ懸申候殘ル御人數大炮手殿手五十人本陣迄ニ而江

〔王政復古帳〕

三月廿四日平塚仕出之備同廿九日壬生邸着御用狀左之通

由鹿備差立小簡拜啓仕候若殿様左京亮様益御機謙能遊御滯京奉恐悅候將各様愈御清榮被成御奉務珍重奉存候此許清水方一手無別條滯陣次私儀無異條在陣仕候付乍憚御休意被成下候様奉希候然者追々得貴意置候通江城押詰茂在外段ニ相成于今御國之御人數藤澤平塚大塚三驛ニ屯陣ニ相成藤澤本陣之所一兩日前平塚に陣移ニ相成申候江城之様子物見歩御使番等追々被差越探索有之先者何方迄も恭順之様子ニ相聞候へ共所々に旗下浮浪等屯集いたし鎮撫方ニ者役々も大心配之由ニ有之事之有無之境も未了解ニ至兼申候當時攻手緩ニ有之候次第ハ先日得貴意置候五ヶ條之談判ニ付江戸方より願出之趣も有之太政官に伺ニ相成候由定而御承知ニ而可有御座候現又此節備差立候一條ハ別紙之通督府より達ニ相成且内情者甲府表人氣六ヶ敷小藩ニ而者鎮撫出來兼據而此方様ニ被仰付候との旨ニ有之直ニ分隊柏原落合組共御物頭木造和岡大槻吉田組共ニ芦村横山即夕出立小田原より甲州越路ニ懸申候殘ル御人數大炮手殿手五十人本陣迄ニ而江

明治元年